第二　我造船所ノ首長タルニ適當ナル佛國海軍技術官一名ヲ招聘スヘシ。

第三　前項ノ造船所首長ハ、佛國海軍各造船所ノ技手職工ヲ選拔シテ、我造船所ニ雇入ルヽコトヲ得ヘシ。

日本理事官ハ、佛國政府ヨリ前記三條件ノ承諾ヲ得タル後、我造船所ノ首長ニ適任ナル技術官一名ヲ擧ケテ其所屬トナシ、之ヲシテ百事ヲ斡旋セシム。而シテ理事官ハ、巴里ニ駐在シ、各地造船所ニ就テ、技手職工ヲ雇入ルヽモノトス。其雇入ノ順タルヤ、先ツ工事課長・建築課長及會計課長各一員ヲ選定シ、直チニ之ヲシテ我造船所ニ係レル事務ヲ執リ、並ニ注文機械ノ圖案ヲ製セシメ、以テ各商社ニ向ヒテ製造條約ヲ締結シ、次テ我造船所ノ建築ニ要スル機械物品ヲ買收シ、此工事ニ關スル頭目工手ヲ雇入レ、之ヲ同載シテ第一次運送ノ帆船ヲ發スヘシ。此時建築課長ハ、蒸氣郵船ニ搭シテ日本ニ先着シ、第一次船ノ横濱港ニ達スルヤ、首トシテ工頭建築船渠開鑿ニ著手シ、次テ倉庫及佛人居住ノ官舍ヲ經營スヘシ。

日本理事官ノ一行ハ、其事務ヲ結了シ、概略千八百六十五年十二月（其一日ハ我慶應元年乙丑十月十四日ニ當ル。）ヲ以テ佛國ヲ發スルヲ得ヘシ。而シテ購入機械ハ、最後ニ送付スルモノト雖、千八百六十七年ノ歲首（其一日ハ我慶應二年丙寅正月十五日ニ當ル。）ヲ以テ悉皆佛國ヨリ輸出シ、首長ハ千八百六十七年ノ歲首（其一日ハ我慶應二年丙寅十一月二十六日ニ當ル。）ヲ期シテ造船所ノ建築工事ニ從事シ、工場及修船臺ノ落成ニ及ビテ、造船工業ヲ起シ、千八百六十九年（其一月一日ハ、我明治元年戊辰十一月十九日ニ當ル。）ヲ以テ船渠築造ノ工ヲ竣リ、且各工場ヲ整理シ、日本衆工ヲシテ各自其業ヲ執ルニ堪ヘシメ、茲ニ始メテ横須賀造船所ノ完成ヲ告ゲ、以テ日本海軍ノ實用ヲ全備セシムベシ。

前項所屬ノ造船所設立方案ヲ議スルノ際老中以下諸員ハ、佛國公使及ウエルニート略ボ其議目ヲ決了スルニ及ビ、公使ハ一ノ建議案ヲ呈出シテ曰ハク、貴國政府果シテ此議目ヲ可決セバ、ロセスハ本議確定ノ條約書ヲ得テ、之ヲ本國政府ニ明スベシ、幸ニ艦隊司令長官ジョーライスハ、本月二十七日（我元治二年正月三十日。）ヲ以テ歸國ノ途ニ就カントス。故ニ貴官等ハ二十五日（我元治二年正月三十日。）ヲ期シテ條約書ノ調製ヲ了シ、ロセスハ之ヲ領收シテジョーライスニ交付スベシト。老中以下ノ諸員皆此議ヲ可トス。正月二十九日、幕府ノ製鐵所掛老

中水野和泉守・若年寄酒井飛驒守ヲシテ連署ノ條約書ヲ公使ニ授與セシム。

其條約書ノ原文左ノ如シ。（幕府ノ公文書ニ據リテ本項以下造船所ヲ製鐵所ト稱シ、製作所ヲ横濱製鐵所ト稱ス。）

製鐵所約定書

今般横須賀灣ヘ佛蘭西國ノ周旋ニ依テ製鐵所ヲ取建ルニ付、公使ヘ商議セシ處、上等機械官ウエルニー最モ其技ニ長ジタル故ヲ以テ薦揚セラレ、「アドミラール」厚情ヲ以テ上海ヨリ右ウエルニーヲ呼寄ラレ、同意シタリ。之ニ依テ爾後ノ爲メ約スル處ノ條目、左ノ通リ。

一、製鐵所一箇所、修船場大小二箇所、造船場三箇所、武器藏及役人職人等ノ役所共ニ、四箇年ニシテ落成ノ事。

一、横須賀灣地形地中海岸ツーロン灣ニ似タルニ寄リ、製鐵所ハ右地方ニ取建アル模式ニ倣ヒ、大概横四百五十間竪二百間ノ地坪ヲ以テ取建ル事。

一、製鐵・修船・造船ノ三局取建諸入用總計凡高一箇年六十萬「ドルラル」、都合四箇年二百四十萬「ドルラル」ニテ落成ノ事。

但、佛蘭西政府ヘ約定書相屆候上ハ、右ノ六十萬「ドルラル」取揃置ベシ。

猶四箇年ノ間年々納方「ドルラル」差支不申様可致事。

右ハ兩國政府ノ允准ヲ經テ、公使ニ於テハ其上等器械官ウエルニーニ專任ヲ命ゼラレ、我等ニ於テハ勘定奉行松平對馬守（正之）・軍艦奉行木下謹吾（利義）・目付山口駿河守（直毅）・栗本瀨兵衞（鯤）・幷淺野伊賀守（氏祐）ニ專ラ其取扱ヲ命ジ、只顧成功ヲ要スルモノナレバ互ニ彼我内外ノ間隔ナク懇誼ヲ本トシテ取極ルモノ也。

元治二丑年正月二十九日　水野和泉守（忠精）・花押

酒井飛驒守（忠毗）・花押（〇中略）

二月三日幕府ハ、佛國ヨリ提出セシ横須賀及横濱ノ二製鐵所ニ首長タル者ノ服務條約ヲ裁可シ、委員栗本瀨兵衞ヲシテ在横濱佛國公使館ニ就テ、其條末ニ記名押印セシム。其條約ノ撮譯左ノ如シ。

佛國海軍技士ウエルニーハ横須賀製鐵所設立圖案ヲ製シ、佛國公使及艦隊司令長官ノ檢閲ヲ經テ、之ヲ日本政府ニ呈シ、而シテ一時佛國ニ歸リ其政府ニ向ヒテ、日本横須賀製鐵所首長タルノ裁可ヲ請フベシ。既ニ其裁可ヲ得バ、日本理事官ノ佛國ニ着スルトキヨリ、凡百ノ事項ヲ周旋シ、以テ製

鐵所設立草案ニ揭グル首長ノ職事ヲ勤勉スベシ。

横須賀製鐵所ノ完成ニ至ルマデハ、其職事ヲ執ル、固ヨリ日本官吏ト差異アルベカラズ。故ニ佛國政府ノ俸給ヲ辭シ、之ヲ日本政府ヨリ受ルモノトス。其俸給ハ、公使ノ裁定スル所ニ據リ、年俸洋貨一萬弗トス。尙ホ服務ノ實況ニ因リテ增額スルコトアルベシ。

今回一時佛國ニ歸リ、前項ノ手續ヲ得テ首長ノ職ニ就キ、而シテ歸國中ハ、横須賀製鐵所ニ備附クベキ機械ヲ購入ノ爲メ、各地ニ往來スル旅費ト、後日再ヒ日本ニ來航スル旅費トハ、其俸給ヲ以テ之ヲ支辨スベシ。他年解雇歸國ノトキモ亦然リ。若シ日本政府ヨリ旅費ヲ給スルトキハ、俸給ヲ半減スベシ。但、過般上海ヨリ來航セシ旅費ト、今回佛國ニ歸航スル旅費トハ、其就職以前ニ係ルヲ以テ、別ニ洋貨千弗ヲ支給スベシ。

今回歸國ノ後、若シ止ムヲ得サル事故アリテ、日本政府ノ聘ヲ辭シ再ヒ來航セサルカ如キコトアルトキハ、日本派出ノ理事官ニ稟議シ、更ニ製鐵所設立事業ヲ負擔シ得ヘキ優等ノ技師ヲ撰拔シテ、既定ノ條欵ヲ遺漏ナク引繼キ、其設立上ニ於テ敢テ障碍スル所アラシムベカラズ。

佛國海軍士官ドロートルハ、横濱製鐵所ノ首長タルベシ。故ニ同所ノ設立方案及圖面ニ據リテ之ヲ完全竣成スル爲メ、凡百ノ事業ヲ負擔シテ、今ヨリ一箇年半職務ヲ勉勵スベシ。其俸給ハ公使ノ裁定スル所ニ據リ、年俸洋貨四千二百弗トス。但之ヲ月數ニ割賦シテ支給スベシ。

前項設立工事ヲ起スニ當リ、佛國工手ヲ傭役スルヲ許スト雖、其人員ハ三名其月俸ハ一名百弗ノ割合ヨリ超過スルヲ許サズ。而シテ常ニ日本譯官ト起居ヲ共ニシ、其通譯ノ便ヲ圖ルベシ。且在職中ハ一ニ製鐵所ノ事務ニ服シ、苟モ商賈販賣ノ事ニ關スベカラズ。

日本政府ヨリ横濱製鐵所需用品ノ檢査トシテ、其產出地ニ派出ヲ命スルトキハ、其命ニ從フベシ。旅行ノ費用等ハ、俸給ノ外別ニ之ヲ支給スルモノトス。而シテ其派遣地ノ開港若クハ開市場ニ非ルトキハ、必ズ横濱駐劄佛國領事ニ屆出ヅベシ。

首長ハ、職事ニ就キ、若シ日本官吏ト見解ヲ異ニシ、諍議ヲ生スルトキハ、横濱駐劄佛國領事ノ判決ヲ請フベシ。尙ホ覆審ヲ要スルトキハ、公使ノ處斷ヲ採ルモノトス。

二月四日、在横濱ノ製鐵所委員栗本瀬兵衞ハ、佛國公使ノ提出セシ製鐵所構成ノ圖案（即チウエルニーノ之ヲ調製シ、公使及艦隊司令長官之ヲ檢閲セシモノ。）甲乙二葉ヲ謄寫シ、之ヲ在江戸ノ委員ニ送付シ、建築著手ノ準備ヲ爲サシム。ウエルニーハ、既ニ此圖案ヲ調製セシヲ以テ、前項服務條約ニ據リ、一旦佛國ニ歸ル。甲圖ハ製鐵所構造全部ノ圖ニシテ、乙圖ハウエルニー歸國中、我委員ニ於テ竣成セシムヘキ土木一部分ノ圖ナリ。（中略。）○

二月幕府ハ、委員一名ヲ横須賀ニ派出シ、滯在日數二十日ヲ以テ江戸ヨリ交代シ、製鐵所設立事務ヲ統理セシメ、農民今井市兵衞ノ居宅（舊製鋼工場ノ中央ヨリ微西ノ方位ヲ占メシト云フ。）ヲ以テ會所ニ假用ス。（會所ハ官吏執務所ヲ云フ。）初メ木下謹吾・淺野伊賀守ヲ以テ會所派出員ニ充テ、次テ軍艦奉行石野式部ニ製鐵所委員ヲ命シテ、淺野伊賀守ニ代ラシム。爾後屢委員ヲ黜陟シ、派出員ヲ改選セリ。（中略。）○

三月十二日、委員ハ曩ニ横須賀製鐵所構造圖案ヲ佛國公使ヨリ領收シテ、爾來其構造計畫ヲ評議シ、此ニ至リテ横須賀村ニ於テ、三賀保・白仙・内浦ノ三灣ニ亘レル地坪七萬四千三百五十九坪强ノ地ヲ以テ製鐵所構造ノ敷地ニ充ツベシト決定セリ。然ルニ此地ハ、佐倉藩主堀田相模守ノ領所ニシテ、戸數僅

ニ二十二、村民ノ生業ハ漁ニ非サレハ即チ農ナリ。而シテ民有ノ地面ハ、屋敷地一反八畝十一歩、畑地二町九反九畝十八歩、山地四町三反二畝ノ地ナルヲ以テ、土地授受ノ制規ヲ踐ミテ之ヲ製鐵所ノ附屬地ト爲ストキハ、時日遷延シテ、急速製鐵所敷地ノ土工ニ着手スルコト、佛國公使ノ言ノ如クナル能ハズ。故ニ委員ハ、權宜ヲ以テ假ニ此地ヲ預所官吏ヨリ急受シテ直チニ土工ニ着手シ、制規上ノ土地授受法、地租免除法、及村民二十二戸ヲ轉地セシムルノ費用ヲ給與スル等ノ事務ハ、總テ勘定奉行ニ於テ調査處分スベキモノトシ、之ヲ老中ニ開申シテ、五月二十七日幕府ノ裁可ヲ得タリ。

四月二十五日幕府ハ、外國奉行柴田日向守ニ命スルニ、佛國使聘ノ任ヲ以テシ、之ニ委任狀ヲ授與ス。是レ製鐵所設立草案第八節ニ掲クル佛國派遣ノ日本理事官ニ充ツルモノナリ。而シテ又日向守ヲシテ、英國使聘ノ任ヲ兼ネシム。是ニ於テ老中水野和泉守・阿部豐後守ハ、書ヲ在横濱佛國公使ロセス及英國總領事代理チヤーレス・ウインチエストルニ贈リテ、各々其本國政府ニ報告セシム。當時外國奉行ノ屬僚水品樂太郎・富田達三・小花作之助・譯官福地源一郎・鹽田三郎及定役一名モ亦日向守ノ隨行ヲ命セラル。（中略。）○

五月二十日、是ヨリ先キ委員ハ、老中ノ命ヲ承ケテ前記製鐵所構造ノ圖案ニ就テ、其經費ノ豫算額ヲ調査スルニ、工場其他家屋ノ建坪ハ合計七千八百五十坪强ニシテ、之ヲ文久二年横濱ニ建設セシ英國領事館ノ構造ニ比較シ、尙ホ現今物價ノ騰貴セルヲ以テ、之ニ其騰貴ノ比ヲ加算スルトキハ、一坪金二十八兩三分强ニ當リ、卽チ總計金二十二萬六千兩ヲ要ス。然レトモ歐洲建築法ハ、當時未タ我邦ニ傳ハラサルヲ以テ、其工事ノ仕樣ヲ知悉シ難キカ故ニ、工場其他家屋ノ建設ハウエルニーノ再航ヲ俟チテ之ヲ議定スヘキモノトシ、又此圖案ニ揭グル大小船渠設立ノ海濱ヲ實測スルニ、水底稍淺シテ、泥濘ノ深サ八九尺ナレバ、果シテ其地位ニ適スルヤ否ヤヲ知ラス、故ニ船渠ノ築造モ亦ウエルニー再航ヲ俟チテ議定スヘキモノトス。是ニ因リテ以上二欵ノ經費調査ヲ除キ、現ニ其調査ニ著手シ得ベキモノハ、製鐵所設立ノ敷地ニ係ル土工ニシテ、卽チ內浦・白仙ニ跨カル山地立坪十一萬坪强ヲ開鑿シ、其土石ヲ以テ內浦・白仙及三賀保ノ三灣ヲ埋立テ、且沿岸卑濕ノ畑地ニ置土シ、滿潮ノ海面ヲ出ルコト、平均三尺ノ地ト爲スニ在リ。然ルトキハ、其埋立及地揚ニ要スル土石ハ、立坪四萬六千六百八十坪ニシテ、殘餘立坪六萬三千五百坪

ノ土石ハ、橫須賀灣外ニ投棄スヘキヲ要ス。卽チ山地開鑿三灣埋立等ヨリ、埋地沿岸地杭打立、石垣築造ニ至ルマテ、悉皆我邦慣用ノ土木法ニ據リテ落成セシムルトキハ、棧取木材尺締七千本、及經費金十二萬八千兩ヲ要スヘキノ豫算タリ。是ニ於テ委員ハ、此日之ヲ老中ニ具申シ、且此豫算額ヲ以テ土工ニ著手センコトヲ請フ。閏五月二十八日老中ハ裁可ノ命ヲ傳ヘ、且令シテ曰ハク、製鐵所ノ設立ハ、我邦創始ノ事業ニシテ、巨額ノ經費ヲ要スルカ故ニ、宜ク其ノ仕樣明細表ヲ勘定所ニ提出シ、努メテ費用ノ節減ニ注意スヘシト云々。

○中略。

閏五月三日、理事官柴田日向守ハ、屬僚六名ヲ率ヒテ江戶ヲ發シ、其五日英國郵船「ネボール」號ニ搭シテ橫濱ヲ拔錨シ、內海諸港ニ入リテ郵船ヲ更フルコト數次、六月二十六日スエス海峽ニ達シ、直チニ上陸シテ汽車ニ乘リ、翌日アレキサンドリヤニ著ス。○中略。即日郵船「ナヤンザ」號ニ搭シテ同地ヲ發シ、七月六日航路恙ナクマルセーユニ投錨セリ。是ヨリ先キウエルニーハ、既ニアレキサンドリヤ領事ノ電報ニ接ス。乃チ來リテ日向守ノ一行ヲ迎ヘ、九日之ヲツーロン造船所ニ導キテ連日其工場ヲ巡視セシメ、且其規模ノ概略ヲ說明

セリ。○中略。而シテ此一行ハ、十三日マルセーユニ復歸シ、十七日ヲ以テ巴里府ニ入ル。○中略。

九月二十七日○大陽曆十一月十五日。製鐵所敷地ノ開拓創業、卽チ內浦山地ノ開鑿ニ就キ、委員以下之ニ臨監シ、鍬入初ノ式ヲ行フ。橫須賀製鐵所建築ノ起工ハ、實ニ此時ニ在リ。委員ハ、曩ニ山地開鑿、三灣埋立、畑地地揚、及埋地沿岸ノ地杭打立、石垣築造ニ係レル木工ニ着手スルノ裁可ヲ得テ、ウエルニー提出ノ圖案ニ據リ、石垣築造ノ要アル海面地先ニ於テ杭木ノ打立テヲ試ミシニ、泥濘深キコト丈餘ニ達シテ、長サ四間三尺ノ杭木ヲ用フルモ、其ノ杭頭滿潮海面ヲ下ルコト二尺ナルニ非レハ、其杭末ヲ海底ノ地盤ニ達セシムル能ハズ。故ニ此尺度ヲ標準トシテ杭材買入ニ着手シ、杭材ヲ官林ヨリ伐出スルトキハ、其費用尺締一本ニ付永錢九百文ヲ要シ、之ヲ買入ルトキハ、永錢六百九十二文强ヲ要スルヲ以テ、終ニ本文ノ如ク決行スルニ至レリ。又山地開鑿等ハ、土工ハ其費用ヲ較算シテ請負ニ附スルヲ可トシ、入札ノ上、軍艦所用達大村五左衞門・橋本長左衞門ノ二人ニ負擔セシム。土工請負費ヲ製鐵所土木豫算額ニ比較スレバ、金二千百四十七兩强ヲ減ゼリ。且別ニ區域ヲ劃シテ白仙灣以北ノ土工ヲ寄場人足ニ負擔セシメ、土石運搬ノ用ニ供スベキ車輛ハ、江戶開成所々藏ノ米國製運送車ヲ以テ之ニ充ツルニ決セリ。爾來各部ノ土工ハ着々步ヲ進メテ、十一月ノ初ニ至リ、既ニ其事業ノ程度ヲ十分ノ六ニ達セシムルヲ得タリ。是ニ於テ開鑿土石ノ埋地用ニ供スベキモノヲ除クノ外ハ、總テ之ヲ橫須賀灣外ノ海中ニ投棄スベシト定ム。然ルニウエルニー提出ノ圖面附錄ヲ閱スレハ、廳舍及工場ノ敷地ハ、前記地揚ノ外尙ホ二尺ヲ增揚スヘシト揭ゲタルヲ以テ、灣外ニ投棄セントスル土石ハ、恰モ此工事ニ適用スヘキモノトシ、十一月十一日委員ハ、老中ニ具申シテ之ヲ實行セリ。山地開鑿ノ土石ヲ海外ニ投棄スルトキハ、其費用一坪ニ付永錢一貫百四十文ヲ要シ、之ヲ廳舍敷地ノ地揚ニ充ツルトキハ、永錢五百文ヲ要ス。是ヲ以テ終ニ本文ニ揭クル如ク之ヲ地揚ノ用ニ供スヘキニ決ス。然レトモ尙ホ一萬四百四坪三合ノ剩餘アルニ付、之ヲ灣外ニ投棄セリ。○中略。

慶應二年紀○中略。

正月二十六日、理事官柴田日向守ハ、英佛二國ノ使事ヲ了シテ、屬僚六員、軍艦組頭取肥田濱五郎、及軍艦組二員、佛人建築課長レノヲ、頭目ジユモン、職工バスチヤンヲ率ヒ、且工作器械ヲ搭載シテ、橫濱ニ著ス。○中略。

二月二日、委員ハ、曩ニ首長ウエルニーヨリ提出セシ製鐵所構造圖案附錄ニ據リテ、同人來航以前ニ建築スベキ船棟梁詰所白仙山ノ開鑿跡ニ設ケ、後日船賣掛ノ詰所ト爲シ、明治十八年今ノ各工場用具格納所。端船製造所ノ三棟ヲ、左ノ材料費額ヲ以テ鐵船工場新築ノ際、之ヲ撤去ス。塗師所

着手センコトヲ上請シ、三月二十六日幕府ノ裁可ヲ得タリ。工場ノ建築ハ、實ニ此時ヨリ始マル。

類別	坪數	材料	費額	一坪當リ費額
船棟梁詰所	五十四坪 六〇〇	木材尺締百七十二本七四	金千六百五兩餘	金十九兩二分强
塗師所	九十八坪 六〇〇	木材尺締百十八本四一 縱板長六尺二千三百九十二枚	金千八十四兩二分餘	金十一兩强
端船製造所	百九十六坪二〇〇	木材尺締百二十九本五七	金千五百二十兩二分餘	金七兩三分强

四月二十五日、首長ウエルニーハ、横須賀渡航手續ニ據リ、三月五日迄ニ落成セシ工作機械ト製圖工長メランング、及其妻書記モンゴルヒエー、運用方頭目リラシヨニー、舍密掛ボエルト共ニ、帆船モンゴリヤ號ニ搭シテ、マルセーユ港ヲ發シ、長崎ニ至リテ支那人亞福（ノフー）ナルモノヲ自家ノ厨夫ニ雇入レ、航路恙ナク此日横濱ニ着シ、翌二十六日一旦横須賀ニ來リテ、土木工事ノ現況ヲ視察シ、再ビ横濱ニ歸リテ公私ノ諸事ヲ整セル後、更ニ横須賀ニ來住セリ。〇中略。

（〇中略）

十二月二十九日、幕府始メテ製鐵所奉行ヲ置キ、寄合一色攝津守ヲ奉行ニ、同古賀謹一郎ヲ奉行並ニ任ジ、本所百般ノ事務ヲ統轄セシム。初メ首長ウエルニーハ、本所事務ノ景況ヲ視察シテ、意見ヲ小栗上野介ニ陳ヘ、自今本所ニ全權委員ヲ置キ、以テ諸般ノ事項ヲ總理決行セシムルヲ要シ、又所内ノ事務ハ、取締會計建築及倉庫ノ四課ニ分チ、屬僚ヲシテ之カ分擔ノ責ヲ明カニセシムヘシト請ヘリ。〇中略。是ニ至リテ幕府ハ、ウエルニーノ說ヲ容レ、新ニ製鐵所奉行ノ官職ヲ置キ、其翌晦日製鐵所掛若年寄立花出雲守ヨリ首長ニ通報シ、且自今攝津守謹一郎ト諸事ヲ協議シ、彼ノ四課設置ノ如キモ、之ヲ熟議スヘシト訓令セリ。〇中略。

三月製鐵所奉行ハ、首長ウエルニーノ計畫ニ據リ、建築課員ヲシテ、第一號船渠ノ開鑿ニ着手セシム。初メ其全長六十三間八分、其幅上面ニ於テ十七間六分、下底ニ於テ十六間五分、及其深サ六間三分二五、卽チ掘取立坪六千六百五十八坪二分、此經費金一萬六千九百十四兩永百二十八文九分ヲ以テ、其土工ヲ海軍所用達橋本長左衞門ノ請負ニ附ス。後其全長ニ於テ更ニ五間ヲ延ベ、其掘取方ヲ修正シ、之ニ要スル工費金二千四百八十四兩永七百五十六文一分ヲ增シ、更ニ請負員三名ヲ加ヘ、結局經費總計金一萬九千三百九十八兩永八百八十五文ヲ以テ船渠開鑿ノ土工ヲ請負ハシメ、十月ニ至リテ敷石ノ工

事ニ着手セリ。而シテ渠内ノ表面ハ、伊豆産及相摸産ノ石材ヲ以テシ、其裏面ハ「ベツトン」（砂利石灰及火山灰ヲ混和シタルモノ。）ヲ以テ之ヲ築造セリ。

四月八日、幕府ハ舍密掛ボエルガ製鐵所需用ノ煉瓦製造試業ヲ擔當シ、天城山産出ノ白土ヲ以テ之ヲ完製シ、爲メニ歐洲ノ輸入ヲ仰ガズ、且費用節減ノ成績アルヲ以テ、首長ウエルニーヨリ申請シタル賞與下賜ノ事ヲ裁可シ、製鐵所奉行ヲシテ賞金二百弗ヲボエルニ下付セシム。（後ニ赤煉瓦ヲモ製造ス。此等ハ小海方面ヨリ得タリト云フ。○中略。）

六月七日、製鐵所掛勘定奉行小栗上野介ハ、首長ウエルニーノ意見ニ據リテ、内國製ノ木液及瀝青（チヤン）ヲ改良シ、以テ需用ヲ充足セシメント欲シ、屬僚增田多錄郎ヲ横須賀ニ派遣シ、首長ニ就テ其製造ノ傳習ヲ受ケシム。多錄郎ノ此選ニ當レルハ、安政年中伊豆國君澤郡戸田村ニ於テ、露人カ「スクネール」船ヲ起工セシトキ、瀝青製造事業ニ關與シテ、稍ミ其製法ニ通スルヲ以テナリ。爾來多錄郎ハ、此法ノ傳習ヲ受ケテ、十一月中其製品ヲ携ヘ、歸府シテ成功ヲ告グ。是ニ於テ上野介ハ、翌年ノ春更ニ木液及瀝青ノ製造事業ヲ興シ、以テ其初望ニ副ヘンコトヲ期シ、十一月十七日之ヲ首長ニ報シ、併セテ其傳習ノ勞ヲ謝セリ。

〔參考一〕　海軍歴史ニ左ノ如ク見ユ。

六月十日（萬延元年。）和蘭コンシユル格メツトマン、幷造船師レイマン、造營師レミイ、御役所ニ罷出、高橋美作守・妻木源三郎・岡田安房守出席、應接書（○略。）

案スルニ此應答書横須賀船廠ヲ設ルノ前年ニ係ル。當時未タ其何レノ地ニ取建ヘキヲ決セスト雖モ、此工場ノ必用ニシテ、我カ都府近傍ニ無カル可ラストノ事ハ、嚮ニ永井岩瀨二氏ノ發議ニ胚胎シ、其後漸々船艦ヲ增加セシニヨリ、我カ海軍ノ將校モ、交々修船場ノ必要ナルヲ建議シ、又肥田濱五郎氏（○爲良。）ハ府下石川島ニ取建ルノ得策ナルヲ云ヘリ。適小栗上野介（○忠順。）勘定奉行ヨリ軍艦所ノ事ヲ兼勤シ、大ニ時勢ヲ察シ海軍ノ擴張スヘキヲ悟リ、首トシテ船廠設立ノ事ヲ主張シ、終ニ我邦ニ駐在スル佛國公使ニ謀リ、其周旋ヲ以テ、同國ヨリ諸器械ヲ購入シ、又工師ウエルニーヲ聘シ、地ヲ相州横須賀灣ト武州横濱トニ相シ、二工場ヲ設ルニ至レリ。是レ時勢止ヲ得サルノ事ト雖モ、府帑空乏ノ際、經營拮据、此二工場ヲ起スニ至ルハ、亦深ク嘉尚スベシ。

〔參考二〕横須賀海軍船廠史ニ據レバ、此後修船臺工事、明治元年五月ヲ以テ成リ、鋸鉋工場ハ、同十月、鍊鐵工場ハ二年五月、製罐所ハ同十二月、鐵造工場ハ三年九月ヲ以テ成リ、第一船渠開業式ハ四年二月八日ヲ以テ擧行セラレ、造船所官廳ハ五年四月廿三日全ク竣工シ、假官廳ヨリ轉徙ス。是ヨリ先四年四月七日横須賀製鐵所ノ稱ヲ改メテ、横須賀造船所トス。首長ウエルニーハ、雇期限滿了後モ猶佛人雇使期間其位置ニ留マルコトト爲リ、七年十二月三十一日ヲ以テ解任ス。

姓名	フランソワー・シオンス・ウエルニー	横須賀造船所首長　ウエルニー
官等	佛國海軍アンジエニヨール(大技士)(佛國海軍リウテナン、ド、ヴエツソー相當官。	
勳賞	ショバリエー、レジヨンドノール	
奉職	十箇年半	
俸給	一箇年一萬弗	
生地	佛國オーベナール、ドツシユ	

本所ニ於テ擔當シタル工業

竣工ノ部

弘明丸	横須賀丸	蒼龍丸	十馬力船二隻

蒸氣泥浚船　各種小蒸氣船　起重檣船　船臺三箇所

船渠二箇所　觀音崎第三號燈臺　品川第四號燈臺　城ケ島第四號燈臺

野島第一號燈臺　其外道路海岸石垣、溝渠、各工場、倉庫、官廳等

方今築造中ノ部

灣口波止場　走水横須賀間水道

同人ハ本所創業以來、内外艦船二百〇五隻ノ修理ヲ管掌シ、且横濱製鐵所創業以來、其事務ヲ監督シテ、今日ニ至レリ。

明治七年十二月三十日明治天皇謁見仰付ラレ、勅語ヲ賜フ。

ウエルニーニ賜ハリシ勅語

我邦造船所ヲ創設セシ以來、十一ケ年ノ久シキ、汝首トシテ其職ヲ奉シ、强ク其力ヲ効シ、諸場ノ建築及我新造艦船ヨリ内外修理ノ艦船其他ノ製造事業ニ至ル迄、一々之ヲ擔當シ、遂ニ今日ノ成績ヲ見ル。是レ實ニ汝ノ功勞、朕、深ク之ヲ嘉賞ス。且ツ歸路恙ナキト、將來ノ幸福トヲ望ム。

ウエルニー氏奉答文　澤水少匠司譯

天皇陛下ニ奉答ス、

天皇陛下ニ奉職中、數多恩惠ノ勅語ヲ拜受シ奉リ、今般我政府ニ歸任セントスル期會ニ望ミテ、御滿足被レ爲レ在ル段被二仰出一、難レ有　天皇陛下ニ奉レ謝ル。惶恐謹言。

佃島炮臺築造

是年〇元治元年(紀元二五二四年)。**佃島**〇市内京橋區。**炮臺ヲ築ク**。〇東京通志。

霸都時代ノ港灣

佃島炮臺築造事蹟

佃島砲臺築造　東京通志ニ、

佃島砲臺

京橋區佃島南端海中ニアリ。東西凡三拾九間、南北凡四拾間、面積凡千三百七拾坪。元治元年甲子幕府之ヲ築キ、明治ニ至リ修理ヲ加ヘ、陸軍省ニ屬ス。

横濱製鐵所建設

二年乙丑（元治〇四月十六日改元、慶應元年（紀元二五二五年）。）一月横濱（武藏國久良岐郡。）製鐵所建築ノ工ヲ起ス。八月廿四日丙辰（慶應元年（紀元二五二五年）〇丙辰、三正綜覽。）ニ至リテ成ル。（横須賀海軍船廠史。海軍歷史。）

横濱製鐵所建設事蹟

横濱製鐵所建設　横須賀海軍船廠史ニ據レハ、元治元年幕府造船事業ヲ起サムト欲シ、之ヲ横濱駐劄佛國公使レヲン・ロセスニ詢ルヤ、ロセス先ツ小工場ヲ横濱ニ起スノ利ヲ說キ、事業總理者トシテ横濱港碇泊軍艦機關士ジンソライ及士官ドロートルヲ薦メタルコト、別項既ニ之ヲ記ス。佛國海軍大技士ウエルニー草スル所ノ製鐵所設立案ニ、「日本政府造船所設立ニ先タチテ至急ノ著手ヲ要スルモノハ、一ノ製作所ヲ横濱ニ設ケ、現時所有ノ工作機械（米國ヨリ購入セシモノヲ云フ。）ヲ据付ケ、以テ艦船修理ノ工事ヲ起シ、併セテ本邦人ヲシテ西式工業ヲ習肄セシムルニ在リ、是ニ因リテ佛國海軍士官ヲ雇入レ、以テ其事業ヲ擔當セシムヘシ、然レトモ着實ナル邦官ヲシテ之ヲ調理セシメサレハ、其功ヲ奏スル能ハサルヘシ、其建築ハ今ヨリ一年以内ニ竣工セシメ、其經費ハ、造船所設立費ヨリ支出スルモノトス」、「本所（製作所。）ハ、第一節ニ略述シタル汽船修理及工業傳習ノ二件ヲ以テ事業ノ主眼トシ、而シテ其設立ノ地タル横濱本村ヲ以テ之ニ適スルモノトス、卽チ此村ノ山麓ヨリ海濱ニ通スル新道ニ傍ヒテ延亘百二十「メートル」、幅員若干ノ地ヲ占據シ、前岸ニ石垣ヲ築キ、周圍ニ外壁ヲ遶ラシ、正門ヲ設ケテ其内ニ樓屋ヲ構造シ、之ヲ官衙ニ充テ、其傍ニ煉鐵、鑄鐵、模型、旋盤、鑪鑿、製罐、製帆、船具、木工ノ各場ヲ設ケ、又其鐵工場ノ中央及後部ニ、汽機ヲ据附ケ、以テ各種ノ製作機械ニ運動力ヲ通スルノ用ニ供セシム。」ト有リ。慶應元年二月三日定ムル所ノ横須賀横濱兩製鐵所首長服務條約中ニハ、

佛國海軍士官ドロートルハ、横濱製鐵所ノ首長タルヘシ。故ニ同所ノ設立方案及圖面ニ據リテ之ヲ完全竣成スル爲メ、凡百ノ事業ヲ負擔シテ、今ヨリ一箇年半職務ヲ勉勵スヘシ。其俸給ハ、公使ノ裁定スル所ニ據リ、年俸洋貨四千二百弗トス。但之ヲ月數ニ割賦シテ支給スヘシ。

ト見ユ。

二月〇慶應元年。横濱製鐵所建築ノ工ヲ起ス。是ヨリ先キ佛國公使ハ「セミラミス」號ノ機關長ジンソライヲシテ幕府所有ノ工作機械ヲ點檢セシメ、之ヲ横濱製鐵所ヘ据付クルヲ以テ、適當トセリ。是ニ於テ委員ハ、首長ドロートル、譯官北村元四郎後名村泰藏ト改稱ス。及屬僚杉浦清介後名ヲ赤城ト改ム。以下ヲシテジンソライ等ト協議セシメ、前記〇略。設立原案第二節ニ據リテ、其計畫ヲ定メ、横濱本村ニ於テ、先ツ其敷地ノ土工ヲ竣ヘ、此ニ至リテ其建築ニ着手ス。〇中略。

八月二十四日、横濱製鐵所ノ建築竣工ス。委員小栗上野介以下之ヲ檢視セシ後、直チニ工作機械ノ据付ニ着手セシメ、九月下旬ヲ期シテ之ヲ完成スヘシト命セリ。而シテ曩ニ工業材料購入トシテ上海ニ派遣セル首長ドロートルノ歸期九月下旬ニアリ、且職工雇入順序、其他各件ノ規則書ノ如キモ、過般ドロートルノ之ヲ制定シタルニ因リ、工場ノ準備全ク九月中ニ整頓セハ、製鐵所設立原案第一節及第二節ニ據リテ、直ニ艦船修理ノ事業ニ着手セントス。然ルニ數名ノ委員交互ニ其事務ヲ執ルトキハ錯雜ノ憂アルヲ以テ、九月十八日委員連署シテ專任官一員ヲ置クコトヲ上請ス。幕府卽チ在横濱ノ委員栗本瀨兵衞ニ横濱製鐵所專任ヲ命ス、時ニ九月二十日ナリ。

横濱製鐵所之義ニ付申上ル書付

製鐵所掛

横濱表製鐵所御取建之義、去月十四日私共出張仕、夫々出來榮見分仕ル處、其後殘仕事迄も追々出來ゐるし、當月下旬頃ニ成、機械据付方等迄、都る出來相成ル積御座ル。就る者此程鐵板爲御買上、上海表ゟ罷越ル佛人ロートル義も、當月ニ者歸着ゐるし、直樣御船御修復之方ニ取掛りル積、最前申立置、且同人出帆前差出しル御場所御雇可相成諸職人數、其外規定書面之趣有之ル間、是迄御取建御普請等之御用柄共違ひ、都る永久之御用途ニ御座ル處、御取建御用掛之者ニ者、其儘取扱ル者、自然御用向入狂ひ、終に者混亂之弊出來不仕共難申ル間、御場所向一手引請ル全體之者被仰付ル〻、後來御便宜筋と奉存ル。依之此段申上ル。以上。　丑〇慶應元年。九月

本村の製造局は、左之如く區別ふす。

第一、鐵具鑄造局　　第二、黃銅鑄造局

第三、鍛冶局　　第四、鑢工局

第五、黃銅及銅製造局

第六、匠局

第七、庫

鐵具鑄造局ハ、機械之諸部分を鑄造する爲ふり。

歐人頭目　壹人。　日本人頭目　壹人。

職人　六人。

但、此職人は、江戸に於て鑄工之内より撰むへし。

黃銅鑄造局は、機械中小部之黃銅を鑄造する爲ニ備ふ。

歐人　無レ之。　日本人頭目　壹人。

同職人　壹人。

鍛冶局

歐人頭目　壹人。　日本人同　壹人。

職人　拾壹人。

但、當時雇ふ所の日本人等は、其業巧ふるを以て、留め用ゆべし。

鑢工局

歐人　壹人。　同職人　貳人。

日本人頭目　壹人。　同職人　拾五人。

此者等ハ鑢工に用ひ、且機械を清潔なす爲に備べし。

黃銅及銅製造局

歐人頭目　壹人。　歐人職人　五人。

日本人頭目　壹人。　日本人職人　貳拾人。

但、内十人は、江戸に於て銅工之内より撰み、其他拾人は、鍛冶職の内より撰らむべし。

匠局

歐人頭目　壹人。　日本人頭目　壹人。

日本人職人　六人。

但、此日本人等は、歐人頭目の指揮をうけ、製造局に於る、蒸氣機械を備る木船を製作せしむべし。

庫

庫の鍵を所持する只壹個の日本人頭目ニ、余か免許を得、彼に諸具を請者に非ざる外は、決ゐ庫を開かざるべし。此日本人頭目は、彼等に與へゐる諸

品を算當し、且庫を保護する爲に設くべし。

日雇頭目（原本員數ナシ、故ニ不レ記。）　日雇　六人。

此者等は、救火大氣筒ニ用ひ、且此機械の用法を習熟せしめ、及び毎日此機械を清潔せしむ。日雇頭目は、一夜中失火の爲に兼る此機械の準備しあるを卒業前に點檢し、他日雇等は、日中は木及鐵等を運輸なす爲に用ひ、且大氣筒を運轉せしむるが爲に勉て强健なる者を撰むべし。

夏時は、朝六時半より業を初め、冬は朝七時半より始む。冬夏共午前十一時より午後一時まで午餐のため休業なす。午後は冬夏共五時に卒業す。

各製造局日本の頭目は、毎朝業を始る前、且午後一時に諸職人等を呼集め、且點檢し、もし故なく其期を誤る者は、其日の工を不レ與、且三回左の如くの事件あらば差戻し、再び用ひざるべし。各製造局日本人頭目は、五時卒業之後、各彼の局中の諸具を清潔ニなさしめ、且毎夕其局の不清潔なる時は、日本の士官より譴責を與ふべし。

日本人の各頭目茶、茶を煎或は冬を防ぐ爲たりとも、局中に火を燃さる樣着意すべし。若日本の士官機械の鍛冶局及鑄造局の外ニ火を見る時は、日本職人頭目を譴責すべし。日本の士官、毎夕諸局の戸を閉たるを巡見し、且戸を閉る前に、鍛冶局の火悉く消たるを着意すべし。

日本諸職人は、悉く同樣の服を着すべし。又日本頭目は、袖端にガロンを着すべし。ガロンは、無襟の如き物なり。

諸日本職人頭目幷職人共、可レ成丈ケ上等の者ニる、且若き者を採用すべし。

栗本貞次郎、長田銈之助、飯高平五郎譯之。海軍歷史

海軍奉行建置

海軍奉行建置事蹟

慶應元年乙丑（紀元二五五年。）七月八日庚午（庚午、三正綜覽。）幕府海軍奉行ヲ置ク。

○柳營補任。

海軍奉行建置　柳營補任ニ、

海軍奉行

慶應元乙丑年七月八日初ゟ被仰付。場所高五千石。席之儀、陸軍奉行之上、

慶應元丑七月八日柳之間席ゟ。同元講武所奉行。同二寅八月四日若年寄格。同三卯正月十九日若年寄被仰付。當御役兼帶。同四辰正月廿三日御免。

高一万八千石　大關肥後守忠裕。

内海守備更命

二年丙寅（慶應二年。紀元二五二六年。）二月十六日丙午（丙午、三正綜覽。）内海第六炮臺（武藏國。）守備ヲ高崎（上野國。）城主大河内輝照（松平右京亮。）ニ命ス。是年（慶應二年（紀元二五二六年）。）

霸都時代ノ港灣

外ニモ内海守備ノ更命有リ。（藤岡屋日記。）

内海守備更命事蹟

内海守備更命　藤岡屋日記ニ據ル。

二月十六日（慶應二年。）

周防守宅（板倉勝靜。）ニ家來呼相渡書付

内海御警衛六之御臺場御預眞田信濃守（幸教。）御免ニ付、其方ニ被仰付ハ間、防禦之手筈、兼ゐ嚴重可被申付置ハ。尤内海御警衛之面々ニ可被申合ハ。且本芝一丁目眞田信濃守上ヶ陣屋地、家作共御臺場附爲陣屋、可被下ハ。

松平右京亮（大河内輝照。）

八月五日（慶應二年。）

河内守（井上正直。）宅ヱ銘々家來呼可渡書付

松平右京亮ヱ。

内海御警衛六之御臺場御預ヶ被成御免候。且本芝壹丁目陣屋地御用ニ付、家作共可被差上候。

阿部長吉郎ヱ。

内海御警衛六之御臺場御預松平右京亮御免ニ付、代其方ニ被仰付候間、防禦之手筈兼ゐ嚴重可被申付置候。尤内海御警衛之面々ヘ可申合候。且本芝一丁目松平右京亮陣屋地家作共、御臺場附爲陣屋被下之。

阿部長吉郎（正靜。）

是ヨリ先、本堂親久・平野長裕鐵炮洲炮臺ヲ預ケラル。

八月十五日（慶應元年。）

本堂内膳（親久）　平野内藏助（長裕）　家來内意

今度鐵炮洲炮臺御預被仰付候ニ付、勤方之儀ハ、是迄内海炮臺御預之御方樣准取計仕、海陸炮臺御預之御方樣ヱ御警衛筋之義ハ、萬端打合置候樣可仕候哉。

一、御据付御筒實丸空炮並小銃調練空炮共折々打試仕度、不苦義ニ御座候ハヽ、實丸打試之節ハ、近邊船留被仰付度、尤御据付御筒實丸之儀ハ、春秋兩度程、空炮之義ハ月々一度宛打試度、何レも日附之義ハ兼ゐ御屆申上候樣可仕候。

一、御場所御引渡後ハ、内膳内藏助時々爲見廻罷越、且大炮小銃共打試之節ハ、爲見廻罷越度奉存候。

一、非常之節ハ、御警衛之義ニ付、人數差出候節、武器相携、著具之義ハ、着込陣羽織陣笠相用、出番之節ハ、模樣ニ寄、火事具着用可仕候哉。

一、非常之節、內膳內藏助出張指揮仕候心得ニハ御坐候得共、出火之節ハ差出、模樣ニ寄出張仕候心得ニ御坐候。右之段各樣迄御內慮奉伺候樣申付候。以上。

本堂內膳（○親久）家來　田邊叶

平野內藏助（○長裕）家來　吉村勝馬

八月十五日

十二月廿三日（○慶應二年。）

宅ヱ銘々家來呼可渡書付

本堂內膳ヱ。

本堂內膳（○親久。）

鐵炮洲砲臺御預中御筒手□方其外諸事格別心を用ひ、且此程同所邊燒失之砌、消防方も行屆候趣ニ相聞、平常家來共ヱ申付方宜處之義、一段之事ニ候。

平野內藏助ヱ。

平野內藏助（○長裕。）

同文言。

——藤岡屋日記

燈臺建設約定

五月十三日辛未（○慶應二年（紀元二五二五年）○辛未、三正綜覽。）幕府英佛亞蘭諸國ト改稅約定

燈臺建設約定事蹟

ヲ爲シ、開港場附近ニ燈明臺浮木瀨印等ヲ設クルヲ約ス。（○海軍歷史。）

燈臺建設約定　海軍歷史ニ據ル。

慶應三丁卯年、英國公使パークス氏ヨリ我カ沿海樞要ノ地ニ、至急燈臺ヲ建設スヘキ旨ヲ勸告ス。因テ海軍局ニ其掛リ員ヲ命セラレ、屢公使ヘ引合、器械買上方ヲモ依托セシカ、幾程モナクシテ、邦內騷擾ノ事起ルニ會シ、其事未タ緒ニ就クニ及ハスシテ止ム。然ルニ當時ノ文書大半散佚シテ徵ス可カラス。今僅ニ其前年定ムル處ノ條約及ヒ一二ノ事歷ヲ爰ニ附記シテ、聊他日ノ參照ニ供ス。

改稅約定之內

第十一條　日本政府ハ、外國交易ノ爲メ開キタル各港最寄、船々ノ出入安全ノタメ、燈明臺浮木瀨印木等ヲ備フベシ。

第十二條　此約定書取行フ以前、双方政府許允ノ沙汰ヲ待ニ及ハサル故、日本慶應二年丙寅五月十九日（西洋千八百六十六年第七月一日）ヨリ取行フベシ。

右約書ヲ政府許允ノ上ハ、双方ノ全權其段互ニ通達スベシ。

右通達ノ書面ハ、双方君主保證ノ代リトス。

此證據トシテ、前文全權契約書ニ名ヲ記シ、調印セリ。日本慶應二年丙寅五月十三日(西洋千八百六十六年第六月廿五日)江戸ニ於テ双方全權各其國語ヲ以テ之ヲ記セリ。

水野和泉守 花押
英國特派全權公使
パークス 印
佛國全權公使
ロッセス 印
合衆國代理公使
ボルトマン 印
蘭國目代コンシュルゼネラール
ポルスブルック 印

卯(慶應三年)六月五日、軍艦奉行木村兵庫頭英國公使館ヘ相越。公使申立之趣、左之通り。

一、江戸近邊六ヶ所計り燈明臺ヲ立ル積。右ヶ所ヲ取極メ置度ハ。右ニ付英日本士官壹兩人ツヽ見分として被差遣度ハ事。

一、下ノ關へも取建ハ積、見分之者御遣し被下ハ哉。

一、日本海測量板行ニ相成可然事。(京都銅板ニいたしハヘハよろしくハ。)

一、軍艦貳艘程、測量船ト極メ、測量爲致可然、殊ニ寄英國より御貸し申ハるもよろしく、併未治定ハ難申ハ。

一、甲比丹ブロク、近日到着可致、其者ヲ賴燈明臺ノ場所ヲ見分爲致ハ積。

一、燈明臺之圖ハ、ブロク一覽之上、御渡可申、夫迄公使方へ御預り可申ハ。

一、燈明臺之代金五萬ドル、正月中談判有之、追々英國ニる立替置ハ間、近日御渡被下度事。

此次之飛脚船ニる送り度、今日ヨリ七日目ニ相成可申ハ。

一、附屬器械代五百「ポンドステルリング」、前同斷之節御送り被下度ハ事。

一、燈明臺之事ニ巧者ナル者ヲ雇入可然、又ハ留學生之内ニる傳習爲受可然旨、今便米國ヨリ申越ハ事、雇入之方早手廻しニる可然と存ハ。

一、外國事務局之官人ヘモントと申人ヘ向ケ、金子御遣し可然ハ。其金子ハ「バンク」ヘ御渡相成可然ハ。

一、明後七日築地海軍所ヘアドミラール罷出、第五時頃ニ出向ハ間、兵部殿肥後殿ニも御出張被下度事。

丁卯〇慶應三年。六月、英公使パークス氏發議し、我政府年々下ノ關償金として拂込へき金圓を以て、我横濱より初め、要所々々ニ燈臺を建築せば、彼我航海之便幾許そと。此議各國同意を表す。同年十月十四日英米佛之艦將並横須賀御雇之ウエルニ氏を聘し、我れ富士山艦を以て相州洋に航す。時烈風、艦之運轉自在ならず、紀伊大島、下田之御崎、城ケ島房州出崎等、粗決定す。直ニ船を廻らし、房之館山ニ入る。上陸妻良村ニ到、猶地勢を案す。此時同行之艦將ハ、

米國シャナドア艦將　ゴルドズバラ氏
英　ハスリスケ艦將　ヒヲキト氏
佛　横須賀製造所長　アメイ氏
　　ウエルニー氏等なり。

同年六月十四日小笠原圖書頭外國奉行江連加賀守於接遇所、英國公使ヘ引合、左之通。

常夜燈代價　五萬弗（三ケ月目可二相渡一積。但、六月十四日ヨリ九十日目。）

インゼニール雇料其外入用　六千五百弗（六月十七日横濱拾壹番「ラプチンバンク」ニ可二相渡一積。）

但、通辨官サトウ同所ニ相越し積。

常夜燈代價殘金　凡五萬弗程（最初五万弗渡濟より三ケ月目可二相渡一積。）

佛國より御買上常夜燈器械三座到着次第其社狀等英公使ヘ御示之積。

右之通。

覺

此度日本政府於て、インゼニール職之者、上等壹人、下等貳人雇んとするニ付、則ケ條左之通。

一、給料　上等一ケ月ニ付洋銀四百五拾枚。下等同同百五拾枚。
　但英國サウスアムプトン出帆之日より勘定をべし。
一、支度手當金　上等「パウントステルリング」百五拾四枚半。下等同壹百枚。
一、船賃　上等之船賃壹人ニ付「パウントステルリング」百五拾四枚半。尤上等之者妻を連參りしハヽ、貳人分與ふべし。
一、日本在留中御用向にて旅行之節ハ、日本政府より路金を與ふべし。
一、旅宿　上等之インゼニール夫婦にて參りしハヽ、居間四間、寢間四間、其他臺所小使部屋相備りし家一棟貸し與ふべし。

一、下等者都て上等之差圖を受、上等者又燈明臺取扱ハ日本長官之差圖に從ふべし。

下等之インゼニール者、居間二間、寢間二間、其他臺所小使部屋相備リハ家一棟ニ、兩人旅宿致すべし。

一、若英國出帆之後、僅ニ一ケ年之內、態と暇を乞し節者、船賃並手當金之高を日本政府に返却すべし。

一、萬一五ケ年未た盡ざる內、日本政府無故ニ暇を遣しハ節者歸國之船賃並英國公使存寄ニ隨ひ、相當之償金を可差出、尤行狀不正、或者職業不行屆等者、隨分暇を可遣譯と心得ハ。若右樣之義有之ニ付、暇を遣ハ節者、差出ニ不及。

一、燈明臺器械修復掃除並インゼニールの職業ニ於て專用なる道具等買入ハ爲ニ、彌雇入ハ約束決定次第、上等インゼニールに「バウントステルリンク」五百枚、日本政府より預置へし。

一、下等之インゼニール船ニ乘組之節、若第二等之船客ニて罷越ハハヽ、船賃の減する事不少、手當金バウントステルリンク五拾枚を限て與ふべし。

インゼニール入用の金子

第一等旅客三人、ソウスアムプトンより之船賃壹人ニ付百五拾四「ポンド」ステルリンク十シルリンク」にして、會計四百六十三「ポントステルリンク十シルリンク」なり。

インゼニール頭取の支度金貳百「ポントステルリンク」。

同下等之者支度金壹人ニ付百「ポントステルリンク」にして貳人分二百「ポントステルリンク十シルリンク」。

總計八百六拾三「ポントステルリンク十シルリンク」。

燈明臺取建場所

英國公使申立ハ分

一、横濱　第一等燈明臺二個　第二等同三個　第三等同壹個

右六箇所、

伊豆岬ロック島　第一等同　壹個。

安房ヒラタチ（キンク岬）　第一等同　同。

江戸灣之入口洲崎岬又ハミラ崎之內都合次第　第二等同　同。

霸都時代ノ港灣

杉田玄瑞譯

江戸灣西方相模岬　第二等同　同。
同觀音崎　第二等同　同。
横濱へ突出せる一隅に碇泊すべき燈明船　第三等同　同。
一、長崎硫黄島の西隅　第一等同　同。
一、箱館港入口ニ碇泊せんとする燈明船中ニ西方より横濱への航路三難所之内二ケ所　第三等同　同。
九州島之最南隅なるサタノ岬。紀州之最南隅なる潮見崎又大島。　第一等同　同。
三難所之内
三本嶽即レットヒールドロック

此壹ケ所茂取建費用莫大なるを以、強て相願不レ申し候

和蘭公使より申立し候分

一、横濱　第一等燈明臺　第二等同　第三等同　貳個　壹箇　合六箇

右六箇茂、

横濱灣船中　第三等同　同。
伊豆ロック島　第一等同　同。

製鐵所位置建議
製鐵所位置建議事蹟

安房ヒラタチ岬又ハ其近傍　第一等同　同。
江戸灣入口ノ東方但、洲崎岬或ハミラ之崎兩所之内。　第二等同　同。
江戸灣之西方相模岬　同　同。
同ハノン崎恐クハ觀音岬ナルベシ。　同　同。
一、長崎硫黄島の西方　第一等同　同。
一、箱崎船中　第二等同　同。
西方より横濱の航路三難所に　第一等同　同。
但、九州島の南方シタの岬キシンの南端大島及び三本嶽即レットヒールトロックなり。

八月○慶應二年(紀元二五二六年)。軍艦組頭取肥田爲良○濱五郎。製鐵所位置ヲ、石川島○市内京橋區。越中島○市内深川區。邊ニ定ム可シト建議ス。○海軍歴史。

製鐵所位置建議　海軍歴史ニ據ル。

○上略。先是肥田濱五郎○爲良。ヨリ造船場地所ノ見込書ヲ出タセシコト有リシモ今散亡シテ知ルニ由無シ。因テ同人荷蘭國ヨリ歸朝之後、再ヒ申出テタル書付ヲ以テ、其意見之趣旨ヲ知ル可キ爲メ、左ニ記之。

製鐵所御建興地所之儀ニ付利害取調し候趣申上し候書付

霸都時代ノ港灣

肥田濱五郎○爲良。

私儀去ル申年○萬延元年。亞行御用中、彼地ニ於テ「マリーネアルセナール」○海軍造營場之義、以下海軍造營場ト譯申い。其外諸製作所等、細觀歸朝致し候後、度々建白仕し候通、海軍造營場ト唱し候場所ハ、蒸氣機械、同釜、製作所大小鍛冶場、同銅鐵鑄物場、造船場、修船場、綱具綯立場、同貯所、帆縫所、同貯所、木材挽割所、同圍場、大小砲車臺、幷小銃臺製作所、大小砲置場、彈丸貯所、小銃鎗鉄刀等之武器貯所、水夫病院等ハ、不レ及レ申、兵粮油木炭石炭筆墨紙蠟燭水夫胴服同冠物履物等ニ至ル迄、軍艦所用之義ハ、悉皆具備仕、平常修復ハ勿論、總テ軍艦打建ヨリ戰地ニ仕出候迄、右壹ヶ所ニテ萬事差支無レ之樣設有レ之候ヲ、卽海軍造營場ト相唱候間、既ニ海軍御開キニ相成候上ハ、速ニ御取建無レ之候テハ不二相成一義ト奉レ存候。尤右造營場御取建相成候テモ、是ヲ護衞スルノ兵備無レ之、戰爭之節、若敵ニ奪ルヽニ至リ候テハ、彼我地ヲ換、却テ味方ヲ破ルノ器ヲ製スル所ト相成候事故、能其地理ヲ熟考シ、砲戰ニ不レ拘、辨利之地へ取建、是ヲ守リ候タメ、堅牢之砲臺ヲ築キ置候ハ、造營場之定法ト承リ申候。依レ之御國內地理之利害ヲ勘考仕候處、此上追々海軍御盛大ニ相成、造營場一ヶ所ニテハ御差支ト申次第ニモ至リ候ハヽ、其節ノ形勢ト從來ノ模樣ヲ合考仕、猶五六ヶ所モ御取建相成可レ然御儀ニ候得共、差向當節御取建可二相成一地ハ、江戶內海之外可レ然地無レ之候。尤內海ト申候テモ手廣ニ付、尙此內ニ地理之善惡有レ之候間、見込之場所等兼テ申上置、私和蘭滯在中、同國海軍ミニストルの見込書等相添、尙彼地ヨリ再應建白仕候得共、別ニ御卓見等被レ爲レ在候御義ニ候哉、此度相州橫須賀表へ海軍造營場御取建之義御治定相成、既ニ經營之御模樣乍二見受一愚意申上候ハ恐入候得共、同所ハ地理不レ宜哉ニテ、石川島ヨリ越中島洲崎モヨリ之方至極可レ然地理ト奉レ存候間、何卒同所ト御場所替相成候樣仕度、依レ之兩所之利害、左ニ奉二申上一候。

一、相州橫須賀之方ハ、岸深ニテ大船之入津モ自在ニ候間、其場所而已ニ取候テハ至極可レ然哉ニ候得共、一體之地形ニ取候得ハ、右等ニ難レ換之凶害有レ之候。其故ハ、第一海口ニ近ク奧行深カラサルヲ以テ、敵船之彈丸造營場ニ相達シ可レ申哉、縱令彈丸不レ達候共、右樣之地理ニ於テ海陸ヨリ攻來リ候敵ヲ防候ニハ、如何樣之砲臺ヲ築候共、防禦無二覺束一儀ト奉レ存候。自然防禦ハ出來候トモ、敵船此沖合ニ縱橫致シ、我軍艦之通路ヲ妨候ハヽ、兼テ太平之日

多分之入費ヲ以テ戰爭之用ニ設候場所、期ニ臨ミ其功ヲ奏セサルヲ以テ、殆費物ニ異ナラサル而已ナラス、尙莫大之武器ヲ備ヘ、多分之兵卒ヲ分チテ是ヲ守ラサレハ、右ニ有之候處之武器兵粮其外一切之機械、忽敵手ニ陷リ、味方ヲ破ルノ大害ト相成候間、無餘儀費物ヲ守リ候歟、或ハ莫大之國用人力ヲ費戰爭之用ニ設ケ候場所、其節ニ至リ取毀候歟、兩樣之外策有之間敷哉奉存候。尤兼テ建白仕置候通、江戸海口富津觀音崎十國臺旗山猿島等之要所ヘ、巨大之御臺場ヲ築キ、尙其間ニ裝鐵之蒸氣浮臺場ヲ備ヘ、是ヲ外廓ノ虎口ト被遊、羽田邊ヨリ品川沖手ニ御臺場ヲ築キ、同小形裝鐵蒸氣船ヲ備ヘ、之ヲ內廓ノ虎口ト被遊候得ハ、橫須賀ハ稍外廓門內ニハ候得共、前條申上候通リ造營場ハ實ニ大切之場所ニ候間、內廓之內ニ可有之筈ト奉存候。其上同所ハ如何ニモ海口ニ近ク、殆戰場同樣ニ候間、戰爭之節自然不穩且絕ス砲聲之耳ヲ貫キ候等ヨリ、下賤之職人共不得安心逃去候ハ必然之義ニ付、造營場ハ無事ニ候共、更ニ其用ヲナシ難ク候。加之萬一外廓相破レ候節、同時ニ造營場贅物ト相成候歟、或ハ敵手ニ陷リ候テハ、內廓ノ防禦モ亦百倍之苦心ヲ釀シ候義ト奉存候。殊ニ外廓之御備向モ中々御大業ニテ、急速御出來之義如何可有之哉、何レニモ御不辨之義耳ト奉存候。

一、石川島越中島邊ハ、品川沖ヨリ直徑凡三里餘モ有之候間、敵船之彈丸造營場ニ達スヘキ患モ無之、且萬一敵手ニ陷リ候時ハ、江戸ト共ニ候間、則內海戰爭之結局ト奉存候。乍併海底遠淺ニシテ大船之入津不辨ニ候間、此度和蘭國ニ於テ御買上相成候バツヘルモーレン（是ハ水底ヲ浚ヒ候蒸氣機械ニ御座候。右功用ハ別紙內海浚方繪圖面ニ添有之候。）ヲ以テ、我軍艦之自在ニ入津可致程新ニ澪ヲ堀リ、其土ヲ以土手水門等ヲ築キ、別紙圖面之通リ其內ニ軍艦之溜リ所ヲ拵ヘ、且右造營場守衞トシテ堅牢之御臺場御建築有之度義ニ付、夫等之御入費ハ中々不少御儀ニ候得共、右臺場之義ハ、造營場之有無ニ不拘、御府內御警備ニ必可有之筈ト奉存候。左候得ハ一事兩用之義ニ候間、橫須賀之方ヨリ却テ御入費ハ御手輕ニ當リ可申哉。元來海軍造營場之所要ハ、戰爭之用ヲ主ト致シ候義ニ付、期ニ臨ミ其功ヲ奏セサル樣ノ地理ヘハ、如何程御出方相減シ候共、御取建被遊間敷義ニテ、縱令御出方ハ相嵩候共、非常之節御用立候地理ヘ御取建被遊、御當然之義ト奉存候。且右樣ノ造營場御府內近傍ニ有之候得ハ、諸民其機械之辨利ヲモ悟リ、自然自力ヲ以他ノ諸機械ヲ求メ、或ハ

木材ヲ挽或ハ織物ヲ織候樣相成、民間利用之道等御開キ旁、一ツハ人知ヲ起シ候一端ニモ相成可申哉。殊ニ御府内ニ候得ハ、諸職人モ得易ク、且邊鄙ヘ御差遣シ相成候ヨリ、自然役々之御宛行諸職人共賃銀モ御手輕ニ付、多年之内ニハ右等之御利益モ不少義ニ有之、且前文申上候バツヘルモーレンヲ以、品川御臺場内手ヲ浚ヒ、水流ヲ安ク仕候得ハ、年々堤川除ケ等之御入費モ相省ケ、隨テ川上之水損モ減シ、諸廻船之入津モ辨利ニ相成候事故、右ハ相當之石錢御取建相成候得ハ、夫是之御利益ニテ追々ハ造營場御臺場等之御入費モ御取戻シニ相成候譯、旁地理ト申、實ニ十全之義ト奉存候。』

右申上候件々ハ、先年中ヨリ諸書籍ヲ調ヘ、或ハ其道ニ巧者ナル者ニ承リ候義ニテ、猥ニ管見ヲ主張致シ候義ニハ決テ無之候、尤佛人ハ横須賀ノ方ヲ可然地理ト申上候哉ニモ承知仕候得共、和蘭海軍ミニストルハ、別紙之通リ石川島越中島之邊可然旨申之候。且昨年中英佛蘭三ケ國海軍造營場ヲ歷觀仕候ニ、和蘭海軍ミニストルの論尤穩當ト奉存候。既ニ和蘭ニ於テモ、別紙同國小全圖之如ク、海口ニ近キフリツシンク並ニウエジイフの海軍造營場ヲ不殘アムストルダムヘ可引移之議論有之由、右ハ初代ナポレヲン之築候巨大之砲臺有之、私共見受候處ニテハ、實ニ堅牢ト奉存候程ニ候得共、夫スラアムストルダムヘ引移候位ニ付、夫是ヲ推考仕候テモ横須賀ハ不可然地理ニ候間、何道御入用ヲ被爲掛候義ニ候ハヽ、同所ハ速ニ御差止被遊、出格之御英斷ヲ以、直ニ石川島越中島之方ヘ御場所替被仰出候樣致度、尤右ハ何レモ國家之安危ニ拘リ候義ニ付、大事件ニテ、中々拙文ヲ以難申盡、纔ニ九牛之一毛ヲ申上候義ニ付、尙委細之義ハ、御尋問被成下候得ハ見聞之事實、巨細可奉申上候。依之和蘭海軍之ミニストルヘ地理之善惡問合候節之返答書、幷和解、洋板江戸海圖、小和蘭全圖、品川沖御臺場内浚方築建方繪圖、及ヒバツヘルモーレン圖相添、此段奉申上候。

寅〇慶應二年。八月

横須賀海軍船廠史ニ、四月〇慶應元年。是ヨリ先幕府ハ造船所ヲ府下石川島ニ起サント欲シテ、先ツ其工作機械ノ注文及工業ノ傳習ニ從事セシムルカ爲メ、軍艦組頭取肥田濱五郎ニ、軍艦組二名ヲ副ヘテ、和蘭國ニ派遣セリ。〇下略。」ト見ユレハ、爲良ノ和蘭行ハ、實ニ造船所ヲ石川島ニ經營スル準備ナリシナラム歟。記シテ後考ヲ俟ツ。

九月六日壬戌○慶應二年（紀元二五六年）○壬戌、三正綜覽。是ヨリ先將軍家茂○德川。是歲○慶應二年（紀元二五二六年）七月廿日丙子○丙子、三正綜覽。ヲ以テ大坂城○攝津國。ニ薨ジ、八月廿日丙午○慶應二年（紀元二五二六年）○丙午、三正綜覽。喪ヲ發ス。九月三日己未○慶應二年（紀元二五二六年）○己未、三正綜覽。柩大坂港○攝津國。ヲ出テ、海路東歸シ、是日○慶應二年（紀元二五二六年）九月六日。江戸湊ニ着ス。○藤岡屋日記。明治前記。

將軍柩江戸湊着

將軍柩江戸湊着事蹟

將軍柩江戸湊著　左ノ如シ。

二十日○慶應二年八月。

一、今朝六ツ時前、御不例被爲重し旨、渭川院方申上、御小性一同御休息に罷出、無程御用掛衆御側衆被出、引續御名代美濃守殿○稲葉正邦。被出、于時謂川院御座所方薨御被遊し段、伊豆守殿○松平崇廣。前に申上、御同人方御名代美濃守殿に申上、無程引、御料理之間こゐ、薨御被遊し段、伊豆守殿方安房守に御達、夫々に同人相達、詰之外御小性引申し。

一、八ツ半時前、一橋中納言樣○德川慶喜。無程御入之御樣子に付、御側衆跡に付、頭取一人、平二人、御玄關迄御出迎に罷出し處、八ツ半時御入、大廣間通御黑書院御控所に被爲入し。

但、御出迎に参罷出し得共、一橋樣御側向御座敷内に御供致しし に付御小性参御側衆跡に、牡丹之間迄罷越、夫方又々御側衆同樣、大廣間通引申し。

三日○慶應二年九月。

一、御道書之通被爲成、八ツ半時過、安治川壹町目御船場に御著棺、直樣伊豫小早船に被爲召、七ツ時過御出船、六ツ時頃天保山迄被爲成、少々御猶豫、無程御本船トンハルトン御船にゐ炮發有之、直樣御出船、五ツ時前御召トンハルトン御船に無御滯被爲入し。

一、御召伊豫小早船に参、備中守殿○酒井忠讜。安房守、備後守、右近將監、主殿頭、民部少輔、遠江守、淡路守、久之助、九郎右衞門、吉五郎御乘船、表方町奉行松平大隅守、牧野若狹守、幷御作事下奉行壹人乘船致し。

一、西洋七字過、御本船トンハルトン御船に御乘込、直ニ御作事方御軍艦方等にて御座所に御安座相成、十字比壹岐守殿上樣御名代拜禮被致し。相濟、美濃守殿、遠山信濃守殿○友詳。も、自拜被出申し。

一、四ツ半時前御膳上る。四ツ半時五寸比、萬端御都合宜、天保山沖御出帆相成申し。尤順風にゐ御船も迅速有之し。○中略。

五日

一、夜半比より遠江灘、夫より相模灘御通船被遊、四ツ半時過御膳上る。引續金玉糖御間物上る。

一、八ツ時前葡萄上る。

一、七ツ時前御膳上る。

一、七ツ半時比浦賀沖御通船、暮六ツ半時前品川沖御著船、今晩御碇泊爲御注進、御目付新見相模守卽刻罷越申し趣承込。

——昭德院殿御實紀

六日

一、昨五日夜六ツ半時頃、品川沖に御著船に相成し付、四ツ時前御迎船幷押送船參りしに付、二番頭今日當番之者、安房守初十六人、幷御小座敷詰半頭、濱御殿に御先に罷越申し。

一、同刻御召御迎船、大川御座幷大茶船トンハルトン御船に參りしに付、直樣御支度にて御召積に相成、大茶船被爲召、大川御座初押送船等にて御引船、其外トンハルトン御船、幷富士山御船バッテイラより、小筒隊御固めに出、又陸地よりも御船迄、小筒組御警衞罷越、九ツ時過、濱御上り場に無御滯御着船に

相成。

但、御召船に御側衆備中守殿・丹後守・土佐守・若狹守・駿河守・下野守・大隅守・御小納戸頭取下總守・平三人乘船、大川御座に隱岐守初壹番頭之者不殘乘船。

一、御上り場に、御城より周防守殿・稻葉兵部少輔殿・大關肥後守殿・立花出雲守殿・村松伊勢守殿・大澤筑前守殿・室賀伊豫守殿・其外諸役人・幷方々樣より御名代之御用人等罷出居平伏、夫より御車にる被爲入、御成御門內御取建物之處にて暫く御猶豫、其節御作事方にて御車臺御仕附致し、八ツ時前諸向宜段申上、無程御挾箱出、八ツ時濱御庭御發棺、濱大手通、木挽町五丁目橋御渡越、夫より尾張町通左に、坂下御門、夫より御裏御門通石之間に被爲入、同所にる御車に御移替、土圭間通御座之間御入頭通、御次より御休息上段に、七ツ時前無御滯御著棺、夫より御作事方御支度相直し、北御向に被爲入しる御作事奉行初、支配之者共、不殘引申し。

一、御出迎御老若、御側、御途中一同被致御供、且御留守居・御年寄衆・若年寄衆、御休息迄被致御供、御作事方引しる、御老若御側衆迄被引申し。

一、御途中之儀、御出迎之者、御供一同、無地熨斗目麻上下に付、御小性之方・御大

小持・御小性頭取之分・無地熨斗目麻上下着用致し候様、伊勢守殿より御達に相成し。

但、頭取之者着服之儀は、御留守御小納戸頭取にて達有之、濱奥向控所役所にて着替いたし。

右小性頭取にる、替々御大小袋入之儘、御棺脇御左右に持參申し。

——慶喜公御實紀

同日〇慶應二年八月廿六日。河内守殿御渡

公方様御不例被成御座し候處、御養生不爲叶、去ル廿日卯之上刻、於大坂表薨御被遊し。奉絶言語し。此段今日出仕無之面々に可被達し。八月廿六日

公方様御尊骸、御軍艦にる江戸表に被爲入、増上寺に御葬送可被遊旨、去ル廿一日於大坂表、被仰出し間、此段向々に可被達し。

九月六日

出雲守御渡　御目付に。

御尊骸、只今品川沖に御着船、今朝濱御庭に御上陸、即日西丸に御着棺被遊し。此段早々向々に可被達し。

但、爲御出迎出仕之面々、四時罷出し様可被達し。九月六日

今六日夕七時二寸前、濱御庭より御棺御入城被遊し。

右之通御座し。

九月六日

鈴木新右衞門

——藤岡屋日記

二十日〇慶應二年七月。將軍大坂城ニ薨ス。遺命シテ一橋卿ヲシテ家ヲ嗣キ、征長ノ軍ヲ指揮セシム。

二十日〇慶應二年八月。將軍ノ喪ヲ發ス。一橋卿後嗣タリ。

三日〇慶應二年九月。將軍ノ柩、大坂ヲ發ス。海路ヲ經、六日江戸ニ至ル。

——明治前記

濱庭海軍所設置

濱庭海軍所設置事蹟

十一月十七日壬申〇慶應二年(紀元二五二六年)〇壬申、三正綜覽。濱庭〇市内京橋區。ヲ廢シテ、海軍所ヲ置ク。〇藤岡屋日記。慶喜公御實紀。

濱庭海軍所設置　濱庭ヲ廢シ、海軍所ヲ置クコト、左ノ諸書ニ見ユ。

十一月十七日〇慶應二年。濱掛り御目付に。

平岡丹波守〇道弘。渡ス。

霸都時代ノ港灣

濱御庭に海軍所御取建しに付ある為、濱御殿地惣體、海軍奉行並に被成御預、是迄濱御殿奉行支配向之者共、海軍奉行並支配に被仰付し間、得其意、右之者に何もか可被申渡し。尤引渡方等之義為、海軍奉行並可被談し。

稲葉美濃守殿（正邦。）御渡

海軍奉行並に。（菅沼左近將監に渡。）

濱御庭に海軍所御取建に相成しに付ある為、濱御殿地惣體、其方共に被成御預、是まで濱御殿奉行支配向之者共、何れも支配に被仰付し間、得其意、請取方等之儀為、濱掛御目付可被談し。

十一月十七日持歸。

——藤岡屋日記

十七日（慶應二年十一月。）

濱御殿奉行　小川泰助

御役御免、勤仕並小普請入被仰付之。

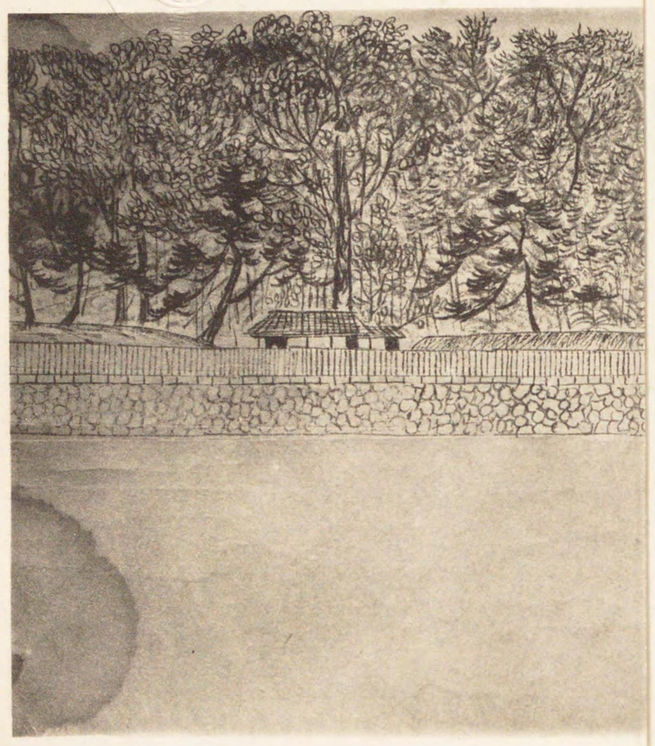
右於御右筆部屋縁頰、列座同前（老中列座。）同人（稲葉正邦。）老中。申渡之。若年寄侍座。

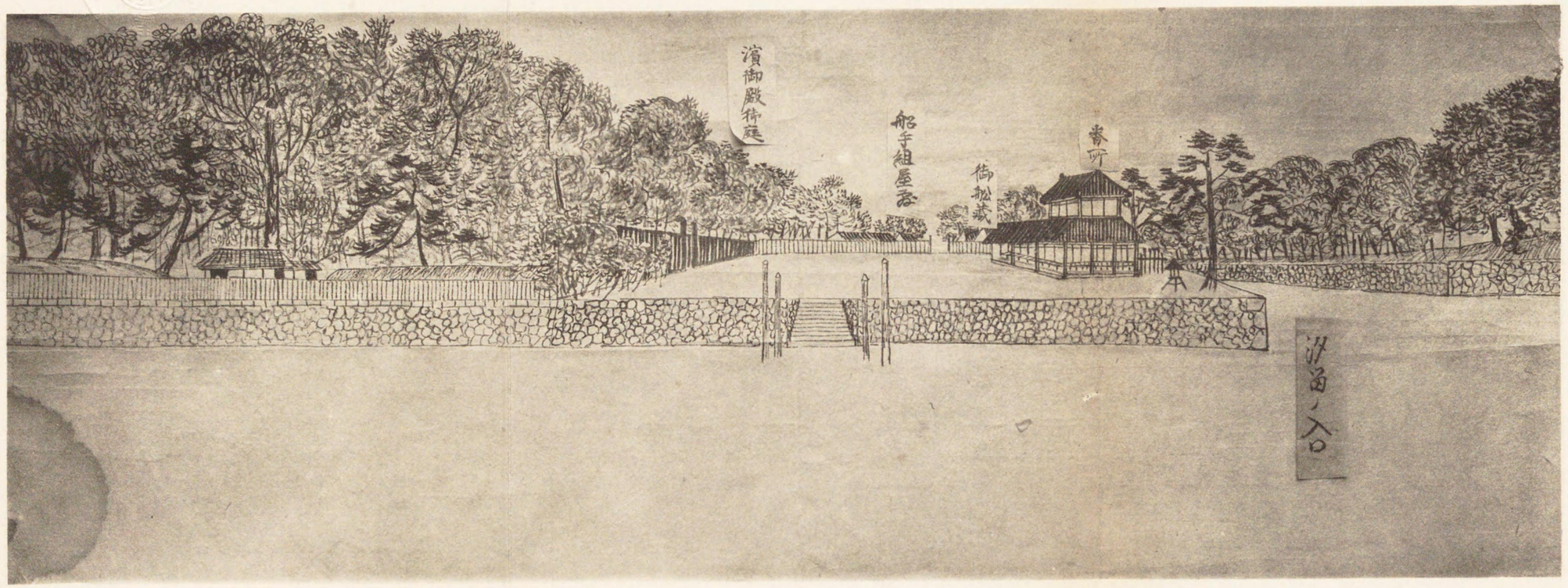
八日（慶應三年五月。）

一、御目付に

濱庭上り場

東京　中島高義所藏




濱御殿待庭
船手組屋敷
御船蔵
番所
汐留ノ入口

覺

濱御殿之儀、先般海軍所に被仰出ゐに付ゐは、御遊園之名義は、御廢止之事に付、同所大手等之唱は無之ゐ間、下馬札等も取拂ゐ樣、可被致ゐ事。

——慶喜公御實紀

〔附記〕 築地海軍操練開始

同日 ○慶應三年正月九日。是日ヨリ江戸築地ニテ、海軍ヲ操練ス。

——明治前記

附記 築地海軍操練開始

明治天皇慶應三年丁卯○紀元二五七年。三月十三日丁卯○丁卯、三正綜覽。前橋○上野國。城主松平直克○大和守。ニ上總國富津ノ守備ヲ命ス。此外ニモ內海守備ノ更命有リ。○藤岡屋日記。明治前記。

內海守備更命

內海守備更命 左ノ如シ。

內海守備更命事蹟

卯○慶應三年。三月十三日

宅ニ銘々家來呼可渡書付

松平大和守へ

松平大和守○直克。

上總國富津御備場御用丹羽左京大夫御免ニ付、代り其方へ被仰付候間、防禦之手筈嚴重可被申付置候。尤御勘定奉行浦賀奉行へ可被談候。依之內海御警衞二五之御臺場御預被成御免候。且芝新網町並增上寺表門通海手陣屋地御用ニ付、家作共可被差上候。

丹羽左京大夫へ

丹羽左京大夫○長國。

內海御警衞二ノ御臺場御預松平大和守御免、代其方へ被仰付候間、防禦之手筈、兼ゐ嚴重可被申付置候。尤內海御警衞之面々可被申合候。且芝新網町松平大和守上り陣屋敷、家作共御臺場附爲陣屋地被下之。依之上總國富津御備場御用辨御預所共被成御免候。尤御勘定奉行へ可被談候。

堀田相摸守へ

堀田相摸守○正倫。

內海御警衞五ノ御臺場御預松平大和守御免ニ付、代り其方へ被仰付候間、防禦之手筈、兼ゐ嚴重可被申付置候。尤內海御警衞之面々へ可被申合候。且增上寺表門通海手松平大和守上り陣屋地、家作共御臺場附爲陣屋地被下之。依之

相摸國御預所共被成御免候。尤御勘定奉行へ可被談候。

松平丹羽守へ

松平丹羽守○戸田光則。

相摸國御備場御用浦賀表御警衞並御預所共被成御免候。尤御勘定奉行浦賀奉行へ可被談候。

右三月十三日持歸。

五月廿四日○慶應三年。

酒井雅樂頭○忠續。

內海御警衞二ノ御臺場御預丹羽左京大夫御免ニ付、代り其方ヱ御預被仰付候。芝新網町陣屋附屋敷、御臺場附として被下之。

丹羽左京大夫○長國。

奥州白川城在番被仰付候間、家來差遣し、相應之人數を以勤番可被申付候。依之內海御警衞二ノ御臺場御預被成御免候。

——藤岡屋日記

十三日○慶應三年三月。二本松侯富津ノ守衞ヲ止メ、品川第二砲墩ヲ守ラシメ、前橋霸都時代ノ港灣

侯第二第五砲墩守衛ヲ止メ、富津ヲ守ラシメ、佐倉侯相摸守衛ヲ止メ、第一砲墩ヲ守ラシメ、松本侯浦賀守衛ヲ止メ、後ニ金澤武藏。侯米倉丹後守昌言。ニ命シ、浦賀製鐵所ヲ守ラシム。

同日〇慶應三年五月廿四日。二本松侯品川第二砲墩ノ守衛ヲ止メ、〇中略。姫路侯ニ第二砲墩ヲ守ラシム。

——明治前記

直克〇松平大和守。

同年〇慶應三年。三月十三日、内海二五ノ炮臺場ヲ免セラレ、上總國周准郡富津炮臺場預ケ換命セラレ、富津町ニ於テ臺場附ノ陣屋ヲ賜ル。

——松平家譜

〔附記〕新田島組船手

附記 新田島組船手

御船手代々記

五 但、御船藏組屋敷共、箱崎町ニ有レ之候。

新田島組

當所〇新田島、今深川區佐賀町。ハ、寺院地ニ有レ之處、寛永十九午年天野孫左衛門勤役之節元地御用ニ付被召上、爲代地當所七千坪被下置候。尤横堀茅沼共右坪之内ニ有之、大川通御船藏建坪地所往還共四百八十坪餘御引渡相成、御船藏並御役宅組長屋共出來仕候。其後頭方御役宅享保度居屋敷勤相成、御役屋敷内享保十七子年八月二日御側衆澁谷隱岐守殿二千六百坪相渡リ、寛延二巳年十二月廿二日御側衆小堀下總守殿ヱ相渡候。當時水主同心住所二千二百五十二坪八合ニ罷成、銘々坪割拜領仕、文化二丑年十月小普請方ヱ繪圖面差出置申候。

水主同心四拾八人、高二拾俵二人扶持宛。

水主同心三拾人之處、承應元辰年向井右衛門組ヨリ三人增シ、小濱彌十郎組ヨリ二人相增、三十五人、同二巳年細井佐次右衛門組ヨリ六人增シ、明暦二申年向井五郎左衛門組ヨリ二人增、合四十三人相成、元祿十一寅年岡田佐太郎組ヨリ五人相增、都合四拾八人、當時增減無御座候。

勤役 石川六左衛門重勝

右ハ、元和九亥年初る御船奉行被仰付、寛永十九午年死去、跡役天野孫左衛門。

勤役二十二ヶ年 天野孫左衛門重房

右ハ、寛永十九午年御役被仰付、明暦四戌年死去。

勤役 坂井八郎兵衛成爲

右ハ、明暦四戌年八月三日御目見ヨリ御役被仰付、延寶七未年死去。

勤役六ケ年 兒島助左衛門正朝

右ハ、延寶七未年八月大御番組頭ヨリ御役被仰付、貞享元子年十一月御役御免被仰付候。

勤役三ケ年 細井宗左衛門勝正

右ハ、貞享元子年十一月廿六日御書院地田帶刀組與頭ヨリ御役被仰付、同三寅年六月死去。

勤役十三ケ年 小倉半左衛門正仲

右ハ、貞享三寅年七月御目付ヨリ御役被仰付、元祿十一寅年二月十五日御先手筒頭被仰付候。父小倉忠左衛門。

勤役九ケ年 逸見八左衛門

右ハ、元祿十一寅年二月十五日御目付ヨリ御役被仰付、寶永三戌年正月御先筒頭取被仰付候。

右ハ、寶永三戌年正月廿八日寄合ヨリ御役被仰付、同六丑年五月廿日死去。

勤役四ケ年 川窪六左衛門

右ハ、寶永六丑年六月朔日御小性組ヨリ御役被仰付、享保七寅年十一月願付御役御免被仰付候。父堀十兵衛。

勤役十四ケ年 堀七郎兵衛

右ハ、享保八卯年正月廿八日新御番曾我平次郎組與頭ヨリ御役被仰付、同十六亥年十二月六日死去。

勤役九ケ年 柘植小左衛門

右ハ、享保十七子年正月十一日御書物奉行ヨリ御役被仰付、同十九寅年五月二日死去。

勤役三ケ年 埋檜主計

右ハ、享保十七子年七月朔日中奥御番ヨリ御役被仰付、元文五申年十二月廿七日死去。父幸山十郎左衛門。

勤役九ケ年 幸山主水

勤役六ケ年 川勝勘左衛門

右ハ、延享三寅年八月廿一日寄合ヨリ御役被仰付、寛延四未年八月十一日死去。父川勝伊左衞門。

勤役三ヶ年　川井監物

右ハ、寛延四未年十二月廿七日寄合ヨリ御役被仰付、寶暦三酉年十二月十一日死去。

勤役六ヶ年　岡山新十郎

右ハ、寶暦三酉年十二月廿九日御小納戸ヨリ御役被仰付、同八寅年十二月廿五日西丸御先手御役替被仰付候。

勤役三ヶ年　竹本次左衞門

右ハ、寶暦八寅年十二月廿五日西丸御書院番松平長門守組與頭ヨリ御役被仰付、同十辰年九月十四日死去。

勤役三ヶ年　爲井又六

右ハ、寶暦十辰年九月廿日御納戸ヨリ御役被仰付、同十二午年十二月十五日御留守居番御役替被仰付候。

勤役七ヶ年　三浦五郎左衞門

右ハ、寶暦十二午年十二月十五日御小納戸ヨリ御役被仰付、明和五子年八月御留守居番御役替被仰付候。

勤役九ヶ年　清水典膳

右ハ、明和五子年八月十五日先御小納戸ニゟ寄合ヨリ御役被仰付、安永五中年九月十五日御先手ゟ御役替被仰付候。

勤役七ヶ年　内藤傳左衞門

右ハ、安永五申年十月六日元方御納戸頭ヨリ御役被仰付、天明二寅年四月廿七日死去。

勤役二ヶ年　坂部三十郎

右ハ、天明二寅年五月十二日御膳奉行ヨリ御役被仰付、同三卯年七月十三日願ニ付御役御免被仰付候。父坂部三十郎。

勤役四ヶ年　人見又兵衞

右天明三卯年七月廿四日御書物奉行ヨリ御役被仰付、同六午年五月廿七日死去。父人見又兵衞。

勤役十五ヶ年　橋本喜平太敬質

右ハ、天明六午年六月十七日御膳奉行ヨリ御役被仰付、寛政十二申年四月廿三日西丸御徒頭ニ御役替被仰付。父橋本喜八郎。

勤役二ヶ年
曾我又兵衛朝祐

右ハ、寛政十二申年四月廿三日西丸御小納戸ヨリ御役被仰付、享和元酉年八月廿六日御徒頭ニ御役替被仰付。養父曾我又左衛門。實父兄ニ〆、實父曾我又次郎。

勤役三ヶ年
戸田次郎左衛門

右ハ、享和元酉年八月廿一日一ッ橋民部卿殿用人ヨリ御役替被仰付、同三亥年十一月廿一日願ニ付御役御免被仰付候。養父戸田藤七郎、實父本多半十郎。

勤役三ヶ年
服部頼母貞勝

右ハ、享和三亥年十一月廿四日中奥御番ヨリ御役替被仰付、文化二丑年十一月八日御徒頭取御役替被仰付候。父服部主水。

勤役七ヶ年
立花大吉種郷

右ハ、文化二丑年十二月八日御小納戸ヨリ御役替被仰付、同八未年閏二月十二日御徒頭ニ御役替被仰付候。養父立花左兵衛、實父稲垣安藝守。

勤役三ヶ年
松平彌九郎忠順

右ハ、文化八未年閏二月四日中奥御番ヨリ御役被仰付、同十酉年八月八日御徒頭ニ御役替被仰付候。養父松平縫殿頭、實父松平和泉守。

勤役七ヶ年
松浦忠右衛門

右ハ、文化十酉年八月御小納戸ヨリ御役被仰付、文政二卯年三月十七日御先手頭ニ御役替被仰付。父松浦忠右衛門。其後天保二卯年六月御役御免。

勤役十九ヶ年
古屋平左衛門豐晨

右ハ、文政二卯年四月朔日田安右衛門督殿用人ヨリ御役被仰付、天保八酉年三月廿六日老衰上病氣ニ付願之通御役御免被仰付。因年寄候迄相勤候ニ付、時服二ッ被下候。父古屋伴藏。

勤役三ヶ年
大久保與右衛門忠興

右ハ、天保八酉年六月八日二ノ丸御留守居ヨリ御役被仰付、同十亥年三月廿四日御徒頭ニ御役替被仰付候。父大久保喜右衛門。

勤役五ヶ年
長谷川平藏宜昭

右ハ、天保十亥年三月廿四日御小納戸ヨリ御役被仰付、唯今迄之通リ御役料御定高其儘被下候。同十四卯年三月廿九日不行届キ之義有之候ニ付、御役被取放小普請入閉門。

勤役十二ヶ年　藤澤彌兵衛次敬

右ハ、天保十四卯年四月三日御天主番之頭ヨリ御役被仰付、安政元寅年十一月願之通病氣ニ付御役御免相成候。

勤役九ヶ年　久保勘次郎

右ハ、安政二丑年十一月兩御番ヨリ御役被仰付、文久二戌年七月御役御免相成候。

御軍艦奉行持

右ハ、文久二戌年七月五日ヨリ御軍艦奉行組水主同心被仰付、慶應二寅年九月海軍奉行幷軍艦奉行組水主同心被仰付、同三卯年八月十七日海軍所附同心ふ名目唱替候樣申渡、同四辰年八月御用人組勤仕並被命、同年九月願之通御暇奉願、明治二巳年十二月廿日願之通リ歸藩被仰付、横須賀勤番之頭支配三等勤番組罷成。

元東京深川永代橋際新田島組屋敷地坪二千二百五十二坪八合五勺。大川通御船藏地所四百八拾坪餘。

海軍所附同心四拾八人高貳拾俵二人扶持ツヽ。

組頭役　小林權右衛門　組頭役　坂口又右衛門　組頭役　古賀吉左衛門

小屋頭役船頭役兼　林才次郎　同斷　坂口乙作　同斷　清岡正吉

小川島右衛門　林宅右衛門　浮島岩藏
武重與五右衛門　吉田德次郎　中島斧右衛門
松本彦五郎　中島大次郎　小川熊吉
小川勇次郎　林小太郎　林庄三郎
小川小豊次　林藤七郎　伏見貞雲
中西彦四郎　永原平三郎　小川國三郎
山岡理三郎　林倫平　永原德松
武市磯松　中西吉十郎　小林喜三郎
浮洲初太郎　中西伊兵衛　山岡平右衛門

小林竹之　高田音三郎　清岡政吉
清岡美之吉　平井安五郎　松尾竹藏
松本左馬次郎　大友次郎吉　柴田佐吉
伏見清太郎　小川國太郎　小林龜太郎
小川善次郎　安宅御船藏番金子豐三郎　小林平作

一、御關船鳳凰丸　五拾二挺立　長十一間四尺五寸　横三間壹尺　立足六尺三寸
嘉永元申年御修復、當卯年迄二十ヶ年。
一、同孔雀丸　三拾六挺立　長八間五尺　横二間二尺五寸　立足四尺五寸
同二酉年御修復、當卯年迄十九ヶ年。
一、小早御船擂丸　三拾二挺立　長八間壹尺　横二間二尺　立足四尺三寸
安政四巳年四月御修復、當卯年迄十一ヶ年ニ相成候。
一、同淺草丸　三拾二挺立　長八間壹尺五寸　横二間二尺　立足四尺三寸
嘉永二酉年ヨリ十九ヶ年ニ成、慶應三卯年四月御拂ニ相成候。
一、永代丸御船　二拾挺　長七間一尺五寸　横二間五寸　立足三尺四寸五分

天保十一子年御修復、當時迄二十八ヶ年ニ相成候。
一、白木八挺立御船　長五間二尺　横八尺　立足二尺六寸
嘉永元申年ヨリ二十ヶ年ニ相成候。
一、白木鯨御船　長五間五寸　横六尺五寸　立足二尺七寸
嘉永六丑年二月ヨリ十五ヶ年ニ相成候。
一、千代路御船二艘　長四間貳尺　横四尺五寸　立足壹尺五寸
嘉永六丑年十一月ヨリ十五ヶ年相成候。
一、同千代路貳艘　同　斷
萬延二酉年六月ヨリ七ヶ年ニ相成候。
一、御關船附傳馬船　九挺立　長六間壹尺　横七間　立足二尺八寸
嘉永元申年ヨリ當年迄二十ヶ年ニ相成候。
一、御製造海船造壹艘　艪八挺立　長拾間　肩二間三尺　立足五尺
安政元寅年ヨリ御修復出來、當時卯年迄十五ヶ年相成候。
一、御船附棧船　長三間四尺　肩四間五寸　立足一尺五寸
但、同斷。

一、大形押送り拾挺立拾艘　長九間五尺　肩壹間五尺　立足四尺

一、同棧船二挺立五艘　長三間　肩四尺　立足一尺五寸

一、中形押送拾挺立拾艘　長八間一尺五寸　肩九尺五寸　立足三尺六寸

一、小形押送八挺立五艘　長七間四尺　肩八尺　立足一尺一寸

一、兒□御船五挺立五艘　長五間三尺餘　肩六尺餘　立足二尺五寸

一、海船修行御船八挺立　長八間三尺　肩八尺五寸　立足三尺五寸

嘉永六丑年新規出來當卯年迄十五ヶ年相成候。

右之通、是迄ハ新田島ニゐ取扱候分。

深川安宅御船藏前御構御船藏番居小屋一人ニ付坪數九十坪、但間口四間半、奥行二拾間。

同御船藏地所、惣長二百二十間、横三十二間。此坪七千四拾坪。

同所御構用心堀、幅二間三尺、長二百二十間餘。

同所御船藏新田島村御預り、大法京間積り間口十四間、奥行十二間、高サ軒一丈、棟二丈四尺四寸、ミコロ一丈八尺五寸、但土臺上ヨリ積り。

御船藏内四代切御船四艘引ニ相成候。

新田島御船藏、間口九間、奥行十一間、高サ軒八尺五寸、棟一丈九尺三寸、土臺上ヨリ積り大法京間積り御船三艘引三代切。

安宅御船藏、惣軒數十三藏有之候。

一、安宅丸御船百挺立　上口長二十七間半　肩九間半　立足一丈一尺　長三十一間一尺五寸　横十一間二尺　立足二間一尺五寸

寛永八未年豆州伊東ニゐ御造立、同十六卯年出來、天和二戌年御解船被仰付候。

一、天地丸御船　七十六挺立　上口長十五間　肩三間七尺　立足一間三尺　五寸五分

一、大川御座御船　拾貳挺立　上口九間　肩三間　立足二尺一尺四寸八寸　三尺五寸五分

享保三戌年新規御造立。

一、小川御座御船　拾貳挺立　上口七間一尺四寸　肩一間五尺八寸　立足二尺五寸

同四亥年新規御造立。

一、小鷹丸御船　二挺立　上口長四間四尺四寸　肩四尺四寸　立足一尺五寸三分

一、御召替小鷹丸御船　二挺立　上口長四間四尺四寸　肩四尺四寸　立足一尺四寸五分

享保二酉年新規御造立。

一、麒麟丸御船　三拾二挺立　上口長八間二尺一寸五分　肩三間二尺七寸　立足四尺二寸

一、御雪船　三挺立　上口長五間一尺五寸　肩一間二尺七寸三分　立足一間二尺六寸

享保三戌年御造立。

一、西丸御雪船　三挺立同斷

享保十一年新規御造立。

一、御召替御雪船　三挺立同斷

文化六巳年新規御造立。

一、御召鯨御船　八挺立　上口長六間二尺六寸三分　肩一間一尺四寸五分　立足一間二尺五寸

享保三戌年新規御造立。

一、御召替永壽丸　拾挺立　上口長六間二尺六寸三分　肩一間一尺四寸五分　立足一間一尺五分

享保二酉年濱御殿ヨリ相廻リ、御造立年號相知不申候。

一、一葉丸御船　二十挺立　上口長七間一寸五分　肩二間八寸　立足三尺三寸五分

享保二酉年濱御殿ヨリ相廻リ。

一、御次船　二十挺立　上口長六間一尺四寸　肩二間　立足三尺一寸三分

同　斷。

一、御駕籠御船　十八挺立　上口長六間五尺一寸五分　肩二間四寸三分　立足三尺六寸四分

享保亥年新規御造立。

一、御菓船　八挺立　上口長六間一尺五分　肩二間二寸五分　立足二尺八寸五分

同　斷。

一、塗下地鯨御船　八挺立　上口長六間二寸九分　肩一間一尺五分七分　立足二尺七寸

享保三戌年紀州ニゟ御造立ニゟ相廻り候。

一、白木鯨御船　八挺立　上口長五間五尺一寸　肩一間二尺五寸　立足一間二尺七寸

同三戌年新規御造立。

一、鵜羽丸御船　十二挺立　上口長五間五尺八寸　肩一間三尺九寸八分　立足一尺

元祿十二卯年新規御造立。

一、出水御用御船　六挺立二艘　上口長五間四尺　肩六尺七寸　立足一尺九寸

延享二丑年新規御造立。

一、御鳥丸御船　二挺立二艘　上口四間一尺三寸　肩立四尺九寸　足立一尺五寸

享保元申年新規御造立。

一、箱千代路御船　二挺立五艘　上口長四間二尺七寸　肩立四尺六寸五分　足立一尺三寸八分

一、小押付千代路御船　二挺立五艘　上口長四間五尺七寸　肩立四尺六寸五分　足立一尺三寸八分

御關船北新堀組ニゐ御預り

一、龍王丸　五十二挺立　上口長十二間一尺五寸　肩立三尺四寸　足立五間三尺四寸

同斷　同斷

一、八幡丸　五拾挺立　上口長十一間二尺五寸　肩立二尺五寸　足立五間二尺五寸

同斷　濱御殿御預り

一、天神丸　五十二挺立　上口長十二間二尺五寸　肩立三尺四寸　足立六間二尺五寸

同斷　同斷

一、難波丸　五十二挺立　上口長十一間一尺五寸　肩立二尺四寸　足立六間一尺五寸

同斷　マ、万年組御預り

一、小元鹽丸　六十二挺立　上口長十二間一尺五寸　肩立二尺四寸　足立一丈五尺四寸六寸

同斷　同斷

一、國市丸　四十二挺立　上口長十一間二尺五寸　肩立二尺四寸　足立一丈五尺七寸二寸四分

江戸大坂間郵船開始

江戸大坂間郵船開始事蹟

御船之内國市丸幷大川御座御船共二艘ハ殘シ置、天朝ニ差上ニ相成候。

其外不殘御拂ニ相成申候。

慶應三卯年　林才次郎記

九月十二日壬戌○慶應三年（紀元二五二七年）○壬戌、三正綜覽。江戸○武藏國。大坂○攝津國。間郵船ヲ開始ス。○御書付留。横濱沿革誌。

江戸大坂間郵船開始

慶應三卯年九月十二日

左ノ如シ。

蒸氣飛脚船取設ニ付御書付

周防守殿○板倉勝靜。御渡

三奉行ニ

此度廻漕御用達等引請にゐ、蒸氣飛脚船取設、當月中より大坂表ニ往返致し候間、御用旅行之ものは勿論、諸家家來百姓町人婦女子に至迄、右飛脚船にゐ往返いたし度ものは、勝手次第、廻漕會所ニ申込、相當之入用差出、乘組し様可致し。且御用物は勿論諸家荷物又は商賣荷物等、是又同所ニ申込次第、相當之運賃を以、積廻し苦ニし、尤諸事廻漕會社請合御用達共ニ、相對可致し。

右之趣、面々ニ可被相觸し。九月

——御書付留

去ル十二日町觸差出し候蒸汽御舟、廻漕御用達共引受ニゐ、寄樓丸飛脚船取

仕立差向、手始として人幷諸荷物共爲積込、來ル廿八日品川出帆、大坂表着、同所之諸荷物人共爲積乘歸帆之積りに有之、右舟之義ハ、人數二百人程、諸荷物三千石目程ハ、積込方出來候船に付、乘船致度者ハ、相當之舟賃差出し、望之者ハ早々永代橋西詰元船見番所、當時廻漕假會所へ申出、委細之義ハ、同所御用達へ相達可致候。

卯ノ九月十六日

小口世話掛

御試蒸氣飛脚船假運賃

一、壹人　金貳兩。

外、食料一日分銀七匁五分。

一、大長持　金六兩三分銀九匁。

一、中長持　金五兩三分。

一、小長持　金四兩二分銀六匁。

一、大樽　金二分銀壹匁六厘。

一、中樽　金壹分銀九匁一分六厘。

一、小樽　銀十三匁八分。

一、明荷一ッに付金二分銀拾壹匁四分。

但、右之外諸荷物嵩物ハ、一尺角に付凡銀十三匁八分宛之割合にて、取極可致事。

一、銅鐵金物類目重之品　拾貫目に付金二分銀十一匁四分。

但、右之外壹品に付、格外重目之品ハ、貫目に應シ、割增致候事。

右之通候事。

卯九月

廻漕會所

廻漕御買積諸品賣捌所
永代橋通北新堀
長島屋常之助

——藤岡屋日記

口演

先般從御公儀樣廻漕方御用達に蒸氣御船御預ケに相成、大坂表往返渡海仕いに付、元來私共六組飛脚屋渡世に有之いる故、今般厚奉蒙御沙汰、右取扱方被仰付いる間、諸家樣方御荷物と不及奉申上、百姓町人に至迄、諸荷物幷人數と乘込、海上日限大坂表迄三日限之積、廻漕方左之運賃定値段を以御扱奉申上いる

間、右御用向御座いハヽ、私共に被仰付可被下い。尤出帆日限之義ハ、毎月前以奉申上候。此段偏奉願上候。以上。

月　日

運賃	
一、壹人金貳兩 外食料一日分銀七匁五分	一、大樽金壹貳分 銀壹匁六厘
一、大長持金六兩三分 銀九匁	一、中樽金壹分 銀九匁一分六厘
一、中長持金五兩三分	一、小樽銀拾三匁八分
一、小長持金四兩二分 銀六匁	一、明荷壹ツニ付 金貳 銀拾一匁四分
一、銅鐵金物類目重之品 拾〆目ニ付 金貳 銀拾一匁四分 但右之外壹品ニ付格外重目之品ハ貫目ニ應シ割増致い事 右廻漕會所定直段ニ御座い。以上。	但右之外諸荷物嵩物ハ一尺角ニ付凡十三匁八分宛割合ニ付取極可致事

京橋北紺屋町河岸通

六組飛脚屋通日雇仲間

蒸氣船積入取扱所

——石井文書

十七日〇慶應三年九月。令シテ、廻漕服務ノ商賈官ノ汽船ヲ大坂ニ往返スルヲ以テ、隨意示談、商品等ヲ運漕セシム。——明治前記

同月〇慶應三年九月。ヨリ廻漕用達郵船ヲ以テ、品川及横濱ト大坂ノ間往復ス。之ヲ

飛脚船引札　原寸縦八寸四分　横一尺二寸九分

東京　石井研堂所藏

口演

外食料一日分銀七匁五分

一大長持　金六両三分　銀九匁

一中長持　金三両二分

一小長持　金四両二分　銀六匁

一小樽　銀拾三匁八分

一明荷　壹ツ〆　金弐分　銀拾匁四分

但外荷物ハ長さ八角ニ付九銀拾匁八分宛割合ニ致ス事

銀九匁一分六厘

但右外長さ六尺外ハ日高貫目應割増ス事

銀拾一匁四分

右興津会所宛出候

京橋北紺屋町河岸通

六組飛脚屋通日雇仲間

蒸氣船積入取扱所

口演

先般從
御公儀様廻漕方御用達蒸氣船出張ニ付
大坂表往返渡海仕候ニ付
有之候ハヽ厚奉願候
諸家様方御荷物ニ付
人數乘込ハ日限大坂表ニ三日限ニ相廻漕方ニ
運賃定法ハ別扱ニ
相成ハ
此段御願奉上
月日

運賃

一壹人　金弐両　外食料一日分銀七匁五分
一大長持　金六両二分　銀九匁
一中長持　金三両二分
一小長持　金四両二分　銀六匁

一大樽　金弐分　銀壹匁六厘
一中樽　金壹分　銀九匁一分六厘
一小樽　銀拾三匁八分
一明荷　壹ツ有　金弐分　銀拾匁四分
但外荷物ハ別ニ表ハ分量ニ付
銀拾匁分ハ定割合ニ五極ニ決事

一銅鉄金物類目重之品　拾メ目ニ付　金弐分　銀拾一匁四分
但右外表ハ分量ニ付
貫目應割ニ付
右廻漕會所定法
相成ル

京橋北紺屋町河岸通
六組飛脚屋通日雇仲間
蒸氣船積入取扱所

本邦郵船ノ嚆矢トス。

外國人居留地設定

十月廿一日庚子（慶應三年（紀元二五二七年）庚子、三正綜覽。）江戸表外國人居留規則ヲ定メ、鐵炮洲（市内京橋區。）ヲ以テ外國人居留地ニ充ツ。（外國人居留地規則書類。大日本通商史書類。藤岡屋日記。東京通志。）

新撰東京名所圖會。

外國人居留地設定事蹟

外國人居留地設定 安政五年ノ日亞條約ニ依リ、江戸鐵炮洲ニ外國人居留地ヲ設ク。其開市ハ明治元年十一月十九日ニ在リ。

（朱）慶應三丁卯年中於舊幕各國公使ト取極タル規則

江戸表外國人居留ゝる規則

第一條　別紙繪圖面ニゝる彩色せし場所内ハ、條約濟の外國人、日本人より所持之家屋を借り、商賣を稼くため住居ゝる事を得ゝし。尤右一區の内家屋を所持ゝる日本人、若し貸ゝ事を不好時ハ、外國人に無理ニ貸さしむる事をふゝゝからに。且又條約濟之外國人、開港場ニ於て地面を借り家屋を建ゝき條約の法則同樣ニ、右繪圖面の内ニ藍色ニ彩色せし場所を、自普請ニためニ日本政府より貸し與ふゝし。

第二條　右自普請之爲ニゝる地所段々ニ塞り、猶他の地所入用之節ニ至ゝ

霸都時代ノ港灣

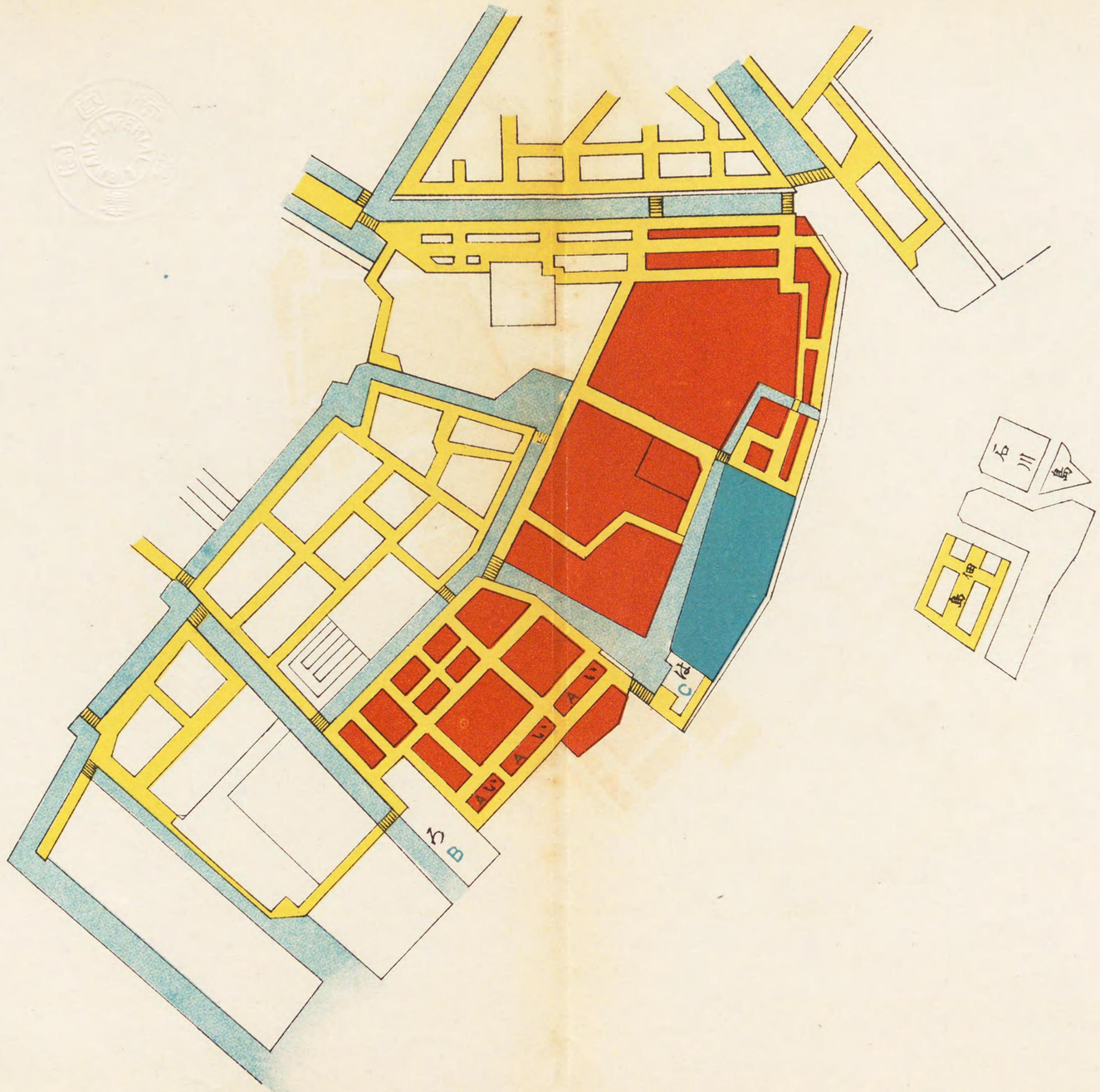
ハ、別紙繪圖面ニいト印記せし場所を、日本政府より用意致し、廻りニ幅六間四尺以上之道路を取設ヘし。然ルニ其後猶又地面入用之節ハ、赤色ニる彩色せし場所内を、都合次第地續を以て段々廣くそをし。

第三條　別紙繪圖面ニ藍色ニて彩色せし場所ハ、日本政府ニる來ル十二月七日迄ニ在來之家屋を引拂、其周圍ニ幅六間四尺以上之道を開き、十分ニ下水等を設ヘ、大坂兵庫外國人居留規則第六第七第八第九ケ條之趣ニ隨て、外國人に貸與ふをし。

第四條　別紙繪圖面ニ朱色ニる彩色せし場所内を通過そる堀等ハ、來ル十二月七日迄ニ日本政府ニる掃除し、其後絶ず丁寧ニ掃除せしむをし。尤右堀等掃除之諸入費ハ、日本政府より出そをし。

第五條　別紙繪圖面ニろト印せし場所ニる普請ニ取掛り居候外國人旅籠屋ハ、日本政府より命し、來ル十二月七日迄ニ必ず落成せしむをし。尤旅籠屋そ日本人よて取扱ふをし。

第六條　別紙繪圖面ニはト印せし場所ニ於て、都合宜敷水揚場を日本政府より取設ヘをし。且各國人所持之荷物を陸揚ヘ或ハ船積そるる迄、素倉（雨露を凌）



第四條　別紙繪圖面ニ朱色ニ彩色せし場所内を通過せる堀等ハ來ル十二月七日迄ニ日本政府ニ於テ掃除し、其後絶ス丁寧ニ掃除せしむ可し。尤右堀等掃除之諸入費ハ、日本政府より出す可し。

第五條　別紙繪圖面ニろト印せし場所ニ於テ普請ニ取掛り居候外國人旅籠屋ハ、日本政府より命し、來ル十二月七日迄ニ必ず落成せしむ可し。尤旅籠屋ハ日本人よて取扱ふ可し。

第六條　別紙繪圖面ニはト印せし場所ニ於テ、都合宜敷水揚場を日本政府より取設ず可し。且各國人所持之荷物を陸揚ず或ハ船積する為ニ、素倉（雨露を凌

川越
入間郡
大井
大蔵
新坐郡
豊島郡
戸田
三口
千住
松戸
葛飾郡
新利根川
中川
東京
高輪
品川
荏原郡
大森
三浦
下丸子
木口
四軍
鶴瀬
中浦
口鶴
田中
三木
宮寺
高麗
三ヶ島
荒川
三ヶ木

ぐための小屋にあらず、暫時荷物を置く所。を取建置くをし。且江戸ハ開港場にあらされハ、外國商船等碇泊をゐからぬ。尤外國人所持之荷物ハ、卽ち條約附錄交易規則に隨ひ、横濱にあ改を請、同所或ハ他の開港場に於て輸入税を納めたる上にあらされハ、江戸に陸揚をゐからぬ。且江戸に於て輸出税を取立る事を要をるに至る迄、當分之内外國人江戸より輸出をる物産も、横濱運上所にあ改を請、輸出税を納めたる上にあらされハ、同港に於て外國船へ積込ゐからぬ。

第七條　本書附錄之規則幷條約附錄之交易規則に隨ひ、日本人或ハ外國人所持之荷物運送船引船或ハ乘合船等、帆前蒸氣之差別なく、江戸を横濱の間を往復をゐし。

第八條　江戸に出る外國人官服を着用したる士官の外は、神奈川奉行一覽附ある鑑札を横濱在留の其國のコンシュルより請取、海路出府之ものハ、芝田町或ハ築地にあ上陸いたし、日本役人の求に應し是を差出をゐし。陸路出府之ものハ是を六郷渡場にて差出をゐし。尤鑑札なく江戸へ出るものハ、召捕其國のコンシュルに引渡をゐし。其故ハ外國人に江戸開市之趣意を條約面通り遵奉せしめんが爲なり。

第九條　凡る外國船江戸へ着せる時ハ、白キ標木を建さる兩臺場の間より入津せるべし。

第十條　兩臺場より外國人居留場前迄出入せる水筋を追ひ、日本政府に於て澪杭或ハ浮木を居へ置くべし。

第十一條　江戸在留外國人、左に記せし境界の内、散歩勝手次第たるべし。即ち新利根川又江戸川ともいふ。口より北之方金町の關所まで、夫より西の方水戸海道を沿ひ、千住宿大橋迄、夫より隅田川以南川上に登り古谷上郷迄、夫より小室村・高倉村・小矢田村・萩原村・宮寺村・三木村・田中村諸村落より筋を引日野の渡迄、夫より玉川口迄を以て限りとせるべし。外國人ハ江戸表に於て海陸往來せる事、日本人同様差障なかるべし。

——外國人居留地規則書類○大藏省文書。

江戸表外國人居留する規則○略。上文卯十月廿三日英國より差出に同じ。

外國人江戸に居留するの規則

第一條　繪圖面中、朱色に彩色せる場所内に有、日本と條約を結ひたる諸國の人民交易の爲に日本人より家を借り住居せることを得。然れ共有限りの内には、外國人に家を借せることを好まざる日本人に、無理に之を借さしむることとあし。且日本政府は條約濟諸國の人民に開港場におゐての如く、江戸におゐても地面を借り家を建ることを得せしむることを好めるゆ故、繪圖面中青色に彩色せる場所を、自普請の爲に政府より外國人に借し與ふべし。

第二條　上に言へる地所、外國人住居を以て塞り、其外地所入用の節ハ、繪圖面にAと記せる場所を日本政府が用意し廻りに廣サ四十フートより狹からさる道路を取り設べし。其後猶地面入用の節は、朱色にて彩色せし場所内を、段々地續を以て廣ぐべし。

第三條　千八百六十八年第一月一日迄に、繪圖面中青色に彩色せる地所ハ日本政府より在來の家屋を引拂ひ、廻りに廣サ四十フートより狹からさる道路を開き、十分に下水等を設くべし。右地所の道路を作るに入用の外、地面は大坂兵庫外國人居留地規則第六第七第八第九條の趣に隨て、外國人に借し與ふべし。

第四條　朱色に彩色せし場所を通過せる堀等は、第一月一日迄に日本政府

て掃除し、此後絶へぎ掃除せしむべし。此堀等掃除の入費は、日本政府に屬そべし。

第五條　繪圖面中Bと記せし地所におゐて、既に普請に取掛りたる外國人旅館は、日本政府にて第一月一日迄に落成せしむべし。右旅館は日本人にて取扱ふべし。

第六條　日本政府Cと記せし場所に都合よき水揚場を取建て、且外國人の荷物を陸揚或は船積そる爲め、相應の小屋を設くへし。然れども江戸は開港場に非されば、外國商船爰に碇泊そるを許さず。外國人荷物は、條約附錄交易規則に隨ひ、横濱運上所におゐ改めを受、同所或は他の開港場におゐて輸入稅を拂ひたる上に非されば、江戸に輸入そべからず。又江戸におゐて輸出稅を取立る事を要そるに至る迄、當分の内外國人江戸より輸出そる物産は、横濱運上所にて稅を拂ひたる上に非ざれば、同港より外國船に積込を許さず。

第七條　本書附錄の規則幷條約附錄の交易規則に隨ひ、外國人所持の荷積船引船或は乘合船等、蒸氣帆前之差別ふく江戸と横濱の間を往來そべし。

第八條　外國人に江戸居留地條約の趣意を遵奉せしめんが爲め、江戸に來る外國人は官服を着したる士官の外、神奈川奉行一覽附ある鑑札を横濱在留其國コンシュルより請取、之を六郷渡場（陸路にて横濱より來る者は。）或は江戸表（舟路にて來る者は。）にて日本役人に示そべし。若鑑札ふく江戸に來れる者あらば、前文士官の外之を召捕へ、其國コンシュルに引渡そべし。

第九條　外國荷積船引船乘合船其外諸外國船軍艦附屬小船の外、江戸に着そる時は、白き標木を立たる兩臺場の間より入津そべし。此船何れも臺場の間を通行そる時、日本役人の乘船そるが爲めに留るべし。其時乘組姓名書を船將より右役人に渡そべし。其上各より鑑札を見せしむる事は、右役人の存寄次第たるべし。

第十條　兩臺場より外國人居留地迄出入そる水筋を追ひ、日本政府より澪杭或はうきを置くべし。

第十一條　江戸在留外國人は、左の境界の内遊歩勝手次第たるべし。即チ新利根川（又江戸川ともいふ。）口より金町の關所迄、夫より水戸街道を沿ひ千住迄、夫より隅田川の河筋に從ひ古谷上郷迄、夫より小室村・高倉村・小矢田村・萩原村・宮寺村・石畑村・三木村及び田中村を越て、日野まで、日野より玉川の口まで。

外國人は、江戸表よりおゐて海陸往來をすること、日本諸民と同樣ふるべし。

――大日本通商史書類

法規分類大全、本取極ヲ「慶應三年丁卯十月二十一日(千八百六十七年十一月十六日)川勝備後守米英佛蘭四公使ト決定」トシ、鼇頭附記シテ云フ、

本文ノ內、第八條第九條ハ、明治元年十月四日東久世中將(通禧)○宇和島中納言(伊達宗城)○ヨリ、英佛米蘭獨伊公使ヱ、文段取直シ左之通達シ、各承知ノ回答アリ。

第八條　江戸ヱ出ル外國人、官服ヲ著用シタル士官ノ外ハ、「神奈川判事」ト書付アル鑑札ヲ横濱在留ノ其國コンシュルヨリ請取、海路出府ノモノハ、芝田町或ハ築地ニテ上陸致シ、日本役人ノ求ニ應シ、是ヲ可ニ差出一、陸地出府ノモノハ、是ヲ六鄕渡場ニテ差出スヘシ。尤鑑札ナク江戸ヱ出ル者アラハ召捕ハ、其國ノ岡士ヱ引渡スヘシ。其故ハ外國人ニ江戸開市ノ趣意ヲ條約面通リ遵奉セシメンカ爲也。

第九條　都テ外國船江戸ヘ着スル時ハ、白キ標木ヲ立タル兩臺場間ヨリ入津スヘシ。

同書又參考トシテ、左ノ文書ヲ揭ク。

亞墨利加合衆國ミニストル、レシデント、エキセルレンシー、アルビワンワルケンボルグヘ

以書翰申進し候。先般江戸外國人居留地規則書差進、御相談ニオヨヒ置し候處、閣下幷ニ外公使ヨリ被申立し候趣モ有之し候ニ付、此程川勝備後守幷ニ江連加賀守ヨリ、閣下幷英國公使ヘ爲及御談判し候趣ヲ以取極度、右ニ付別紙二通相添、猶御相談ニオヨヒし候間、否貴答有之度、且居留地外ヘ外國人夜行之儀ハ、掛念不少し候ユヘ、可成丈見合し候樣致シ度、若シ不得止所用有之出行ノ節ハ、其筋ヘ申立次第、護衞ノ者差出可申間、必ス同伴致シし候樣、其人民ヘ諭達可致旨、貴國コンシュルヘ兼テ御命令有之度し候。此段申進し候。拜具謹言。

慶應三卯年十月二十七日　　小笠原壹岐守(長行)○花押

阿蘭陀ポリチーキアゲレト兼コンシュル、ゼネラール、エキセルレンシー、トデガラーフアンポルスブルークヘ

以書翰申進し候。先般江戸外國人居留地規則書差進御相談オヨヒ置し候處、右規則中ノ儀ニ付閣下幷ニ外公使ヨリ被申立し候趣モ有之し候ニ付、別紙ノ通リ取直シ、且運送船等ノ規則ヲモ取設度、右ニ付別紙規則書二通相添、猶御相談ニ

オヨヒしん間、否貴答有之之度、且居留地外へ外國人夜行ノ儀ハ、懸念不少しん故、可成お見合しん樣イタシ度、若シ不得止所用有之之出行ノ節ハ、其筋へ申立次第、護衛ノ者差出可申間、必ス同伴イタシしん樣、其人民へ諭達可致旨、貴國コンシュルへ兼テ御命令有之之度、此段申進しん。拜具謹言。

慶應三卯年十月二十七日　　小笠原壹岐守花押

此外明治史要・藤岡屋日記其他記ス所ヲ左ニ抄ス。

卯〇慶應三年。ノ六月十二日

鐵炮洲異人館一條聞合書

此程鐵炮洲邊ニゐ異人エ御貸地ニも相成候哉之風聞ニ付ゐ、稻葉備後守樣衆高橋氏へ事實之處出會之節咄致し候處ニ、定ゐ兵部大輔樣へ何とふく御模樣伺候儀ふ奉存候。今日文通、右略左之通。扨海邊異人エ御貸地ニも相成候哉之義ハ、今度海軍之教師英國へ御賴ニ相成、濱御殿海軍所ニ相成候ニ付、同所へ英人教師之者居留之御模樣替ニ相成、築地元藝州侯御屋敷、當時御軍艦所海軍練習所ニ御取建ニ相成候ニ付、同所元講武所ニゐ、先頃燒失致し候場所、英人海軍教師之居留所ニ相成候趣ニ御座候。多分御治定之御樣子ニ御坐候。全右等之儀ハ、風評ニゐ、何歟築地邊之海邊、異人エ御貸地ニ相成候由ニ咄有之之事ふ奉存候。餘ハ其内拜面萬々可申上候。下略。六月十二日

七月四日〇慶應三年。

朝比奈甲斐守〇昌廣。〇外國奉行。

此度築地より鐵炮洲迄之處海手、夷人館ニ相成候ニ付、御用掛外國惣奉行並朝比奈甲斐守町取拂之義被仰付候處、外國奉行ニゐハ町家ニゐ承知不致候ニ付、町奉行兼帶ニ相成候。七月八日御見分有之之、取拂之儀被仰付候ニ付、皆々難澁之趣歎願致候得共、一向御聞入無之之、替地ハ追ゐ被下候由ニゐ、爲引料、泪金小間一分宛被下との評判ふれば、外國へ島巡りでも仕さがよし、知惠朝比奈で願ふ甲斐ふし。

——藤岡屋日記

十九日〇慶應三年十月〇中略。江戸開市新潟開港ノ期限十二月七日。ヲ延ヘ、戊辰三月九日ヲ以テ期ト爲スヲ布告ス。

二十八日、幕府江戸鐵炮洲ヲ以テ、外國人居留地ト爲シ、居民ノ其家屋ヲ貸與スルヲ許ス。

——明治史要

築地居留地

京橋區築地新湊町六丁目七丁目、新榮町六丁目七丁目、明石町、入船町七丁目ニ亘ル區數凡六拾五區、區積凡貳萬七千五百七拾五坪、貸下料壹箇年金十凡七千九百四圓五拾三錢八厘。

外國人在留人口數〇明治十九年現在。

外國人口數總四百三拾貳人。男貳百八拾四人。女百四拾八人。

北亞米利加合衆國百四拾四人。男七拾七人。女六拾七人。英吉利國百拾九人。男七拾七人。女四拾貳人。獨逸國七拾壹人。男四拾八人。女貳拾三人。清國三拾八人。男三拾六人。女貳人。佛蘭西國三拾五人。男貳拾七人。女八人。露西亞國六人。男四人。女貳人。葡萄牙國五人。男四人。女一人。和蘭國四人。男貳人。女貳人。伊太利國四人。男。墺地利國貳人。男。瑞西國貳人。男。布哇國貳人。男壹人。女壹人。

――東京通志

舊外國人居留地は、今の明石町卽ち舊入船町七八丁目、新榮町六七丁目、新湊町六七丁目、明石町にてありき。慶應三年十月二十一日之を約定し、明治元年十一月十九日を以て開市したり。而して二十九年條約改正成り、內地雜居を許されしかば、始て居留地の制度を廢せり。明治の初年には、各所に關門の設

ありて、武家の輩は鑑札を携ふるにあらざれば入ることを禁じたりといふ。又三年四月定めたる居留地の競賣價格は、一坪金一兩二分、一ケ年の地租金一分二朱、百坪に付三十七兩二分とす。十年一月以降、公使の請求に因り、當分の中、百坪に付金二十八圓に減定せり。

今左に當時の觸書幷に布告文等を掲げて、其區域等を示すべし。慶應三年江戸に於て外國人居留地を定む。其の十一月二十八日を以て發布せし幕府の觸書に云。

江戸表外國人居留地の儀、鐵炮洲船松町二丁目幷同所十軒町に御定相成いし間、可レ得二其意一し。就ては本願寺橋より南小田原町數馬橋通南八町堀四町目五町目、夫より本湊町海岸通り、明石町南飯田町上柳原町南本鄕町內において、所持の家作等、外國人へ相對にて貸渡之儀、御差許相成し。尤貸す事を好まざるものは、强て貸さしむる事をふさずとの規條にし間、勝手次第對談致し、約定の節、鐵炮洲町奉行所役所へ可二申立一し。

右之通、向々へ可レ被二相觸一し。

明治二年に至り、居留地の區域を改めて之を擴張せり。二月五日の布告に云。

先般東京開市に付、鐵炮洲外國人居留地最寄の町々、場所御取極め、家屋敷相對借の儀、兼て御差許相成居ゝ處、右場所狹小にて、開市差支の筋も有之に付、今般改て稻荷橋眞福寺橋紀伊國橋汐留橋濱殿東手、右の川筋を境界と相定、區内一圓外國人相對借の儀、御差許相成ゝ間、爲心得相達ゝ事。

但、相對借年限、可爲五ヶ年事。

かくて五年に及び、更に居留地を擴張す。當時外務卿たりし副島種臣の各公使に發せし七月五日附の書翰に云。

以手紙致啓上ゝ。然ば東京開市場外國人相對借家可相成場所の内、南小田原町邊、去る二月二十六日火災にて燒失致しゝ跡、道敷も改革致し、家屋も無之ゝ付、右燒跡元ホテルの地及其續きふる(ほ)と印せし地四千五十五坪、(南小田原橋際なり。)此度海軍省用地に致し度、就ては相對借家の場所減省ゝに付、右代りとして新富町幷八町堀の方(へ)と記せし飛朱引の内一圓、相對借家差許可申ゝ。將右の海軍省用地と可致(ほ)と記せし地は、追て外國人居留地に可致旨、兼て規則面にも掲げ有之場所の内にゝ間、前書地の代りには、外國人居留地に隣れる(と)と記せる元商社の地(堺橋際なり。)を用意し、逐て要用の節は、居留地に可致ゝ。此段御相對旁可得其意、如斯御座ゝ。以上。

——新撰東京名所圖繪

江戸横濱間引船等規則設定

江戸横濱間引船等規則設定事蹟

朔日○慶應三年十一月。幕府江戸築地及越後新潟佐渡夷港ニテ、地ヲ外國人ニ貸スノ條約ヲ結ブ。

——明治前記

是日○慶應三年(紀元二五二七年)十月廿一日。江戸横濱間引船荷物運送船並ニ外國人乘合船設置規則ヲ定ム。○法規分類大全。大日本通商史書類。

江戸横濱間引船等規則設定　江戸外國人居留地取極ト同時ニ、江戸横濱間ノ引船其他ニ關スル規則ヲ定ム。卽チ左ノ如シ。

江戸と横濱の間に引船荷物運送船幷に外國人乘合船を設る規則

慶應三年十月二十一日

第一條　都る引船荷物運送船或は乘合船等、兼る日本長官之免許狀所持せざる者ハ、江戸と横濱の間往復すべからざる事。

第二條　免許狀願出ゝ者有之節は、神奈川奉行幷其船の屬するコンシュル取調之上、免許狀可相渡哉否を決すべし。

右免許狀ハ、双方の國語を以て、船之模樣等精敷相記し、神奈川奉行之に記名

し、コンシュル之に傍記可ゝ致事。

第三條　免許狀差出しはゞ、一ヶ年を過ぎ、奉行幷コンシュル勘考之上、免許を差留べきか、又は再應差出べきかを取極め、最初は勿論、其後免許狀相渡し都度、手數料として一トンニ付、金壹分づゝ日本政府に可ゝ納事。

第四條　荷物を積込み、船足水入六尺以上之船へは、免許狀渡さゞるべからざる事。且英文ニ據レハ、且ノ下(非常ノ場ニ於テ)ノ語アリ。日本長官より別段の免許狀を得るものに非ざれば、臺場外ニおゐて人及荷物を揚卸さべからざる事。

第五條　免許を得たる船に、運上所の役人を爲ニ乘組、江戸横濱之間往復之時差添る事、都ゐ日本政府之勝手たるべき事。

第六條　横濱におゐて免許を得たる船に荷物積込しの節は、其品に寄り、收稅濟證書或は無稅證書を其持主より差副ゆゐし。若し此證書ふくして江戸に陸揚せんとする者有ゝ之におゐては、其荷物を取押へ、且可ニ取上一事。

第七條　免許有ゝ之しの船、江戸或は横濱に於て、荷物積込陸卸の儀は、日本政府か差圖せし波戸場或は其爲ま日本政府ニおゐて免許せし傳馬船ま限るゐき事。

第八條　免許を得たる船ハ、江戸と横濱之間ま荷物或は人を運送し、或は其船を引くの外、何用たり共他用に供すべからさ。且右兩地の他所に寄附べからず。又途中に於て外國船又は日本船の論ふく、之に寄附べからざる事。

第九條　免許を得たる船其船長を除くの外、水夫等一切、江戸まおゐて上陸すべからざる事。

第十條　此規則或は追々可ニ取極一規則を違背さるもの有らば、免許狀を取上、其上其船の屬するコンシュルに兼ゐ其本國政府より其士民をして條約及び約定を守らしむる爲ま與へられし權を以て其者を罰さべき事。

——法規分類大全（大日本通商史書類同。）

〔參考〕

乘合船規則要項

第一號、運送船乘合船等、免許ナキ者往復スヘカラサル事。第二條、免狀手續ノ事。第三條、免狀ハ一年ヲ期トスルコト。第四條、水入六尺以上ノ船ハ、免狀ヲ渡サズ、又別段ノ免狀ナク臺場前ニテ揚卸スヘカラサルコト。第五條、運上所役人乘組ノ事。第六條、稅濟證書ナク陸揚スル者ハ、荷物取押ノ事。第七條、荷物積卸ノ事。第八條、運送ノ外他用ニ供シ、或ハ他所他船ヘ寄着スヘカラサルコト。第九條、船長ノ外一切江戸ヘ霸都時代ノ港灣

上陸スヘカラサル事。第十條、規則ニ違フ者處罰ノ事。――法規分類大全

大日本通商史書類ニ之カ草案見ユ。

江濱乘合汽船開始

是月○慶應三年(紀元二五二七年)十月。府下小網町○市内日本橋區。廻漕問屋松坂屋某、横濱辨天通三丁目○武藏國。鹿島屋某ト共ニ、江戸横濱間ノ乘合汽船ヲ設ケ、明年○明治元年(紀元二五二八年)。八月、之ヲ神奈川裁判所附屬トス。○横濱沿革誌。

江濱乘合汽船開始事蹟

江濱乘合汽船開始　横濱沿革誌ニ、

十月○慶應三年。小網町廻漕問屋松坂屋彌兵衞、横濱辨天通三丁目鹿島屋龜吉等、米國人ウエンリートヨリ小蒸氣船拾五馬力。ヲ購求シ、稲川丸ト名付ケ、横濱ト江戸永代橋迄、日々乘合往復ヲ始ム。當時之ヲ便利トス。

同月○明治元年八月。廿九日、神奈川府裁判所備小蒸氣船拾五馬力暗車。稲川丸慶應三丁卯年、江戸小網町松坂屋某等横濱九十三番米國人ウエンリートヨリ代價壹万五千弗ヲ以テ買受タルモ、其實代價ノ過半延滯シ、到底皆濟スル能ハズ、依テ官廳之ヲ償却シ、該船ヲ引受ルニ至ル。空シク之ヲ繫留スルモ無益ノミナラズ、當時横濱東京間ノ通路不便ナルニ際シ、且ツ築地明石町役所ニ時々公用往復アルヲ以テ、之ヲ乘合船トセハ大ニ便益ヲ感スルナラント、之レニ一決ス。然レトモ官廳直ニ之ヲ爲ス能ハサルヲ以テ差配人二名ヲ置ク。即チ横濱ハ岸田銀次(吟香)、東京ハ小網町松坂屋彌兵衞ニ命ズ。而シテ横濱ハ本町壹町目(現今裁判所前)ヨリ發船、東京ハ永代橋藤棚着トス。午後同所横濱歸船、客一名乘船料金一分二朱、艀賃三錢、洋人壹名金壹兩貳朱、支那人壹名金三分ヲ徵ス。(船中内外人ノ區別アリ。)ヲ以テ横濱東京間ノ乘合往復ヲ開業ス。翌二年北仲通二丁目角(現今四丁目)ヘ差配人地所ヲ貸與ス。自費ニシテ洋館ヲ築造ス。同年春米國人某小蒸氣船ヲ以テ横濱東京間ノ往復ヲ始、稲川丸ト競爭ス。賃錢ヲ廉ニシ、速ニシ、速カヲモ競爭セシカ、同年七月該船東京築地海岸發船ニ臨ンテ蒸氣罐破裂シ沈沒ス。此時内外人死傷スルモノ數十名アリ。稲川丸ハ幸ヒ無事ナルモ、玆ニ警戒ヲ加ヘ、横須賀造船所ヘ回船シ、數月間ヲ經テ蒸氣罐ヲ改作シ、器械ヲ修繕セリ。爾後引續キ往復ヲ爲シ、翌三年六月金壹万兩ヲ以テ差配人岸田銀次ニ拂下ケ、明治五年汽車開業迄經續營業ス。其後北海道ノ某ヘ轉賣セリト云。爾來内外人之レニヨリテ往復ス。

江戸開市延期

江戸開市延期事蹟

十一月廿日己巳○慶應三年(紀元二五七年)○己巳、三正綜覽。三月九日丁巳○丁巳、三正綜覽。ニ延期ス。○慶喜公御實紀。江戸開市期ヲ明年○慶應四年(紀元二五二八年)。

江戸開市延期　慶喜公御實紀ニ據ル。明治前記ニハ「二十三日○慶應三年十一月。幕府江戸及ヒ新潟開港ヲ延テ、明年三月ト爲セシ旨ヲ令ス。」ト見ユ。

廿日○慶應三年十一月。

一、來る十二月七日より江戸開市之儀、兼ゐ相觸置しゐ之趣も有之しゐに付、各國公使等にも談判之上、來辰年三月九日迄延期相成しゐ間、其旨可相心得しゐ。

右之趣、御料私領寺社領共、不洩樣可被相觸しゐ。

法規分類大全ニハ、左ノ書翰ヲ載ス。

大貌利太泥亞特派公使全權

霸都時代ノ港灣

ミニストル兼コンシユル、ゼネラール、エキセルレンシー
シエルハリエスパルケスケシビ

以書翰申進し候。江戸表外國人貿易ノ爲、我カ十二月七日ヨリ居留可致、兼テノ約定ニ付、今般取極し候規則二通（原頭書、「規則書二通ハ、江戸居留取極及江戸横濱間運送船規則ヲ云フナリ。」）差進し候處、右規則中ニ、外國人旅籠屋並ニ自普請場ノ支度、右日限迄可爲排取儀ニ有之候ヘトモ、何分規限通リ出來シ難キ模樣ニ相成、且當今ノ形勢、江戸大坂同日ニ相開キ候テハ、却テ不宜ト存し候間、江戸開市ノ儀ハ、來ル貴國四月一日迄延期相成し候樣イタシ度存し候。御承諾有之候ハヽ、別紙ノ通、國内ヘ普ク布告可致し候。此上猶精々取急キ、右期限無相違成功致シ可申ト存し候。此段申進度如此し候。拜具謹言。

慶應三卯年十一月二日　小笠原壹岐守（長行。）花押

（闕　案略。）

千八百六十七年第十一月二十九日於江戸

余今月二十七日附外國交易ノタメ江戸市ヲ開ク事ヲ來第四月一日迄差延サレ度儀ニ付キ申越サルタル閣下ノ貴翰、並ニ閣下右延期ヲ日本人民ニ知ラシムルタメニ演述シタル別紙布告書ノ下案ヲ落掌セリ。余閣下ノ申越シタル趣ニ同意シ、而シテ余カ力ノ及フ丈ハ、前文ノ如クナスタメ、日本政府ニ補助ヲ與フヘキ好意ノ明證ヲ顯サントスルヲ、閣下ニ報知ス。余マタ江戸ニ在ル外國人民居留地ノ諸工事ヲ怠ラシメサル樣、閣下ニ說勸メサルヲ得ス。何トナレハ右工作來ル第四月一日ニ於テ成功セサル事アルニ於テハ、大ナル罪過正サシク日本政府ニ歸スヘケレハナリ。

余閣下ニ右別紙布告書ヲ遲延ナク發出シ、而シテ其公告ニナリタル日附ヲ余ニ報告シ給ン事ヲ希望ス。恐惶謹言。

日本在留英國特派公使兼全權ミニストル
ハルリースパルケス

〔附記〕川船改

正月五日（慶應四年。）　稻葉美濃守（正邦。）

書付

大目付を以、諸向へ相達候由ニ付、御城附共へ爲見候

御府内川筋通行船々之儀、近來船數相增、稼方猥ニ相成、不取締之趣も相聞

候ニ付、爲ニ取締、是迄極印有ル之分ニゐも、改ゐ極印を打、新規鑑札相渡、是迄之手形を引替候筈ニ付、來辰正月より三月中迄ニ、無ニ遲滯一江戸大川端川舟役所ゟ可ニ申出一候。以來舟之形、艫數、戸障子、其外勝手次第相用候義、御差許相成、役舟之儀ハ御差止、御用ニ付雇上候節ハ、其時々相當之舟賃御下ヶ相成候筈ニ候。就ゐハ御年貢役銀、來辰正月ゟ是迄御定之二倍增可ニ相納一候。委細之義ハ、川舟役所へ申立、可ル請ニ差圖一候。若右期限迄ニ不ニ申出一、無極印ニゐ稼方致し候者も候ハヽ、急度可ル及ニ沙汰一候條心得違無ル之樣可ル致候。

右之趣、御府內並關東筋御料私領寺社領共、舟持共へ不ル洩樣可ル被ニ相觸一候。

右之通相觸候ニ付ゐ、武家所持之舟も、來辰正月より三月迄川舟役所へ申立、改ゐ極印等申受候樣可ル致候。尤舟持形商船同樣之分ハ、御年貢役銀商舟同樣相納、武備ニ屬し候御舟ハ、御年貢錢而已二倍增可ニ相納一候。委細之義ハ、川舟役所へ承り合候樣可ル致候。

右之通、向々へ可ル被ニ相觸一候。

卯ノ十二月

藤岡屋日記

四年戊辰

○慶應四年。○九月八日改元、明治元年。○紀元二五二八年。

正月八日丁巳

○丁巳、三正綜覽。

品川江戸入津者取締

品川江戸入津者賃取締事

津者ノ取締ヲ爲ス。○藤岡屋日記。

品川江戸入津者取締

藤岡屋日記ニ

正月八日○慶應四年。

町　觸

此度御府內御取締之儀、被ニ仰出一候ニ付ゐハ、諸家手舟並商人共所持之舟共、品川入津之節ハ、蒸氣帆前之無ニ差別一其筋之者差遣し、乘組人ハ勿論、來港之趣意等爲ニ承候筈ニ付、兼ゐ其心得可ル被ニ在候一。

右之趣、萬石以上以下之面々へ、不ル洩樣可ル被ニ相觸一候。

右之通相觸候間、可ル被ニ得一其意一候。

右之通御書付出候間、町中不ル洩樣、入念早々可ニ相觸一候。

町年寄役所

辰正月八日

正月十三日○慶應四年。

廻船問屋　奥川筋舟積問屋

附舟宿　艀下宿

神奈川横濱運送ハ宿

此度御府内御取締筋之義被仰出候ニ付ゐハ、江戸入津之諸廻舟荷舟等、乗込居候者身分柄等相糺、帳面へ記置、聊ニゐも疑敷もの留置候ハヽ、月番之番所へ可訴出、尤相對ニゐ宿爲致候義、都ゐ不相成候間、嚴重ニ相改候樣可致候。

前將軍江戸湊歸著

前將軍江戸湊歸著事蹟

十二日辛酉（○慶應四年（紀元二五二八年）正月○辛酉、三正綜覽。）前將軍慶喜（○德川。）大坂ヨリ海路江戸湊ニ歸着ス。（○藤岡屋日記。慶喜公御實紀。明治前記。）

前將軍江戸湊歸著　慶應四年正月三日伏見鳥羽ノ役有リ、前將軍慶喜六日ヲ以テ大坂城ヲ發シ、廿二日江戸湊ニ著ス。

正月十二日（○慶應四年。）

慶應四戊辰年正月

御供松平肥後守（○容保。）松平越中守（○定敬。）酒井雅樂頭（○忠績。）板倉伊賀守（○勝靜。）

御側衆室賀伊豫守（○正容。）大目付戸川伊豆守（○安愛。）御目付榎本攝津守（○道章。）御軍艦奉行設樂備中守（○能棟。）

右去ル八日大坂表御出帆、昨十一日夜品川沖御滯留、海軍所へ被爲成、夫より陸通り御乘切ニゐ還御、朝四ツ時二寸前御歸城被遊候事。　正月十二日

上意之書付

先般尾張大納言殿（○德川慶勝。）松平大藏大輔（○慶永。）を以可然上洛旨御内諭を奉蒙候ニ付、去ル三日先供之者四隊、關門迄相越候處、松平修理大夫家來無謂通行差拒之、兼ゐ伏兵等之手配致し置、突然彼より及發炮、兵端を開き、粗暴之擧動ニ及ひ候ハヽ、全ク修理大夫家來共一已之所業ニ有之、剩矯叡慮朝敵之名ヲ負せ、他藩之者を煽動し、人心疑惑を抱き戰利あらば、此分ニゐハ多分之人命を損候而已ならば、可奉寧宸襟誠意も不相貫、紛紜之際、曲直判然不相立候ゐハヽ、不本意之至、深心痛致し候。就ゐハ深き見込も有之、兵隊引揚ケ、軍艦ニゐ一ト先東歸致候。追ゐ申聞候義も有之候間、銘々同心戮力、國家可抽忠勤事。

辰ノ正月

同町觸

上樣御事、御軍艦ニ被爲召、今十二日西丸へ着御被遊候。尤此後之動靜ニ依り、速ニ御上坂被遊候事。

右之趣、向々へ早々可被相觸候。辰正月十二日

右之通相觸候間、可被得其意候。

右之通去ル十二日御書付出候間、町中不洩樣、入念早々可相觸候。

辰正月十五日

正月十二日朝、上様還御掛ケニ御手元ヨリ金二分也遣わされ、久々京住致し、身の油ぬけはねとふれ致し候間、鱧の蒲焼を取寄せ候様との事ニゐ、霊岸しま大黒やへ御差圖ニゐ、奥詰榊原健吉へ被仰付候ニ付、自腹ニゐ二分足し、金壹兩うふき取寄候由、同人之咄しニ御座候。

一、同朝のぼふのまぐろ御納屋より西丸御膳所へ相納メ候ニ付、古來ゟ鱘の御城へ上りし事ふし如何成事と相尋候處、昨夕上様被仰付候ニ付、相納メ候由ニ付、直様正味を差身味噌附ニ致し、のらハねぎまニ致召上り、殘りを一統へ被下候由、活達の君と何のゐ知らぬ感心との噂。

一、十一日夜ハ上様フランケ二枚よて御寢ふられ、十二日ニ御夜具の評義ニゐ、御納戸へ掛合候處ニ、御表ニハ一切無之迚、大奥へ掛合ニ及候處、御節儉被仰出候ニ付、諸事差支居候得ハ、御用立臥具等一ツも無之由、大奥ゟ御斷りニて、大困りとの噂ニ御座候。

——藤岡屋日記

十二日（慶應四年正月。）

一、或記曰六日亥の半刻坂城御發、天保山沖ニ翌七日未明に被爲入、開陽丸に御乘艦被遊、予輩も丑の半刻御跡より出發、同時過天滿橋より川舟乘込、辰の刻開陽丸に乘込、八日朝天保山沖御發艦、御東歸。四月十一日品川へ御着艦、十二日未明より濱御殿に御上陸、夫より御馬にて巳の半刻西丸城に着。

——慶喜公御實紀

十一日（慶應四年正月。）

開陽丸品海に錨を投す。使ありて、拂曉濱海軍所へ出張。御東歸之事。

初て伏見之轉末を聞く。會津候桑名候ともに御供中にあり。其詳說を問はむとするとも、諸官唯青色、互に目を以てし、敢て口を開らく者無し。板倉閣老へ附て、其荒增を聞くことを得たり。從是して日に空議と激論と唯日を空敷する而已、敢て定論を聞かず。

御供之役々（○印は御供にて東歸。△印は義戰一方。）

○會津肥後守（松平容保。）　○松平越中守（定敬。）　○板倉伊賀守（勝靜。）

○酒井雅樂頭（忠惇。）　總將　松平豐前守（正質。）　參政　△永井主水正（尙志。）　副將　△竹中丹後守（重固。）

△平山圖書頭（敬忠。）　塚原但馬守（昌義。）　陸軍奉行　大久保主膳正（忠恕。）

戸田肥後守　歩兵奉行　高力主計頭　○城和泉守

大目付　○戸川伊豆守○安愛。　○松平大隅守○信敏。　○瀧川播磨守○具舉。

目付　△○設樂備中守　△○榎本對馬守○道章。　△安田作太郎○久成。

——海舟日誌

△本城安太郎

十二日○慶應四年正月。前將軍江戸城ニ還ル。

大小監察ヘ閣老口達　上樣御事、御軍艦被ㇾ爲ㇾ召、今十二日西丸ヘ着御被ㇾ遊ㇾ候。尤も此後の動靜に寄り、連々御上坂被ㇾ遊ㇾ候。

——嘉永明治年間錄

六日○明治元年正月。○中略。德川慶喜、大坂城ヲ尾越二藩ニ託シ汽艦ニ駕シテ東走ス。松平容保、松平定敬、板倉勝靜等之ニ從フ。

十二日○中略。德川慶喜江戸城ニ還リ、東歸ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ西上スルノ意ヲ列藩ニ告ク。

——明治史要

是日○慶應四年(紀元二五二八年)正月十二日。內海炮臺○武藏國。守備ノ諸侯ニ命シテ戍兵ヲ增サシム。十九日戊辰○慶應四年(紀元二五二八年)正月○戊辰、三正綜覽。內海第六炮臺○武藏國。ノ守備ヲ津山○美作國。城主松平慶倫○三河守。ニ命ス。○藤岡屋日記。

內海守備　藤岡屋日記ニ據ル。

正月十二日○慶應四年。　松平下總守○忠誠。　堀田相摸守○正倫。　松平右京亮○大河內輝照。　眞田信濃守○幸民。　水野眞次郎

御預ケ御臺場ヘ、當分之內場所相應之人數爲ㇾ相詰、不慮之御備度相立候樣、此程相達置候處當節柄別ゐ嚴重ニ無ㇾ之候ゐハ不ㇾ相成ㇾ時勢ニも有ㇾ之候間、早々人數差出、御實備相立候樣、宅ヘ下總守家來呼ヒ相達、其外之面々へも通達致候樣、是又可ㇾ達事。

但、雅樂頭ヘハ達相濟候間、不ㇾ及ㇾ通達ニ候。

正月十九日○慶應四年。　松平三河守○慶倫。ヘ

美濃守宅ヘ家來呼可ㇾ渡書付

內海御警衞六之御臺場眞田信濃守御免代被ㇾ仰ㇾ付之。

辰ノ正月二十日○慶應四年。

霸都時代ノ港灣

内海御警衛六之御臺場御預ケ眞田信濃守御免ニ付、代り三河守ヘ被仰付候。
且本芝一丁目信濃守上り陣屋地、家作とも御臺場附爲陣屋地、被下之。

松平三河守

眞田信濃守（幸民。）

内海六之御臺場御預ケ被成御免、且本芝一丁目陣屋地御用ニ付家作共可被差上候。

江戸開市取扱總督任命

四月朔日己卯（慶應四年八月。）横濱裁判所總督東久世通禧ニ、江戸開市取扱總督ヲ命ス。（紀元二五二年。）（法規分類大全明治史要。）

江戸開市取扱總督任命事蹟

江戸開市取扱總督任命　左ノ如ク傳フ。横濱裁判所副總督鍋島直大亦同事務取扱ノ命有リタル者ナル可シ。明治史要ハ、之ヲ二日ノ條ニ繫ク。

東久世中將（通禧。）ヘ達（元年四月朔日。）（明治）

當分江戸開市取扱ノ儀モ、總督之心得ヲ以テ、可相勤樣被仰出ル事。

——法規分類大全

二日（明治元年四月。）（中略。）横濱裁判所總督東久世通禧、副總督鍋島直大ニ、江戸開市事務ヲ兼督セシム。

——明治史要

附記　舊幕府購買軍艦抑留

軍艦引渡命令

軍艦引渡命令事蹟

〔附記〕舊幕府購買軍艦抑留

二日（明治元年四月。）（中略。）舊幕府米利堅ニ購買スル所ノ甲鐵艦、横濱ニ至ル。海軍先鋒大原俊實之ヲ抑留シテ、品川海ニ入ルヲ許サズ。——明治史要

第二節　本記

帝都時代ノ港灣（一）

明治天皇慶應四年戊辰（紀元二五二八年。）四月四日勅使東海道先鋒總督橋本實梁・副將柳原前光江戸城（武藏國。）ニ入リ、德川氏ニ命シテ、十一日（慶應四年四月。）ヲ期シ、軍艦銃砲ヲ朝廷ニ納レシム。（太政官日誌。）

軍艦引渡命令　左ノ如シ。

四月四日（慶應四年。）勅使入城申渡ノ始末

第三箇條　軍艦銃砲引渡可申、追テ相當可被差返事。（前後略。）

右御沙汰書一通、於大廣間橋本柳原兩卿ヨリ田安中納言ヘ被相渡、演說左之通。

德川慶喜欺罔天朝之末、終ニ不可言之所業ニ至ル段深被惱宸襟、依之御親

征、海陸諸道進軍之處、悔悟謹慎無二念之趣被聞食、被爲垂皇愍之餘、別紙之通被仰下候條、謹ゐ御請可有之候。就ゐ本月十一日ヲ期限トシ、各件處置可致樣、御沙汰候事。○中略。

右御達之趣謹ゐ奉拜承候。猶慶喜ゟ申聞、御請可奉申上旨、同人○田安慶賴。ヨリ奉拜答候事。○中略。

先鋒副將印
先鋒總督印

四月五日○慶應四年。

一、六日○慶應四年四月。慶喜ゟ御達之趣申聞候處、田安中納言○德川慶賴。ヨリ御請書差上候。

一、十一日○慶應四年四月。○中略。

德川氏海陸軍一同ヨリ歎願書

一、城之儀ハ、德川家相續ノ者相定候上、一時德川龜之助へ御預被仰付候樣ニ願候。甚タ見越候儀ヲ中上奉恐入候得共、尾張家へ相續被仰付候儀ハ、御免奉願候事。

一、軍艦銃砲ゟ、德川家名御立被成下、高幷領地相極候上ニテ、相當殘シ置、其餘ハ悉ク差上候樣仕度候事。

右二箇條、以格別之御寬典、御差許相成候樣、御盡力之程、奉歎願候。素ヨリ有罪之私共、右樣之件々奉願上候ゟ、上ハ天朝之御怒ニ奉觸モ難計、下ハ主人慶喜之趣意ニ相背キ候儀ニハ候得共、此際ニ當リ、百年生命之爲ニ千載之汚名ヲ捨置、恨ヲ含テ奉命候樣ニテハ、海陸兩軍臣子之節操相立不申候間、私共一同之心中、御垂察被成下、幾重ニモ貫候樣、御執成奉願候。此段奉歎願候。以上。　辰四月

海陸軍一同

右大久保一翁勝安房ヨリ、參謀ヘ相手寄差出候得共、叡慮確定之御沙汰相成候上ゟ、可被差許之條理無之旨ヲ以テ、御答相成候事。

一、軍艦七艘凡乘組二千人許。

觀光名艦六門。　蟠龍四門。　威○咸歟。臨十二門。　回天十一門。　開陽廿六門。　朝陽十二門。　富士山十二門。

右十一日海軍總督ヘ請取之筈候處激濤ニテ士官上陸難仕候ニ付、明朝迄延引願出、被差免候處、至翌朝、一艘モ不見ニ付、紙問候處、左之通一紙差出。

寸楮拜啓仕候。然ゟ本日弊藩所持船々、品海立退候ゟ、餘之儀ニ無之、過日海

陸兩軍ヨリ二箇條之歎願以ニ大久保一翁・勝安房、督府軍門迄差出置ル處、軍艦御取揚一條ニ付、一同疑惑、兎角騷立居、折柄品海碇泊所ゟ主人慶喜申付ル趨、重役之者ヨリ、督府有無之御沙汰待不レ申軍艦悉ク差出可レ申段申來、一同之氣分ニ相關リ、萬々一不心得之段於レ有レ之ハ、主人慶喜之素志ニ背キ候ノミナラズ奉レ對ニ天朝一奉ニ恐入一ル儀ニ付、右爲ニ鎮撫一、房總近海ヘ立退、謹テ奉レ待ニ督府之命一ル。素ヨリ咽喉之地ニ潛伏致シ、陰ニ動靜ヲ窺ル抔ノ譯ニハ斷然無レ之ル間乍レ恐天朝海軍諸御船ニ於テモ、鄙意御疑無レ之樣、奉レ願ル。尤此儀ニ付、別紙一通、大原前侍從樣迄奉ニ申上一ル得共、猶貴所樣方ヘモ申上置ル儀ニ御座ル。何分弊藩一同臣子之情態、以ニ人情一御推察有レ之、幷ニ小生共苦心之程御汲取被レ下、其筋エ御建言ニ相成ルハヽ、難有仕合ニ奉レ存ル。依レ之別紙一封相添、尊下迄差出申ル。乍レ憚大原樣御手エ早々相屆エ樣、御周旋之程相賴申ル。以上。

四月十二日〇慶應四年。盃陽丸御船乘組中樣　榎本和泉〇武揚。

一、十四日〇慶應四年四月。〇中略。

軍艦之儀、去ル十一日可ニ引渡一之處、風波强ク不レ能ニ其儀一、趣ヲ以テ、翌十二日引渡治定之處、夜中諸艦乘組之儘、不レ殘脫走ル。付テハ早速呼戻シ可ニ引渡一之處、海上之儀ニ付、日限難レ期之間、夫迄之處、御猶豫致シ吳度之趣、海軍先鋒エ被ニ申出一ル趣、令ニ承知一ル。右軍艦ハ、去ル四日勅諚之一事件、實ニ不ニ容易一之重器ニル。殊ニ其許城中ニ於テ直ニ御請申上ルノミナラス、勅諚之旨、逐一實行相立ル處置可レ致之由、御請書被ニ差上置一ル。然ルニ前件ノ始末、勅諚ニ被レ對、如何ノ心得方ニル哉。此上ハ其許自身飛船ヲ以テ追驅、早々引渡之處置無レ之ルテハ、德川之家名ニモ相係リ可レ申之間、此段勘考可レ有レ之事。

四月十三日　東海道先鋒總督　田安中納言〇德川慶賴。

東海道先鋒總督橋本實梁副將柳原前光ノ江戸城收公始末ハ、皇城篇之ヲ記セハ、就テ見ル可シ八月〇慶應四年。ニ至リ德川氏軍艦頭榎本武揚等遂ニ軍艦運漕船八艘ヲ以テ品海ヲ脫走ス。事下ニ記ス。

〔附記〕神奈川奉行所横須賀製鐵所上收

帝都時代ノ港灣

顚末左ノ如シ。

二十日（明治元年四月。）横濱裁判所總督東久世通禧、神奈川奉行所及ビ横須賀製鐵所ヲ收ム。

——明治史要

閏四月朔日（明治元年。）新政府ハ、神奈川裁判所長官東久世中將通禧、鍋島侍從直大ヲシテ、横須賀製鐵所ヲ舊幕府ヨリ受取ラシム。是ニ於テ通禧直大ハ、此日判事寺島陶藏宗則、井關齋右衞門盛艮以下ノ諸員ヲ率ヒ、佛國軍艦ニ搭ジテ横濱ヲ發シ、直航シテ横須賀ニ到ル。舊幕府製鐵所奉行並新藤銀藏以下之ヲ迎フ。通禧等ハ、製鐵所ノ點檢ヲ了シテ、即日横濱ニ歸ル。乃チ屬僚製鐵所掛河久保忠兵衞・福岡喜四郎・近藤豐太郎・横井孝之助・大脇佐兵衞・小山富太郎ヲ留メテ、事務受繼ニ着手セシム。製鐵所ガ新政府ノ管掌ニ屬セシハ、實ニ此時ヨリス。其際引渡ノ本所經費書、舊幕府官吏姓名錄、雇佛人姓氏給額錄、其他土地家屋及造船工程費額ノ摘要左ノ如シ。

一、横須賀横濱両製鐵所經費

內

一、洋銀二百四十萬弗（一箇年六十萬弗ツヽ四箇年分佛國政府ニ約定セシ目當高）

百五十萬八千四百二十四弗四十一仙

慶應元年乙丑八月起工ヨリ本年戊辰三月ニ至ルマテ機械物品ノ買上代價幷造船造家大工ノ費用、其他雇佛人ノ給料職工人足ノ賃錢各經費支拂ノ分

八十三萬千五百七十五弗五十九仙

現今ヨリ落成ニ至ルマテノ日當高ナリ。然レトモ製鐵所起工以來物價騰貴ニ付、概略一箇年分ノ經費即チ六十萬弗內外不足スヘキ見込。

外ニ米二千三百九十俵。役金手當金八千六百三十八兩一分。

製鐵所奉行以下官吏四十五名一箇年分支給高。但製鐵所奉行以下持高ハ算入セズ。

——横須賀海軍船廠史

廿八日（慶應四年（紀元二五二八年）四月。）大總督府、品川海碇泊ノ德川氏軍艦ヲ收メ、開陽艦等四隻ヲ賜フ。（太政類典。慶喜公御實紀。嘉永明治年間錄。海舟日誌。明治史要。）

德川氏軍艦上收

德川氏軍艦上收事蹟

德川氏軍艦上收　顚末左ノ如シ。

元年（明治。）四月十五日

幕府ノ軍艦ヲ收ムル順序ヲ豫定ス。

東海道先鋒總督ヨリ田安中納言ヘ達

軍艦引渡一條ニ付テハ、水夫迄モ可差出趣申立、一々御許容相成到期ニ逃

去候次第、欺罔ノ罪ヲ重ネ、夫而已ナラズ、格別ノ御仁惠ヲ以寛典ノ御所置、悉水泡ト可成行ハ勿論ノ事ニ候。就ては海軍先鋒ヨリハ可相應船ハ無之候得共、其責難免候ニ付、死ヲ以及談判度趣モ被申出、當然ノ義ニテ、右様ノ果決相成候ゆゑ、德川氏ノ家名ハ勿論、萬國ノ賊船ニ相成ゆ次第、不便之事ニ付、品海へ乘戻シ官軍へ引渡迄ノ處、往事ハ不相咎、大久保一翁勝安房へ御委任可被仰付候間、一同盡力イタシ候様可被付候事。

軍艦目錄

開陽　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　凡四十間　砲六間半　二十六門

富士山　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　十百十五人　貳四　長凡三十一間　幅五間半　大砲十二門

蟠龍　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　五百三十人　四　長凡二十三間　幅三間半　大砲四門

朝陽　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　三十人　三　長凡二十八間　幅四間　大砲八門

蒸氣ニハ候得共當時罐相損候ニ付帆前而已ニ為運轉仕候

回天　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　四十六人　四　長凡三十八間　幅五間半　大砲十一門

千代田形　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　七十三人　九　長十七間　幅二間半　大砲二尺三門

觀光　水夫小頭　平火水夫　火焚水夫　焚小夫　二十八人　二　長二十九間　幅五間

是迄唯今廢船相成番人少ゝ附置候。

帝都時代ノ港灣

軍艦乘組人員

開陽艦乘組

海軍副總裁　榎本和泉守
軍艦頭　荒井郁之助
同並　澤太郎左衞門
士官　七人
士官見習　二十一人

富士山艦乘組

軍艦頭　柴誠一
士官　五人
士官見習　二十一人

蟠龍艦乘組

軍艦頭並　松岡盤吉
士官　二人
士官見習　十二人

朝陽艦乘組

士官　二人
士官見習　十五人

回天艦乘組

軍艦頭並　甲賀源吾
士官　二人
士官見習　十八人

千代田形艦乘組

士官見習　七人

右之通御座候。以上。　辰〇慶應四年。四月

軍艦御請取仕組左之通、

一、異人波止場ヨリ御請取方一同乘船之事。

一、請取候船順左之通、

開陽

富士山

蟠龍
朝陽
回天　當時碇泊無レ之由
千代田形
觀光

一、奉行並目付偖又頭立士官一人乘組居、引合相整、外士官ハ前以引拂罷在筈ハ事。

一、水夫頭以下其儘乘船之事。

一、請取刻限追ゐ被二相達一候事。

一、爲二請取一船々乘組人數左之通、

一、參謀

一、三藩ヨリ士官壹人充

一、肥州機關方壹人

一、薩州ヨリ壹人久留米ヨリ壹人

一、火焚二人

一、請取相濟旗引揚候上左之通乘組之事

開陽ハ

肥州銃隊二隊
士官二十人
水夫小頭一人
水夫二人

富士山ハ

薩州銃隊二隊
士官二十人
水夫小頭壹人
水夫二人

蟠龍ハ

筑後銃隊二隊
士官二十人
水夫小頭壹人
水夫二人

朝陽ハ

阿州銃隊二隊
士官二十人
水夫小頭一人
水夫二人

千代田形ハ

十人宛
肥州銃隊二十人

觀光ハ

一、食用之儀ハ藩々用意之事

以上

四月十一日

壹人宛　士官　二人
壹人宛　水夫小頭　二人
壹人宛　水夫　二人

若年寄　田安中納言家老亦使　平岡庄七
目付　服部筑前
　　鵜殿圓次郎

右兩人船々爲探索今晝後ヨリ押送ニあ出船仕候由。海軍先鋒記

四月十三日〇慶應四年。

元年四月廿八日

大總督府田安慶賴ニ令シテ徳川氏ニ軍艦四隻ヲ賜ヒ、其餘ハ悉ク之ヲ收ム〇下略。

——太政類典

廿八日〇慶應四年四月。

一、軍艦之儀、去る廿四日申上ゐ通、富士　朝陽　翔鶴　觀光右之船々、今廿八日海軍御總督御附屬濱田源六立合之上、無滯御引渡相濟申ゐ。此段御屆申上ゐ。以上。

四月廿八日

田安中納言〇徳川慶賴。

——慶喜公御實紀

廿日〇慶應四年四月〇中略。

軍艦四艘ヲ徳川家ニ賜ヒ、其餘四艘ヲ朝廷ニ奉ラシム。

軍艦の儀、度々相達ゐ通、一事不舉にゐへゞ、恭順の道も悉く瓦解に可及時機にて御處置振一結局の奏聞も不被爲調次第にゐ。勿論兵船銃器は、必兵刄を以て天朝へ不相迫實效を表しゐ譯にゐ處、軍艦奉行榎本和泉、主家を思ふ至情感心の事にゐ間、願意相貫きゐ樣、御盡力可被成下ゐ。就ては直樣四艘は其儘被下ゐ付、其餘四艦、急速朝廷へ可差上樣大總督官御沙汰ゐ條、此段相達ゐ事。

四月

東海道先鋒總督印

田安中納言殿○慶頼。　　副將印

朝廷へ左の四艦献貢相濟。

富士山　翔鶴　觀光　朝陽

右之外、開陽・回天・蟠龍・千代田ハ、其儘被下之。　――嘉永明治年間錄

四日○慶應四年四月。

勅使柳原殿○前光。岩倉殿○具定。御入城、參謀五名陪從、御所置被仰渡あり。御書付に云。

第三條、軍艦銃砲引渡可申、追ゝ相當可被差返ゝ事。○前後略。

十二日

軍艦より大原殿へ歎願書差出、館山へ退去す。此兩三日風烈しくして船便不宜、總督矢田堀○鴻。副總督榎本○武揚。と其說表裡し、榎本は船へ行き、矢田堀は陸にあり。大原殿へ出て、御引渡の事を扱ふ。然るに諸船不聞して館山へ去る。大原殿○實。俊より頻に其約に背くを以て、御使しば〳〵なり。○中略。

此頃軍艦引退しを以て、大原殿附屬肥前藩士等申旨あり、田安殿○德川慶頼。へ其約に背くを責む。總裁矢田堀○鴻。は何方へか蟄し、他其事を執る者なし、頻に小臣へ命ぜらるといへども、總裁ありて不扱、究迫せしめて後其事を扱はしむ。頗る兒戲に等敷を以て、固辭再三す。

十五日

田安殿より御直書を以て、軍艦取扱の事御賴みあり。

十六日

督府より軍艦取扱御委任あるべき旨、御書付來る。

軍艦引渡一條に付ては、水夫迄も可差出趣申立、一々御許容相成、到期日逃去ゝ次第、欺罔の罪をかさね、夫而已ならず、格別の御仁惠を以て、寛典の御處置悉く水泡と相成行は勿論の事にゝ。就ては海軍先鋒よりは、可相應艦は無之ゝ得共、其責難免ゝに付、死を以及談判度趣も被申出、當然之儀に付、右樣果決相成ゝては、德川氏之家名は勿論、萬國之賊船と相成ゝ次第、不便之事に付品海へ乘戻し、官軍へ引渡ゝ迄之處往事は不相咎、大久保一翁、勝安房へ御委任可被仰付ゝ間、一向盡力いたしゝ樣、可被申付ゝ事。

四月　　東海道先鋒總督府

田安中納言殿

此書付寫、十五日夜御目付持參。

本日軍艦へ出張。

十七日

軍艦不殘品海へ乘戻す。顚末田安殿へ申す。

廿四日

先鋒總督府御旅館有馬家藩邸へ到り、海江田○信義。木梨○恒準。へ引合、榎本和泉○武揚。の素願貫徹、御書付受取、軍艦に遣す。艦四艘引渡取計らふ。軍艦の所置に付ては、海江田氏能く其情實を明察し、他の欺を容れず、斷然御所置に及べり。亦因て美を朝廷に爲せりといふべし。

廿八日○中略。

本日軍艦富士・翔鶴・朝陽・觀光の四艘引渡す。監察兩人出張。——海舟日誌

十一日○明治元年四月。東海道先鋒總督橋本實梁、江戸城ヲ收ム。又其軍艦ヲ收メントス。榎本武揚和泉守○舊幕府海軍副總裁。風濤ニ託シテ之ヲ辭シ、夜ニ及テ船艦八隻ヲ率キ、館山○安房。ニ走ル。

軍艦脫走

軍艦脫走事蹟

十七日○中略。榎本武揚等ノ品川海ヲ脫スルヤ、東海道先鋒總督橋本實梁、田安慶賴・勝義邦ヲ責メテ、之ヲ追ハシム。是日、義邦船艦ヲ率キテ品海ニ還ル。——二十二日○中略。大總督府令シテ、舊幕府所有ノ軍艦四隻ヲ德川氏ニ賜ヒ、餘ハ悉ク之ヲ上ラシム。——明治史要

八月十九日○慶應四年（紀元二五二八年）。德川氏軍艦頭榎本武揚○釜次郎。等、軍艦運漕船八隻ヲ以テ、品川海ヲ脫走ス。○太政類典。府治類纂。明治史要。

軍艦脫走 顚末左ノ如シ。

元年○明治。八月十九日

是ヨリ先榎本武揚德川氏ノ諸艦ヲ督シテ品川海ニ在リ、密ニ蝦夷地ニ據リテ德川氏ノ業ヲ復センコトヲ圖リ、伊達慶邦松平容保等ト謀ヲ通ス。是ニ至リ艦船八隻ヲ奪ヒテ陸奥海ニ走ル。

榎本武揚勝義邦等ニ遺ル書

寸楮拜啓、愈秋冷之節各位益御壯健御鞅掌被爲在ゐ事、欣然之至ゐ。陳ち我輩一同今度此地ヲ大去致ゐ情實、別紙之通ニゐ間、御博覽之上、可相成ハ鎭將府へ御屆可被下ゐ。尤帝闕並軍防官へハ、夫々手蔓ヲ以テ差上ゐテモ達

不達モ難計ハ間更ニ貴所方ヲ奉煩ハ義ニ御座ハ。我輩此一擧素ヨリ好ハ處ニアラス都テ以ヒ此永々爲ニ皇國一和之基ヲ開キ度爲ニ御座ハ。日々ノ形勢言葉ヲ以テスルヨリ事ヲ以テスルニ不如ト決心致シハヨリ、此擧ニ及ハ義ニハテ、他意更ニ無之ハ。天若不ニ我棄一時ハ、目出度再會拜晤モ出來可ヒ申、否則命也、我亦孰怨、乍ヒ憚小拙相識之諸有司ヘ、御序ノ節宜敷生前之一語御鴻是祈。不具。

八月十九日東征總督記

別紙

德川家臣大擧告文

奥羽越列藩合同會盟シテ兵ヲ擧ケシヨリ以來、數月ノ戰爭ニ及ヒ、今ニ勝敗ヲ分タサルヨリ、追々調停ノ說ヲコリ、頗ル彼此ノ紹介ヲ爲ス藩侯等モアリテ、近ク和平ニ至ラントス。就テハ皇國ノ上下輯睦、民兵革ノ苦ヲ免レ、維一王政ノ日ニ新ナルヲ望マンコト、皇國ノ幸福此上モナキ事ニシテ、吾輩モ亦冀望スル處ナリ。然ルニ今闔國ノ形勢ヲ通覽シ遠ク史乘ニ參シ、現ニ人心ニ鑑ミ、ソノ事決シテ成ルヘカラサルコトヲ決セリ。如何トナレハ

和不和ハ心ニアリテ事ニアラス、强キ者ハ勝ニ乘シテ力ヲ以テ壓制センコトヲ計リ、弱者ハ憾ヲ含ミ恨ヲ飲ミテ死ストモ志ヲ達セントス。是ノ如キ時ハ、一時和平ニ赴クトモ、不日ニシテ復叛亂ニ至ル者是自然ノ理勢ナリ。今王朝ノ兵力奥羽ヲ壓服セシムル不能トハイハサレトモ、其心服ヲ得ルトハ思ハレス、豈啻奥羽ノミナランヤ、今肩ニ錦旆ヲ著ケ自ラ官軍ト稱スル者ト雖モ、亦ソノ心服ヲ得ルトハ思ハレス。蓋當今ノ政體、其名公明正大ナリト雖モ、其實然ラサル者アリ。是十目ノ視十指ノ指ス所ニシテ、今更吾輩之覼縷スルヲ不ヒ待。然ルニ德川氏ノ族屬、德川氏ノ世臣等、皆甘ンシテ其驅使ヲ受ル者ノ如ハ他ナシ、皆其威ニ怵シ、ソノ力ヲ畏レ、不ヒ得ヒ止コレカ命ヲ奉スルモノナリ。否ラサレハ世亂ヲ僥倖シ、封土ヲ企望シ、君臣骨肉ノ情誼ヲ忘レテ一日ノ榮ヲ利スルモノナリ。否ラサレハ陪臣ニ制セラレ、己レヲ賣ラレ利ヲ謀ラルヽヲ知ラサル者ナリ。嗚呼此ノ如キ者コレ心服トイフヘキカ。況ヤ王兵ノ東下スルヤ、我老寡君ヲ誣ユルニ朝敵ノ寃罪汚名ヲ以シ、其處置最初ノ五ケ條ヲサヘ之ヲ甚シト言ヘキニ、其後遂ニ其城地ヲ取上ケ、其倉庫ヲ藉沒シ、祖先ノ墳墓棄テ祭ラス、舊臣ノ采邑頓ニ官有ニ

付シ、竟ニ我藩士ヲシテ其居宅ヲサヘ保ツ能ワサラシムルニ至ル、亦甚シキナラスヤ。然ルニ其家臣老寡君尊王恭順ノ誠意ヲ體シ、士人ノ面目ヲ失フヲ厭ハス、或ハ雙刀ヲ脱シテ農ニ歸シ商ニ變スル者アリ。此輩固ヨリ王家ノ扶助ヲ仰クヘキ抔ト屢次戒アリテ各恩典ニ屬スル如シト雖モ、試ニ問ヘシ、此輩眞ニ其心中恨ムル所ナキカ。間或ハ拔擢セラレテ王臣トナル者アレトモ、人々之ヲ以テ榮トスル者ナシ。如是者ハ何ソヤ。夫レ今唱フル所王政ナル者ハ、眞ニ天下ノ輿論ヲ盡セシ者ナラスシテ、纔カニ一二强藩ノ獨見私意ニ出テ成レル者ナレハ、素ヨリ眞正ノ維一正政ニ非ス。故ニ今我ヲ撫スルニ恩ヲ以スル者ハ、卽曾テ刄ヲ我君ニ制セント計リシモノナラスヤ。苟モ男子ノ心腸アル者甘ンシテ之ニ服從スヘキ。若シ之ニ服從スルナラハ、卽我德川氏ノ族屬世臣藩屏ニ列ナル者、傲然自ラ官軍ト稱スル者ト同日ノ論ナルヘシ。故ニ天理ノ當然、人心ノ自然ニ基キ、平心虛氣ニ之ヲ論スル時ハ、是一等ノ人皆憐ム可ニ非スヤ。是我輩カ曾テ天地ニ誓テ德川氏遺臣ノタメ蝦夷開拓ノ事ヲ請求セシ所以ナリ。然ルヲモ尙允准ヲ蒙ル不能、卽是二姓ニ事ヘサルノ義ヲ守ル者ヲシテ竟ニ安身立命ノ地ナカ

ラシムル者ナリ。因此觀之、妻子ヲ棄、身命ヲ惜マス、其他仇トスル所ヲ仇トシ、兵ヲ弄ヒ死ヲ期シテ自快シトスル者モ、未タ一概ニ反名ヲ負ハシムル不能ニ似タリ。サレハ奥羽列藩ノ合從會盟、コレヲ義舉ニ非スト謂フ可ラス。請フ尙一歩ヲ進メテ之ヲ論セン、今朝廷天下ヲ統御スル、去私就公、擧正鋤姦、鰥寡孤獨ヲシテ凍餓ノ患ナカラシメントノ御主意ト、屢々布告アレトモ、當時權勢アル役々中ニハ、市井無賴ノ徒、刑餘之小人、貪惏不知恥之輩亦尠カラス。此輩遽ニ施青紆紫、傲然政務ニ參與シ、朝ヨリ退ケハ輙チ酒色放縱、傍若無人。今天下蒼生盛ニ兵革ニ苦ム。正ニ是丈夫先憂後樂之秋ニシテ、豈佚遊放醉之時ナラン。然ルニ此輩我藩慷慨死節之士殺身爲仁之徒ヲ以テ、一概目シテ賊徒トナシ、更ニ江戸之細姦ヲ前導セシメ、黑夜屋ヲ圍ミ迫ルニ銃劍ヲ以テシ、其人ヲ捕ヘ、其財ヲ奪ヒ、名付テ分捕ト稱シ、公然之ヲ朝ニ奏スルニ至ル。嗚呼此豈所謂擧正鋤姦之所爲ナランヤ。此豈去私就公之謂ナランヤ。我藩有志者ハ東西ニ分散シ、無力者ハ農商ニ歸シ、カノ鰥寡孤獨之者ニイタツテハ、飢色已ニ旦夕ニ逼レリ。我輩今日迄抑忍呑氣、謹デ竢命シカトモ、最早此有樣ヲ座視スルニ忍ヒス、泣テ此ヲ帝闕ニ訴ントス

レハ、言路梗塞情實未タ通セサル前ニ、頭足既ニ異所ニイタルハ必然タリ。於是此地ヲ大去スル事ヲ決シ、長ク皇國一和ノ基業ヲ開クヘキタメ、其端ヲ開カントス。夫レ彼此心中ヨリ一和スルニ至ラシメンニハ、强者ハ其强ヲ挫キ、自ラ戢ル所ヲ知リテ、敢テ力ヲ負ンテ其志ヲ逞フセシメス、弱者ハ其弱ヲ扶テ其憤ヲ攄ヘ、其寃ヲ伸シメ、ヨク其志ヲ達スルニ自足セシムルニ在ル事、上ニ既ニ述ル所ノ如クナレハ、吾輩ノ此ヲ大去スルハ、自然我業ヲ妨クル者ニ抵敵セサルヲ得ス。コレ敢テ亂ヲ好ムニアラス、和ヲ妨クルニアラス、其亂ヲシテ增長スル事不能シメ、其和ヲシテ永久ヲ保タシメ、闔國士民ノ綱常ヲ維持シ、數百年好懦怠惰ノ弊風ヲ一洗シ、其義氣ヲ皷シ、皇國ヲシテ四海萬國ト比肩抗行シテ恥ルコトナキ樣ニセンハ、唯此一擧ニアル事、吾輩敢テ自任スル所ナク、廟堂在位ノ君子ヨリ水邊林下ノ隱士タリトモ、苟モ世道人心ヲ忘レサル者ハ、此言ヲ聞給ンヲ願フ。

慶應四年八月日　外務省記

謹ゐ奉拜復、御直書一通慥ニ雜賀子ヨリ落手、拜讀仕ゐ。然ハ弊藩海軍一同ノ者、不俱戴天ノ賊徒ヲ誅伐可仕ハ勿論ノ素志ニテ、只奥羽越御列藩義兵ノ盛舉、乍微力一日モ早ク御助力仕度存ゐへ共、主家成行ノ段見屆ル後ナラデハ、臣子ノ職掌如何ト決心仕居ゐ處、前月既ニ封邑モ相定ゐヨリ、直ニ移封ノ手立ニ取掛リ、彌當月中ニハ寡君龜之助始、隨從ノ家來共、駿府表迄軍船或ハ運送船ニテ護送イタシ終リ、此一段後遲クモ來月廿日頃迄ニハ、野拙自盡諸船ヲ引率シテ仙臺迄罷越、同所ニテ奥羽ヲ防禦追擊ノ相談仕、夫ヨリ所々ヘ相廻リ可申候間、左樣御承知可被下ゐ。尙書外委細ノ義ハ、雜賀子拜謁ノ上可奉申上、野拙拜謁之期在近、伏ゐ願、三公閣下臨時御保護可被遊ゐ。謹言。

七月二十一日〇慶應四年

榎本釜次郎（花押）和泉事改名

松平祐堂樣

德山四郎左衞門樣

山中寛助樣　櫻井光祐私記

〇復古記云、祐堂ハ容保ノ號ニシテ、德山ハ板倉勝靜、山中ハ小笠原長行ノ變名ナリ。又伊達慶邦ト謀ヲ通セシハ廿六日ノ條ニ見ユ。參看スヘシ。

○戊辰事情概旨ニ云、七月（○慶應四年。）仙台横尾東作・會津雑賀孫六郎・米澤佐藤市允ヲシテ、舊幕ノ海軍榎本等ヲ誘導シ、歃背高田ヲ衝クノ密策ヲ授ク。

○榎本武揚等口供ニ云、舊主徳川慶喜恭順之後、軍艦兵器等盡ク御取上ニ相成候趣承知仕候ニ付、此上主家ノ興廢如何可ニ相成一ト焦慮之餘リ、順逆ヲ不レ辨、蝦夷地ヘ割據仕、恢復可レ致處存ニテ、明治元辰年八月十九日夜、開陽回天蟠龍千代田神速長鯨美加保咸臨等之八艦ニ人數二千人餘乘込之儘、品川沖出帆脱走。

○苟生日記ニ云、八月十九日（○慶應四年。）新晴明媚リンデイ神速船歸著、至レ夜風微浪恬、月光如ニ白日一、第十一時艦船八隻開帆離鄕之情不レ可ニ復言一也。

大總督府參謀鎮將府辨事ニ贈ル書二通

昨夜舊幕府軍艦、何方ヘ歟脱走致シ、品海ニハ只一艘モ無レ之、此段注意申上ゐ也。

八月廿日　東征總督記

徳川船不レ殘一昨廿日（○慶應四年八月。）晝四ツ時頃浦賀沖ヨリ大島ヘ向ケ航行、夕八時東ヘ方向ヲ變シ候ハ、一針路奥州ト奉レ察候。

昨日（恐クハ一昨日ノ誤。）脱艦爲ニ斥候一、武藏丸ハ房州邊差出シ候處、別紙（上文ヲ指ス）之通申出ゐ。依テ御披見ニ入候也。

八月廿二日　軍務官記

品川沖碇泊罷在候當家軍艦幷蒸氣運送船トモ去ル十九日（○慶應四年八月。）夜何方ヘ歟立去申ゐ。右ハ於ニ私共一遠退相達ゐ義ニハ無レ之ゐ間、早々行先探索仕相分リ次第追々申上ゐ樣可レ仕ゐ。且軍艦頭榎本釜次郎ヨリ勝安房其外ヘ宛差越ゐ書面之趣ニテハ、却テ悖慢不敬之至リ、殊ニ名分相辨不ニ罷在一ゐ次第、畢竟私共不行屆ヨリ右樣立至ゐ段、甚以奉ニ恐入一ゐ義ニ付、猶精々取調可ニ申上一ト奉レ存候得共、先此段不ニ取敢一御屆申上候。以上。

駿河藩　平岡丹波　淺野次郎八（○長祚。）
織田和泉　勝安房（○義邦。）
山岡鐵太郎（○高行。）

鎮將府日記
靜岡藩記

品川沖碇泊罷在ゐ龜之助（○徳川家達。）軍艦蒸氣幷運送船共去ル十九日夜何方ヘ歟立去申ゐ段、昨廿日屆出ゐ。畢竟私共不行屆ヨリ右樣立至リゐ義ト深

奉恐入候。委細ハ龜之助重役共ヨリ可申上候得共、此段不取敢御屆申上候。以上。

八月廿一日〇慶應四年。

松平確堂〇齊民　靜岡藩記

品川沖碇泊罷在候德川龜之助方軍艦蒸氣並運送船共、去ル十九日夜何方ヘ歟立去ル段、昨廿一日宗家重役共申聞、於私モ深奉恐入ル間、此段不取敢奉申上候。以上。

八月廿二日〇慶應四年。

田安中納言〇德川慶賴。　德川慶賴家記

〇復古記海舟日記抄ニ云、八月廿日〇慶應四年。開陽ヨリ一封到來、昨夜御舟悉ク大去、其行ク所ヲ知ラス。趣意書大擧告文ヲ指ス。即刻中老衆ヘ爲持差出ス。嗚呼士官輩我ガ令ヲ不用。

廿一日。增田貞右衞門來訪、明後日否文通承リ之爲可遣約束イタシ、但軍船脫走可致事ハ過日以來精々心附說論等イタシ、且長谷川氏ヘ差止方愚存モ申延置ル處、不任心底。愚考ニハ多分差止リ可申見込モ有リトイヘドモ、恐ラク不用意ノ所ヨリ激說セシヤ甚疑敷モノアリ。此後之說諭等、愚存御採用モ被下ルヽニ於テハ、容易ク引戾行屆ヘク歟。右等右京亮殿ヘ可然被仰上被下度ト云々。

廿四日。梅田國來訪、聞ク仙臺藩太田盛、米藩宮島誠一郎輩、先日京師ヨリ歸來リ、窃說ク、二條家廣橋家其他ニモ當時之公口ヲ廢セムト云者アリト。是等ヲ以テ考レハ、我カ軍艦之士等、小節小細工ノ輩ニ皷動セラレ、忽チ輕擧ニ及ヒシ歟不可知。永井主水之乘組タル、尤以テ可怪候。

廿六日。大久保氏ヨリ返書到來、四時尋訪スヘキ旨申越、問尋當節ノ心裡ヲ訴フ。軍艦脫走之顚末、脈胳愚考等、心腹不包。

此頃我ガ所行ニ附キ官兵中猜忌甚盛ニ到リ、脫走其他大抵我ガ區畫ニ出ル歟之風聞紛々トシテ耳ニ入ル。當春以來君上之高志ニ體認シ、皇國之御爲ニ死力ヲ奮フトイヘ共、微力其跡如今日、亦如何セム。不幸ニシテ一死ヲ得ルトモ、窃ニ天ニ辱ル所ナキカ如シ。古來ヨリシテ危險ニ周旋スル者、終ニ其極獵禽煮ラル、又何ソ疑ヲ生センヤ。

廿七日。或人開陽艦脫走之趣意ニ付、頗ル確證有ルノ書ヲ送ル。略ニ云、熊藩

幷米蘭佛國之士等激スル所アリト云々。以是我カ嫌忌ヲ解カム事不難。鎮將府皆我カ手ニ出ルヲ疑フ歟。示シテ以テ是ヲ解クニ何ノ難キ事カアラム。然レトモ列藩内破シテ其國議一定セス、隱顯皆不可言モノアリ。ユヘニ其各國猜忌シテ一難ヲ他ニ讓ラムト欲スル者天下皆是也。我タトヘ嫌忌之爲ニ其死ヲ遁レストイヘトモ、如斯之瑣事ヲ以テ一身ヲ清ク成サントセンカ、命數ハ天也、人ノ疑ト不疑ト何ソ是ヲ以其行ヲ達ヘム哉。

晦日。大久保氏ヘ小拙脫艦ニテ御疑念蒙ルノ風聞アリトイヘトモ、人ヲ出タシ證ヲ以テ自己ヲ遁レムトセス、是ハ從來之万緒甚不行屆而已。此事辯解ヲ求メム哉、云々。

九月朔日。櫻井貞藏軍艦開陽ヘ外國人三名乘組居シヲ聽ト見留タリ、是ハ八月十五日也ト聞ク。蓋其脫走セシ緣故ヲ詳ニス。

勝義邦書翰節略

扨者過日小松殿長谷川氏ヘ久々ニテ拜眉、其節荒增心裡ハ訴候如ク、龜之助事出立後ニ到候テモ、先々少靜可仕ト存候處、昨今脫走之者共相發、既ニ軍艦之者等ヘハ再々書通、榎本釜次郎義モ承伏、格別過激之樣子モ無御座ハ返書差越ハ事故、多分輕擧致申間敷トモ存罷在候處、此程之擧ニ立到、何共微力不行屆之段、恐入候義ト奉存候。內々探索等モ仕居候ヘトモ、其確證ハ未得ハ間難開口候ヘトモ、案外之所ニテ鼓舞被致候哉ニモ相考候義ニ御座ハ。若哉愚考仕如ク之樣子ニテハ、一時人心モ浮立可申歟。關東之者ハ何程之事モ致間敷候ヘドモ、所々ニテ狹小之浮說相興ハヘハ、矢張鎭靜仕居ハ者共モ一鼓被致ハ氣味合御座ハテ、無益之少動而已多ク發可申哉ト深ク心痛恐縮仕候。

辰〇慶應四年。八月廿五日

大久保參與閣下　海舟日記抄

檄文

我老君恭順謹愼一途ニ朝命御遵奉被爲成候ニ依テ、西軍容易ク關東ニ入リ、老君ヲ寃罪ニ處シ奉リ、剩ヘ封土ヲ削リ、城ヲ移シ、士民之饑渴ヲモ不顧、名ハ王政ト雖モ、其實ハ二三諸侯之手ニ出ル所ニシテ、其苛酷ナルコト天地鬼神ノ所知也。此時ニ當テ誰レ義兵ヲ擧ゲ奸賊ヲ誅滅スルコトヲ知ラサランヤ。唯老君之命ヲ體認シ、含怨忍恥、今日ニ至ル而已。當春德川家之運

送船千秋丸、仙臺之一港ニ碇泊セシニ、薩船來テ之ヲ掠奪シタルコト明白ニ付、海軍先鋒大原前侍從殿ヘ我海軍總督ヨリ之ヲ訴ヘ、御裁判ヲ請ヒシニ、一言之御返答ナシ。將近日北越ニヲイテ順動丸ヲ掠奪セシモノ有リト聞ク。是定テ薩人之所爲歟。假令ハ之ヲ鎮撫府ニ訴フルトモ、御裁判無之ハ千秋丸之一條ヲ以テ明ナリ。故ニ今予輩孤船微力ヲ不顧、主君ノ命ヲモ不待、先ツ奥羽沿海ニ航シ、如此海賊ヲ探索シ、其實ヲ得ル時ハ、之ヲ天下ニ布告シテ、其罪ヲ正シ、次ニ奥羽列藩之義軍ニ連合シテ、無數之賊軍ヲ掃攘セント欲ス。諸君若シ我輩之義心ニ同意シ賜ハヽ、速ニ追船シテ應援シ賜フヘシ。

海軍義兵著鞭

長崎丸乘組

中山要助　長川勘次郎

森本幸之助　恒谷愼三

小栗邦太郎　加藤鍬藏

江守悅五郎　田口俊之助

佐久間元次郎　櫻井捨吉

辰○慶應四年。六月

諸船御乘組中　三條家叢書

大澤龜之亟　古川節藏

○復古記云、長崎號ハ運輸船ニシテ、神速號等四船ト德川氏ノ所有ニ係ル。海舟日記抄ヲ按スルニ、長崎丸脫走林昌之助奥羽所々ヘ乘廻スニ付、速ニ引戻、船ハ督府可ニ差出一旨、西城ヨリ御沙汰有レ之トアリ。蓋本船屢奥羽沿海ニ往來シテ專ラ聲息ヲ通シ、六月中諸艦ニ先チテ脫セシモノ、因テ此ニ附記ス。

○增田明道事蹟ニ云、戊辰○慶應四年。六月再ビ岩倉公ヘ拜謁言上ス。

一、品海ニ於テ、德川諸艦開陽回天ヲ初メ、八艘ノ艦隊ヲ組ミ、依然トシテ動搖ヲ窺ヒ、體ニ相見ヘ、江城之義甚以覺束無キ次第ニ相見ヘ候旨言上ス。然ル處御同人ヨリノ御沙汰ニハ、抑モ德川七十萬石ニ封セラレ候得共、今又二萬石位ハ餘分ニ御增加被成ヽテモ是非獻艦候樣取計可キ旨、御申含メ相成ニ付、旁以テ早刻肥後萬里丸ニ乘込、江戸ヘ參リ、御含メ越ノ次第ヲ第一三條公ヘ言上スル後、參謀大村益次郎ヘ德川艦ノ議ヲ謀リヽ處、同人義ハ肯セス。然ル後二ケ月ヲ不越シテ箱館ヘ向ケ脫艦ス。

同年七月、右ニ付三條公ヘ言上相濟シ、大村ト謀レ共事不成、故ニ京師ヘ一先引取、岩倉公ヘ其次第ヲ言上ス。

元年〇明治。八月二十二日

駿河藩重役、田安中納言、松平確堂へ達

品川碇泊ノ軍艦蒸氣運送船共、去十九日夜致脫走候趣、幷右船乘組榎本釜次郎殘書等指出ゐ處、全奉對天朝悖慢不敬名分不相辨、慶喜謹慎ノ意ニ戻リ妄動潛亂ノ所業ニ及ヒ候段、其方共不行屆ヨリ右樣立至候儀、深奉恐入候趣ハ聞屆ゐ得トモ、右脫走ノ者擧動顚末ニ依リ候テハ、德川家ノ大事ニモ致關係候儀ニ付、差向鎭撫ノ道如何樣相達し心得ニ候哉、屹度可申上旨、被仰出ゐ哀。（將〇但、田安中納言松平確堂ヘハ、初メニ德川龜之助所持ノ八字アリ。）

尙以、右船乘組一手ノ者、兼テ築地元藝州邸ニ在留、右脫走ノ節居殘候者嚴重始末糺問ノ上、可申上候。

駿河藩平岡丹波等屆

品川沖碇泊罷在候當家軍艦幷蒸氣運送船トモ、去十九日夜何方へ歟立去申候。右ハ私共ニ於テ遠退相達候儀ニハ無之候間、早々行先探索仕、相分リ次第追々申上ゐ樣可仕ゐ。且軍艦頭榎本釜次郎、勝安房其外へ宛差越ゐ書面ノ趣ニテハ、却テ悖慢不敬ノ至、殊ニ名分相辨不罷在次第、畢竟私共不行屆ヨリ左樣立至候段、甚以奉恐入候儀ニ付、猶取調可申上ト奉存ゐ得ドモ、先此段不取敢御屆申上候。以上。（元年〇明治。八月。）

各藩へ達

品川沖碇泊有之ゐ德川龜之助所持ノ軍艦並蒸氣運送船共都テ八艘、乘組榎本釜次郎以下、去ル十九日（〇慶應四年八月。）夜品川脫走ニ及候旨、別紙之通龜之助重役共ヨリ屆出候。元來右船ノ義、始終品川沖ニ碇泊有之、主人慶喜謹慎ノ意ヲ體シ、猥ニ揚碇仕間敷旨、屹度御請申上ゐ處、右等妄動脫走致シ、剩ヘ奉對天朝、悖慢不敬ノ殘書等致置、全反亂ノ所業、難被爲捨置ゐニ付、別紙ノ通德川重役共へ御沙汰被仰付候間、各藩領海等へ相廻ゐハヾ、早々注進可有之、自然揚陸等致ゐハヾ、搦取差出可申、若致手向ゐ節ハ、人數ヲ以討取不苦ゐ旨、兼テ相心得可申條、被仰出候事。

但、右ノ趣條約各國へモ夫々御達相成候事。

脫走船名

開陽　千代田形　回天　蟠龍　長鯨丸　美賀保丸

神速丸　咸臨丸

神奈川府へ達

品川沖碇泊有之ゐ徳川龜之助所持ノ軍艦幷蒸氣運送船共都テ八艘、乘組榎本釜次郎以下、去十九日（慶應四年八月。）夜品川脫走ニ及ゐ旨別紙ノ通龜之助重役共ヨリ屆出ゐ、元來右船ノ儀始終品川ニ碇泊有之、舊主慶喜謹愼ノ意ヲ體シ、猥ニ揚碇致間敷旨、龜之助重役共ヨリ兼テ屹度御受申上候末、忽然脫走ニ及、剩ヘ奉對天朝、悖慢不敬ノ書面等殘置候義、全反亂ノ所業ニテ、勿論主命ヲ受スシテ無故致脫走候者、畢竟海賊ノ所業ヲ働候ハ必然ニ付、別紙之通龜之助重役ヘ御沙汰被仰付候間、右ノ趣各國公使ヘ其官ヨリ通達致シ、萬一開港場ヘ襲來、外國人ヘ對シ不法ノ擧動有之ニ於テハ、時機ニ應ジ如何樣ノ所置致候テモ不苦、若又渡海等致ゐハヾ、各國政府ニ於テモ嚴重拒絕相成、兩國政府條約交際ノ御趣意混雜無之樣、取計可致旨、被仰出候事。

元年（明治。）八月廿五日

鎭將府書ヲ徳川家達ノ老臣及ビ田安慶賴・松平齊民ニ下シテ、逋賊鎭靖ノ方略ヲ責問ス。又管內諸藩ニ令シテ、逋賊ノ陸ニ上ルモノヲ緝捕セシム。

達　徳川龜之助（家達。）重役

品川碇泊軍艦蒸氣運送船共、去ル十九日夜致脫走ゐ趣、並右船乘組榎本釜次郎殘書等指出候處、全奉對朝廷、悖慢不敬、名分不相辨、慶喜謹愼之意ニ戻リ、妄動潛亂之處業ニ及ヒ候段、其方共不行屆ヨリ右樣立至リ候義、深奉恐入候趣ハ聞屆候得共、右脫走之者擧動之顚末ニ依リ候テハ、徳川家ノ大事ニモ致關係ゐ義ニ付、差向鎭撫之道如何樣相立候心得ニ有之ゐ哉、屹度可申上旨、被仰出候事。

尙以、右船乘組一手之者、兼テ築地元藝州邸ニ在留、右脫走之節居殘ゐ者、嚴重取調、始末糺問之上可申出候。（八月○鎭將府日誌。辨事局叢書。靜岡藩記。）

徳川龜之助重役

先般品川脫走船乘組之者人員並姓名取調、早々可申出候事。（八月（○慶應四年）○靜岡藩記。）

但、其節陸地脫走之者モ有之趣、夫々取調可申出候事。

各通　田安中納言　松平確堂

徳川龜之助所持之軍艦蒸氣運送船共、去ル十九日夜品川表致脫走候趣、並右船乘組榎本釜次郎殘書等、龜之助重臣共ヨリ差出シ申處、全奉對朝廷悖慢不敬、名分不相辨、慶喜謹慎之意ニ相戻リ、妄動潛亂之所業ニ及ん段、龜之助重臣並其方等不行屆ヨリ、右樣立至リ候義深奉恐入候趣聞屆候得共、右脫走ノ者擧動顚末ニ依候テハ、徳川家之大事ニモ致關係候義ニ付、差向鎭撫之道如何樣相立候心得ニ有之候哉、屹度可申上旨、被仰付候事辰(〇慶應四年)八月

○鎭將府日誌。徳川慶賴家記。

○復古記云、家達老臣ヘノ達書二條並ニ日帙ス。慶賴家記ヲ按スルニ、八月二十五日(〇慶應四年)家臣西城ヘ罷出候處、御書付辨事試補ヨリ御渡トアリ。仝日相發セシコト疑ヒナシ、因リテ本日ニ收ム。

管內各藩ヘ達鎭將府

水戸中納言　松平大和守　松平下總守
堀田相模守　鳥居丹波守　水野出羽守
右留守居

別紙三通、刻付ヲ以早々可致廻達候。猶先般相觸ん通、夫々ヘ可相達候事。八月二十五日(〇慶應四年)

別紙

品川沖碇泊有之候徳川龜之助所持之軍艦並蒸氣運送船共都テ八艘、乘組榎本釜次郎以下、去ル十九日夜品川脫走ニ及候旨、別紙之通リ龜之助重役共ヨリ屆出候。元來右船之儀ハ、始終品川沖ニ碇泊有之、主人慶喜謹慎之意ヲ體シ、猥リニ揚碇仕間敷旨、屹度御請申上候處、右等妄動脫走致シ、剩ヘ奉對天朝、悖慢不敬之殘書等致置、全反亂之所業、難被爲捨置ん ニ付、別紙之通徳川重役共ヘ御沙汰被仰付ん間、各藩領海等ヘ相廻リ候ハヾ、早々注進可有之、自然揚陸等致候ハヾ、搦捕差出可申、若致手向候節ハ、人數ヲ以討取不苦候旨、兼テ相心得可申條、被仰出候事。八月○鎭將府日誌。古河多古高岡各藩記。

但、右之趣條約各國ヘモ夫々御達ニ相成ん事。

脫走艦名

開陽○外七隻略。

○別紙三通ノ內、二通ハ外國贈答ニ、家達老臣屆書ハ十九日ニ載ス。又御沙汰書ハ上ニ見ユ、故ニ略ス。

帝都時代ノ港灣

二十五日(〇慶應四年)

徳川龜之助家來稟請

此程當家軍艦其外脫走仕候義ニ付右鎭撫之道相立可申旨被仰出候段、何共恐懼之至奉存候。早速駿府表ヘモ申遣候處、一同驚愕罷在候。唯々深ク奉恐入候義ニテ、何分鎭撫之見込モ無御座段申越候。私共ニ於テモ晝夜苦慮夫々手配モ爲仕ゟ得共、大洋中之義ニモ有之、差向鎭撫ノ仕方可相立見據モ無御座、誠以奉恐入候次第御座候。何卒事情篤ト御亮察、御寛大之御所置ニ被仰付候樣仕度、此段偏奉哀訴候。以上。

徳川龜之助家來
平岡丹　波　淺野次郎八
織田和泉勝　安　房
山岡鐵太郎

猶以、右船乘組之者、築地元藝州邸ニ在留、右脫走之節居殘候者取調可申上旨、被仰渡候ニ付、夫々嚴重ニ糺問仕ゟ處、脫走之者ヘ連及候義、毫末モ無之段、私共迄調印之書面ヲ以申出、事實相違無御座候間、何卒至仁之御沙汰被成下候樣奉願候。以上。（靜岡藩記）

田安中納言仝上

此程徳川龜之助所持之軍艦其外脫走仕候義ニ付、右鎭撫之道相立可申旨、被仰出何共恐懼之至奉存候。早速後見松平確堂並重臣共ヘモ申達、駿府表ヘモ申遣ゟ處、唯々深奉恐入候義ニテ、何分鎭撫之見込モ無御座候段申越、於私モ種々苦慮仕ゟ得トモ、大洋中ノ義ニテ、差向鎭撫之仕方可相立見込モ無御坐、奉恐入候次第ニ御坐候。何卒事情御亮察被成下、御寛大之御所置ニ被仰付候樣仕度、奉歎願候。以上。（九月〇明治元年）（德川慶賴家記。）

松平確堂仝上

此程徳川龜之助所持之軍艦其外脫走仕ゟ儀ニ付、右彼仰出候段、何共恐懼之至奉存、晝夜苦慮、夫々手配モ爲仕候得共、大洋中之義ニモ有之、差向鎭撫之仕方可相立見据モ無御坐、委細龜之助重臣共ヨリ奉申上ゟ通、誠以奉恐入候次第御坐候。何卒事情篤ト御亮察被成下、御寛大之御所置ニ被仰付ゟ樣仕度、此儀偏奉哀訴候。以上。（九月〇明治元年）〇靜岡藩記。

〇復古記云、以上上申ノ日皆佚ス。

木戸孝允、大久保利通ニ贈ル書柬略

一、御出輦一條モ兎角ノ事ニテ、不圖々々御隙取ト相成、誠ニ以氣ヲモミ候

マデニテ、苦心ノ至ニ御坐候。漸供奉等之事モ今日御發令ニ相運、來月十三日ヨリ五日（五ノ上恐ハ廿ノ字ヲ脫ス。）ニハ無ニ相違一御發輦被レ爲レ遊候事ト奉レ存候。然處此度軍艦之脫走ニテ變態生ジ、終御出輦ニ關係仕候事出來不レ仕樣ニト祈念此事ニ御坐候。已ニ已ニ其議相起候ニ付、抗論漸御防キ申上置ゐ。元ヨリ御疎略ハ不レ被レ爲レ在御事ニ可レ有レ之候ヘ共、何卒製鐵船歟、別ニ堅固ナル一軍艦ハ、急々御買求被レ爲レ在度奉レ存候。且又德川龜之助恭順ヲ盡シ、尙最初軍艦中ヨリモ眞情吐露歎願仕候ニ付、格別寬大之思食ニテ、軍艦四隻德川ヘ被レ下、引繼德川家名等モ被ニ立下一候處、至ニ今日一如レ此之擧動仕候テハ、元ヨリ德川龜之助之罪難レ免次第ニテ、奉レ對ニ朝廷一候テ、重々不屆之至ニ御坐候。此段ハ德川ヘモ屹度御達シ被レ爲レ在候テ可レ然御事ト奉レ存候、譎詐ヲ以奉レ欺ニ朝廷一候ハ、德川之家風トハ乍レ申、至ニ今日一候テハ、皇國御興廢ノ際、御了簡難ニ相成一御事ト奉レ存候。（八月廿三日（〇慶應四年）甲東稾紙。）

元年八月廿六日

榎本武揚ノ品川海ヲ脫スルヤ、洋中颶ニ遭フ。此日屬船一隻（美賀保號。）下總銚子浦（海上郡。）ニ漂到ス。其餘仙臺海ニ入ルモノ前後七隻、各地逋逃ノ諸兵モ亦多ク仙臺ニ集ル。武揚乃チ伊達慶邦・板倉勝靜等ト會シテ、二本松ヲ擊チ、若松城ノ圍ヲ解ンコトヲ圖ル。（復古記）

大河內右京亮家來深井繁之助稟報

右京亮領分下總國海上郡銚子陣屋詰役人共ヨリ用向有レ之、今曉用狀相達候內、去ル廿六日夜九時頃同郡飯沼村內黑生浦ヘ何レノ船共不ニ相分一難船一艘漂着之旨、村役人共ヨリ屆出候間、早速詰役人之者罷出、樣子柄相糺候處、乘組之者何レモ心體勞居、言舌更ニ不ニ相分一候得共、德川家臣ニテ、船名美賀保丸ト相唱候趣、粗申聞候。然ルニ折節暴風逆浪荒ク、人數多寡取調等ハ勿論應接等何分難ニ行屆一候ニ付、一旦引取、猶風波沈靜次第巨細相糺可ニ申越一段申越候。右ハ兼テ御觸達御坐候脫走艦名之內ニ付、急速御屆仕候。尤御觸達之趣ハ、早速彼地ヘ申遣候得共、途中行違相成候義ト奉レ存候。此段申上候。

以上。（九月朔日（〇慶應四年）〇鎭將府日誌。大河內輝聲家記。）

〇復古記輝聲家記ニ云、九月朔日鎭將府辨事方ヘ右之通御屆書差出ゐ處、大總督府ヘモ相屆候樣御達ニ付、同樣御屆書差出候處、參謀被ニ受取一、夜陰ニ付委細ハ明朝可ニ相達一候得共、此節官軍至テ無人ニ付、近領野火止ヨリ出兵

之手筈可致置旨、被相達之。

同家來菅谷團二郎同上

追々御屆申上置ゐ通、右京亮領分下總國銚子飯沼村内黑生浦へ、去ル廿六日夜品川沖脱走ノ軍艦漂着、追々上陸イタシ、德川家臣ニテ駿河へ引越候面々ノ旨申聞居候處、右脱走ニ付テハ、書附途中行違相成、同廿九日相達候得共、彼地少人數ニ付御出兵ノ儀奉願、且近領板倉主計頭殿内田主殿頭殿へ援兵ノ儀賴遣、諸兵集參ノ上搦捕手筈仕候心得ヲ以、先ヅ夫迄穩便ニ取扱、陣内嚴重相固、見張之者差出置ゐ處、當朔日夜船路並陸地引分脱走之兆相見候旨、注進有之候付、兼テ備置候人數早速手分繰出シ川通リニ待伏罷在ゐ處、脱走船三四隻見受候ニ付、大小砲ヲ以頻ニ放拂候得共闇夜之儀殊ニ折節大風雨ニテ碇ト相分兼候得共、川上之方へ逃去候樣子ニ付、猶追船ヲ以進軍致シ、其後之模樣未ニ相分、陸地之方モ早速三手ニ分、探索人數差出候得共、是又イマタ相分不申候。尤前書兩藩へモ急速及注進、探索方等賴遣ゐ旨申越候。猶委細之義ハ、注進次第可申上ゐ得共、先ツ此段不取敢御屆申上候。以上。九月五日（〇慶應四年）鎭將府日誌。高崎藩記。

〇仙臺藩記ニ云、是ヨリ先奥羽同盟ノ二十七藩、衆議ノ上、慶邦ヨリ品海ニ漂泊セル榎本釜次郎ヘ書東ヲ送リ、書東ハ之ヲ供ス。數艘ノ軍艦ヲ呼寄セ、八月二十六日〇慶應四年。迄ニ左ノ通着艦仕候。

回天	甲賀源吾
開陽	榎本釜次郎
長鯨	柴誠一
長崎	古川節藏
蟠龍	松岡政吉
千代田	
神速	

右二艦船將等不レ詳候。

右七艦乘組、大凡千五百人餘。

外ニ千秋・鳳凰・美賀保・大江モ來リシカトモ、三加保ハ房州地ニテ破船、官軍ヘ召上ラレ、大江ハ洋中往反等ニテ逗船不定ニ候。

兵隊並隊長左ニ、

遊撃隊　隊長　人見勝太郎

陸軍隊　春日左衛門

新撰組隊　土方歳三

彰義隊　澁澤精一郎

大砲隊　關廣右衛門

傳習隊　瀧川某

神木隊　酒井某

歩兵隊　隊長相知レ不申

一聯隊　松岡四郎次郎

右ノ外岩城口ヨリ上陸ノ兵モアリ。

日光宮附屬又ハ諸道ヨリ逃入ル兵士數多有之候得共、相知レ候分計リ相記申候。

爰ニ於テ、闔藩ノ諸士逆意ニ與スルモノ十ニシテ七八ニ居リ、正議ヲ固守スルモノ僅カニ二三ニ過ス。正義謝罪ノ說ヲ唱フルモノ八十四人ヲ搜索シ、悉ク斬首セスンハ決戰ノ妨ヲナシ、勢ヒ不振基ナリトノ暴說ヲ募リ、謝

罪ノ議殆ント破レントス。加之ス、榎本釜次郎仙臺降伏ノ色ヲ露ハシタルヲ察シ、折々參城、慶邦ニ說テ云ク、味方數度ノ敗軍ニ及フト雖モ敢テ屈スヘカラス、若又彌々迫リ仙臺落城ニ及ヒナハ、闔藩ノ士ヲ合一シ、我軍艦ニ航シ函館ニ據リ、機會ヲ待テ再擧スヘシトテ、頻リニ勵スト雖トモ、慶邦更ニ不肯然ルニ執政等倍迫テ九月四日ヲ以慶邦父子出陣タラシメントス。然ト云トモ父子斷然決意、進軍ハ成カタキノ嚴令ヲ下セリ。

又云、松本要人德川氏ノ舊臣並桑名諸家脫藉ノ徒榎本釜次郎人見勝太郎等ヲ始メトシ、烏合ノ賊兵數十人ヲカタラヒ、郭中郭內ニ集合シ、榎本等ノ周旋ヲ以、佛人ヲ松ノ井ノ邸ニ（原註城下ノ別邸。）寄宿セシメ、兵制傳習ヲ名トシ、猶モ奧羽ノ兵ヲ募リ、回天開陽等ノ諸艦ヲ航シ、海陸一同大擧シ必死ノ奮戰ヲ盡シナハ寄手何程勝ホコリタリトモ、一時ニ關東迄盛反サン事難ニアラストシテ、逆徒等頗ル猛威ヲ振ヒ、慶邦ヲ越河口、宗敦ヲ駒ケ嶽口ヘ出張、親ラ諸軍ヲ指揮セシメント計テ、凶暴一倍仕候。

又云、六月二日德川舊臣遊擊隊々長人見勝太郎林昌之助等其勢凡百十六人、蒸氣艦ニテ平潟ヘ着岸、仙臺監察氏家惣內氏家晋（原註周旋方。）迎ヒテ其來ル

所謂ヲ尋ゐ得ハ、彼等荅テ上國數度ノ合戰不レ利、海ニ航シ房州沖ニ漂泊致ゐ處、圖ラス貴藩ノ大江艦ニ逢ヒ、坂英力（原註仙台ノ執政。）ニ出會、敗兵奥羽ヘ依頼、倶ニ大議ヲ謀リ候事ヲ約シ、來着之由相答申ゐ。依レ之氏家等此事ヲ中村ヘ報知仕、古田是ヲ仙臺ニ告テ、其手ヲ合併、先棚倉應援ニ相備申候。

又戊辰事情概旨ニ云、初參政市川宮内ノ仙臺ニ說クヤ、仙ノ重臣已ニ歸順ヲ決スト雖、會々舊幕海軍將榎本和泉陸軍將松平太郎等開陽回天等ノ軍艦數艘ヲ以テ仙城ニ至リ、盛ニ二本松ヲ進擊スルノ策ヲ議ス。會人諏訪常吉小野權之丞力メテ之ヲ贊成ス。仙人見レ其兵勢衆盛一也、大喜謂、成功日ヲ指シテ可レ竢也。是以仙之重臣等、内國人之已ヲ賣ムルヲ恐レ、外幕兵ノ變ヲ爲スヲ憚リ、口歸順ノ說ヲ發スルニ忍ヒス遲疑スル者數日。

又南摩綱記筆記云、八月晦、南摩八之丞寒風澤ニ至リ德山君（原註、安井八郎、又德山四郎左衛門ト稱ス。即チ元閣老板倉伊賀守候。）及ヒ諏訪伊助柏崎才一ト共ニ開陽艦ニ至リ、榎本武揚ニ面シテ曰、諸藩ト謀テ二本松城ヲ進擊シ、若松城ノ圍師ヲ擊ントス、兵寡シ、請フ援兵ヲ出セト。榎本曰、余江戸海ヲ發シテヨリ鹿島海ニテ大風浪ニ値ヒ、開陽艦ハ梶ヲ折リ回天艦ハ檣ヲ折リ、兩艦ニテ牽キ來レル咸臨舶及某舶ハ牽繩ヲ絶チテ之ヲ放ツ、今其存亡ヲ知ラス、右ノ二舶ニ陸軍隊及砲彈藥諸器械ヲ載置タリ、今此兩艦ハ艦中所用ノ人ト器械而已ナリ、陸兵少々乘來レトモ皆不錬ニテ事ヲ成スニ足ラスト。余强テ之ヲ乞フ。榎本曰、然ラハ五十人ヲ撰ヒテ艦中所用ノ砲及ヒ金ヲ貸シテ出スヘシト。

九月朔、德山君及仙臺藩相松本要、我諏訪伊助柏崎南摩等、仙臺城下軍議所ニ至ル。榎本佛郎亞ノ教主（主蓋師ノ誤。）ブリユーネ及某ヲ拉テ共ニ至リ、諸同盟藩士ヲ集メテ會議スブリユーネ戰法ヲ教テ曰、土人ニ多ク金ヲ與ヘテ探索セシメ、敵兵ノ某所ハ何人、某所ハ何人アリト、其多少及每日夜ノ事狀ヲ審知シ、又土地ノ形勢ヲ熟知シ、我兵分配ノ多少、胸壁ノ築造、番兵斥候ノ用法等ヲ精密ニスヘシト。手自圖畫ヲ寫シテ指示ス。又曰、奥羽同盟ノ兵凡幾何アリヤ、諸藩士各其本國ノ兵數ヲ略考シテ答フ。之ヲ合スレハ大凡五萬人アリ。ブリユーネ曰、其半ヲ用ユルモ可ナリ、皆能吾言ヲ用ヒ、海陸並進マハ不日ニ、西軍ヲ攘ヒ、江戸ヲ復シ、西京ニ至ルコト難キニ非ス、請フ諸君ト詳議セン、而今會津ヲ救助スルハ眉ヲ焚ノ急ナリ、速ニ兵ヲ出シテ圍城ヲ救ヒ、陷ラサル策ヲナシ、其間ニ大軍ヲ發シテ大事ヲ成スヘシト。榎本等

之ヲ助ク。八之丞卽夜福島ニ至ル。

三日。長岡敬次郎榎本カ出セシ兵五十人ト共ニ福島ニ至ル。至レハ則米澤兵三百人餘福島ニ至リテ降謝ヲ說ク。

又麥藪錄ニ云、戊辰之秋八月二十日、我德川ノ海軍大擧江戸海出船、北方ニ向テ航セシニ、同二十三日上總洋ニ至リ颶風ニ會ヒ、衆船悉ク離散、本艦開陽モ三檣ヲ損シ揖ヲ失ヒ、洋中ニ漂フ三日、漸クニシテ二十六日仙臺領ヘ乘付。此他ノ諸船ハ、日ヲ經テ前後ニ來着ス。是ヨリ先美賀保丸ハ、大損ノ爲メ銚子岬暗礁ニ觸レ破壞シ、咸臨丸ハ大損、遂ニ駿河ヘ乘廻セシト云。

又苟生日記略ニ云、八月二十一日、天微晴風逆、朝第五時鹿島洋ニ抵ル、風雨益烈敷、舟中動搖、及夜怒浪掀天、舟更動搖、雨亦急。

廿二日、風雨不休、暴風愈烈敷、舟洋中ニ漂フ。夕第四時頃ヨリ風少敷退ク。

廿三日、依然風雨、第六時西方僅ニ山ヲ見ル。午後第三時雨休風猶急、舟却テ東走、夜復雨。

廿四日、風漸收雨隨微。午後第二時半、奥州松島ニ達ス。第三時石濱岸ニ卸錨、西東ノ戰、近頃西軍勿來關ヨリ入ル者及海ヨリ進ム者既ニ中村城ヲ襲取

リ、殆ト當侯之治所ニ迫リ、又大道ハ既ニ八町驛ニ及ヒ、北越ハ新戸モ又彼ノ手ニ入ルト云フ。前途豈可不歎息哉。

廿五日。微雨微寒、布島ニ上ル。彰義兒依舊無狀、可惡矣。

廿六日。晴ソンデイ佐政中長ト桂島ニ至ル。此時擧目、都下人島中ニ滿チ、狀態頭底偷安、只々歎息スル耳。雨駸々下ル。第二時後回天着岸、大風濤ノ爲メ桅檣盡ク破折漸クニシテ來ルト云フ。開陽及ヒ其他未相知、出帆過期此之如キニ至レリ。歎中ノ歎ト謂フヘシ。

廿七日。雨。

廿八日。雨未休、桂島ニ上ル。第二時開陽着、東名濱卸錨。是又風浪ノ爲メ楫ヲ折大ニ困スト云フ。蟠龍神速・美賀保・咸臨未タ所在ヲ知ラサルナリ。

元年〇明治。八月廿九日

品川沖ヘ碇泊ノ德川龜之助軍艦幷帆前船等八艘、當月廿日夜無屆何方ヘカ出航候旨、從東京申來リ候。既ニ龜之助ニ於テハ恭順罷在、且軍艦乘組ノ者ヨリ歎願ノ趣被聞召屆、以格別ノ御趣意、右軍艦等被下置候儀ニ付、決テ粗暴ノ擧動有之間敷候處、如何ノ次第ニ候哉、猶此上暴動候テハ、主家ニモ

相係候ノミナラス、朝廷御多端ノ折柄、紛擾ヲ釀出シ、不容易事ニ候間、見付次第篤ト糺問ノ上、其子細可申出候。萬一暴動ニ及候ハヽ、發砲擊挫不苦候旨、御沙汰候事。誌

——太政類典

品川沖碇泊有之ゐ徳川龜之助○家達。所持之軍艦幷蒸氣運送船共、都テ八艘、乘組榎本釜次郎○武揚。以下、去ル十九日夜、品川脫去ニ及ゐ旨、別紙之通龜之助重役共ヨリ届出ゐ。元來右船之儀、始終品川沖ニ碇泊有之、主人慶喜謹愼之意ヲ體シ、猥ニ揚碇仕間敷旨、屹度御請申上ゐ處、右等妄動脫走致シ、剩ヘ奉對天朝、悖慢不敬之殘書等致置、全反亂之所業、難爲捨置ゐニ付、別紙之通、徳川重役共ヘ御沙汰被仰付ゐ間、各藩領海等ヘ相廻ゐハヽ、早々注進可申若致手向ゐ節ハ、人數ヲ以討取不苦ゐ旨、兼テ相心得可申條、被仰出ゐ事。（別紙ハ、下二通ヲ云フ。）

但、右之趣、條約各國ヘモ、夫々御達相成ゐ事。　戊辰八月廿四日　管内各藩ヘ御達。鎭將府日誌。

脫去船名

開陽　回天　蟠龍　千代田形　長鯨丸　美賀保丸　神速丸　咸臨丸

○

品川碇泊罷在ゐ當家軍艦幷蒸氣運送船トモ、去十九日夜何方ヘ歟立去申ゐ。右者私共ニ於テ進退相達ゐ儀ニハ無之ゐ間、早々行先探索仕、相分リ次第、追々可申上ゐ樣可仕ゐ。且軍艦頭榎本釜次郎、勝安房其外ヘ宛差越ゐ書面之趣ニテハ、都テ悖慢不敬之至、殊ニ名分相辨不罷在次第、畢竟私共不行届ヨリ右樣立至リゐ段、甚以奉恐入ゐ儀ニ付、猶取調可申上奉存ゐ得共、先此段不取敢御届申上ゐ。　駿河藩

八月　平岡丹波　淺野次郎八　織田和泉　勝安房　山岡鐵太郎

○

品川碇泊之軍艦蒸氣運送船共、去十九日夜致脫出ゐ趣、並右船乘組榎本釜次郎殘書等指出ゐ處、全奉對天朝、悖慢不敬、名分不相辨、慶喜謹愼之意ニ戻リ、妄動潛亂之所業ニ及ヒゐ段、其方共不行届ヨリ右樣立至ゐ儀、深奉恐入ゐ趣ハ聞届ゐ得共、右脫走之者擧動顚末ニ依リゐテハ、徳川家之大事ニモ致關係ゐ儀ニ付、差向鎭撫之道如何樣相立ゐ心得ニ有之ゐ哉、屹度可申上

旨、被仰出ゐ事。

尚以、右船乗組一手之者、兼テ元藝州邸ニ在留、右脱走之節居殘ゐ者、嚴重始末糺問之上、可申上ゐ。

八月（駿河藩重役ヘ御達○同日田安中納言松平確堂ヘ御達書ハ、同文ニ付略ス。）

○

品川沖碇泊有之ゐ德川龜之助所持之軍艦並蒸氣運送船共都ゐ八艘、乘組榎本釜次郎以下、去ル十九日夜、品川脱走ニ及ゐ旨、別紙之通、龜之助重役共ヨリ届出ゐ。元來右船之儀始終品川ニ碇泊有之、舊主慶喜謹愼之意ヲ體シ、猥ニ揚碇致間敷旨、龜之助重役共ヨリ、兼ゐ屹度御受申上ゐ末、忽然脱走ニ及、剩ヘ奉對天朝、悖慢不敬之書面等殘置ゐ儀、全反亂之所業ニテ、勿論主命ヲ受スシテ無故致脱走ゐ者、畢竟海賊之所業ヲ働ゐハ必然ニ付、別紙之通、龜之助重役ヘ御掛合被仰付ゐ間、右之趣各國公使ヘ其官ヨリ通達致シ、萬一開港場ヘ襲來、外國人ヘ對シ、不法之擧動有之ニ於テハ、時機ニ應シ如何樣之所置致ゐテモ不苦、若又渡海等致ゐハヽ、各國政府ニ於テモ、嚴重拒絶相成兩國政府條約交際之御趣意混雜無之樣、取計可致旨、被仰出ゐ事。　八月（神奈川府ヘ御達別紙同上。）

東京入港船舶査檢

東京入港船舶査檢事蹟

十九日○明治元年八月○中略。榎本武揚、軍艦運漕船八隻ヲ奪ツテ、品川海ヲ去リ、書ヲ留メテ時政ヲ誹議ス。

二十一日○中略。鎮將府、榎本武揚ノ脱走セシヲ管内ニ布告シ、其船艦沿海ニ到ル者ハ、之ヲ抑留セシム。又之ヲ同盟各國ニ報ス。　——明治史要

廿二日○慶應四年（紀元二五二八年）八月。會計局・東京府ニ達シテ、同局廻漕方ヲシテ東京入港ノ船舶ヲ査檢セシム。○府治類纂。

——法令類纂

東京入港船舶査檢　府治類纂ニ據レハ、

（諸國ヨリ東京ヘ入港ノ船員並荷物出入高改方ニ付、廻船問屋已來廻漕方ヘ附屬之儀、會計局ヨリ達書）

戊辰（十六）○慶應四年）八月廿二日來

東京府

諸國より東京入港之船員幷積荷物出入之多寡改方之儀、是迄廻船問屋相改來ゐ處、御廢止相成、自來於當局改方被仰付ゐ。就ゐを右問屋之儀を、以來廻漕方に附屬致し、右事件取扱ゐ積申渡ゐ。依之爲御心得、此段及御達置候。

會計局

辰○慶應四年。八月

附記 東京海軍所收公

〔附記〕東京海軍所收公　二十五日〇明治元年八月。大總督府、東京海軍所築地ニヲ收ム。――明治史要

武家所有船極印

廿九日〇慶應四年(紀元二五二八年)八月。令シテ、武家所有ノ商船遊船ニモ極印ヲ附シ、納稅ノ義務ヲ負ハシム。〇府治類纂。

武家所有船極印事蹟

武家所有船極印　府治類纂ニ據レハ、左ノ如シ。

川船御極印之儀、德川家御政權之砌ゟ、手船之分御極印無之、其餘三家三卿共、手船幷餘分領知之船ニ夫〻家〻之極印打渡シ、江戸通行仕來ゟ之處、今般御一新ニゟ列藩ニ被仰付ゟニ付ゟハ、水戸・尾張・紀州・田安・一橋・清水ハ勿論、德川家ニゟも、手船幷領分村々江戸內川往來之船々、向後諸藩並之通、川舟御極印相渡、御年貢取立、領分之船ハ役銀共上納被仰付ゟ哉。右之通被仰付ゟハヽ、家々手船有數、幷領分ヨリ江戸往來之船數等、其筋ニ御掛合御座ゟ樣仕度、此段奉伺ゟ。以上。　辰〇慶應四年。六月　元〆三人印

御勘定方

舊來尾紀水三藩、幷旗下之名前ヲ借り、無稅ニゟ改も無之船數多有之ゟ處、近來右樣之名ヲ僞リ、惡徒共不所業之次第も有之之趣、不取締之儀ニゟ間、以來軍船之外、假令武家所持之分と雖モ、商船遊船之向不殘相改、稅銀上納改濟之分ハ、目印之燒印相附可申、無印之舟決ゟ往來不相成ゟ事。　八月廿九日

舊來尾紀水三藩幷舊旗下之名前ヲ借、船所持之者數多有之之趣ニ相聞、近來右等之舟ニゟ、惡徒共不所業之次第も有之之趣、不取締之義ニ付、以來改之義被仰出ゟ間、右類之舟ハ勿論、市中日除船之分、早々所持之者ヨリ川船御役所へ申出、名前書替、改濟之目印燒印可申請、以後燒印無之舟、川筋通行不相成ゟ。若等閑ニ差置不申出舟ハ、川船改之者差遣シ、吟味之上、嚴重之御沙汰可有之間、心得違無之樣、町々船持共へ不洩樣早々可申渡もの也。

辰九月　御川舟役所

何町何丁目名主。家主。

口上之覺書

一、德川家始メ三家三卿共、東京幷領分ニゟ相用申ゟ手船員數、川舟方へ達無之ニ付、相分リ不申ゟ。

但、水戸手船之高瀨船と十貳艘ト承リ及申ゟ。田安手船之高瀨舟ハ十四艘

之達有之ハ。

一、尾州極印川筋ヘ乘入ハ獵船八十九艘。

一、紀州極印川筋ヘ乘入ハ押送舟四十艘。

一、同極印ニハ本小田原町專太郎預リ之押送舟三艘。

一、同極印ニハ南小田原町彖吉預リ之獵船二艘。

右四廉ハ、川舟方ヘ達有之ハ。

一、水戸極印川筋ヘ乘入ハ高瀨船、幷領分所稼船之員數、先別達有之相分兼申ハ。尤三百艘餘モ可有之見込ニ御座ハ。

川船方

辰九月

辰九月七日日除船預リ人共一同兼ネ呼出有之、千早殿榮左衞門殿仙藏殿大五郎殿御出張ニテ被仰渡ハ事。

日除船預リ人共ヘ申渡之覺

武家寺院其外所持日除船預リ人共、屋鋪用之外自分稼之節ハ御定法之趣相守、船稼可致之所、猶春中舊政府ヨリ市在ヘ相觸ハ節、船之形狀幷戸障子艪數之儀ハ勝手次第たるへく、年貢役銀貳倍增相納へく旨有之ハ處、今般王政御一新ニ就テハ、御年貢役銀貳倍增ハ御差免、船定法之儀ハ、先規之通相守稼方可致旨、猶以相觸置、然ル處一旦差免ハ流弊ニテ、近來日除船稼方定法ニ相振レ、猥之稼方致シハ趣相聞、以之外之儀ニ付以來急度相改可申旨、鎭將府ヨリ御沙汰之趣モ有之ハ間、當今速ニ相改可申ハ。尤向後猥之稼致シハ趣於相聞ハ、船主ハ勿論其方共ヘモ急度沙汰可及ハ間、兼テ差出置ハ請證文之通相心得、正路ニ渡世可致ハ事。

川船御年貢錢盛附定

一、梁間長二間二尺五寸迄　此御年貢長錢百五十文。

一、同　長二間三尺五寸迄　此御年貢長錢貳百文。

一、同　長二間五尺五寸迄　此御年貢長錢貳百五十文。

一、同　長三間一尺五寸迄　此御年貢長錢三百文。

一、同　長三間三尺五寸迄　此御年貢長錢三百五十文。

一、同　長三間五尺五寸迄　此御年貢長錢四百文。

一、同　長四間壹尺五寸迄　此御年貢長錢四百五十文。

一、同　長四間三尺五寸迄　此御年貢長錢五百文。

一、同　五間四寸迄　　此御年貢長錢五百五十文。

但五間五寸以上ハ、茶船たりとも長横間入事、小船ニ付世事あらハ長横間入ハ事。

右之通御座ハ。以上。

辰十月

○印

附記、一　川船役所掛員及所管

〔附記、一〕　川船役所掛員及所管

右ハ、御藏渡高扶持是迄之通被下ハ旨、鎮臺輔烏丸殿ヘ申上之上、判事横川源藏與頭吉川榮左衞門ヘ申渡ハ段、青山大五郎一同ヘ申達ス。

辰〇慶應四年。六月廿三日

川船御役所附手附一同

本文長横間入候船之分ハ、五尺壹間ニメ御年貢長錢百文ツヽ盛附候事。

但、三尺ニ不レ滿分ハ五十文盛附事。

○印

下ケ札

川船御極印打渡、又ハ鑑札等相渡來り申ハ國々之儀、唯今迄ハ關東八ヶ國幷伊豆・駿河合十箇國ニ御座ハ處、此度駿河以東十三ヶ國鎮將府御管轄ニ付ハ、舊規ニ不レ拘、是迄之十ヶ國之外、甲斐・陸奥・出羽三ヶ國之儀モ、關東同樣川筋沼内船々ニ至ハ迄、川舟御極印打渡、又ハ鑑札請取相稼ハ樣、公平之御所置可レ被ニ仰付一哉奉レ存ハ。左モ無ニ御座一ハあハ、御管轄國々之内不同有レ之、人心之疑惑も自然相發可レ申哉ニ奉レ存ハ。右之通被ニ仰付一ハハヽ、三ヶ國知縣事方、幷諸藩ヘ其段支配限り御觸渡之義、被ニ仰渡一ハ樣仕度、尤右國々川筋沼内廻村船改方之儀ハ、追あ程能時節ヲ見計、猶又奉レ伺ハ心得ニ御座ハ。此節差向三ヶ國之義、八州外貳ヶ國同樣、川舟取扱之儀被ニ仰渡一ハ樣仕度、此段申上ハ。

但、駿河之儀ハ、當時有船無レ之ハ。陸奥之儀ハ、先年白川郡黑川新田ヨリ野州那賀川ヘ試通船有レ之ハ之節、川船方御年貢取立、鑑札等相渡申ハ儀モ御座ハ。

以上。

辰八月　　佐藤祥莊　中村田作

川船改番所定書及役銀取立方

廻漕掛

御勘定方　鈴木道四郎　伊藤一作

川船改番所定書及役銀取立方

——府治類纂

（川船改番所定書并役銀取立方伺）

覺

一、通行之船々、不ㇾ係ニ晝夜、番所之改を請可ㇾ申、若忍ひ通りゐをのハ、曲事たるべき事。

一、他之船之御年貢手形借りゐゑ於ては、貸人借主とも曲事たるへき事。

右之條々、堅く可ニ相守一もの也。

年號月　東京府

川船年貢并役銀取立方仕法、取調可ニ申上一旨、被ニ仰渡一ゐニ付、勘辨仕ゐ處、當時川船之儀ハ、惣高凡四千貳百四拾九艘有ㇾ之、船名之儀も數多御座ゐ間、船之大小ニ寄、凡五大力船壹艘ニ付、年貢長錢六百五拾文、役銀五拾匁壹分五厘位ニゐ、凡年貢長錢千百三十四貫五百四拾四文、役銀百壹貫五百四十壹文六分八厘八毛、都合壹ヶ年金ニメ千八百拾兩貳分永四拾貳文餘ニ相成、年貢之儀も、割增等も無之、役銀之儀も、追々增方相成、一同難澁を唱ゐ折柄、當四月〇明治二年。中、御一新ニ付、以前之役銀も三割增之高ニ被ニ仰渡一、一同安業罷在ゐ儀ニゐ、此上役銀等增方相成ゐハ、下々難儀可ㇾ致哉も難ㇾ計奉ㇾ存ゐ。然ル所無極印船不ㇾ少、右を取調之上、改極印打立、年貢役銀等御取立相成可ㇾ然哉ふ奉ㇾ存ゐ間、川船方へ御下ヶ被ニ仰渡一可ㇾ然哉。此段相伺申ゐ。

巳〇明治二年。五月二日腰掛ヶ張出ゐ事。

覺

一、役永錢毎年七月より十一月限り上納たるへき事。

但、金札上納之事。

一、上極印二月限りたるへき事。

巳四月

言字極印船課税

——府治類纂

東京川々へ入込ゐ大小船言ノ字極印打渡有ㇾ之ゐ無年貢之分、税銀取立方之儀ニ付、先達ゐ御布告案添云々申進ゐ處、會計官關係之筋ニ付、同官へ御打合相成ゐ書面御廻シ被ㇾ遣ゐニ付、猶當府ヨリ別紙之通會計官へ引合ゐ

よひゐ處、存寄無之趣挨拶有之ゐ間、然ル上ハ御官御差支も無之ゐハヽ、兼て御引合およひ置ゐ通、早々御布告相成ゐ様致し度、依之別紙寫相添申進ゐ也。

六月八日〇明治二年。　東京府判事

民部官判事御中

御布告案

伊豆・相模・武藏・安房・上總・下總國海岸村々幷東京町々ニて所持致しゐ船々之内、同所川筋へ乘入相稼ゐ言ノ字極印打渡ゐ分、向後川船定之通、船税上納申付ゐ間、東京府川船役所へ申出、改極印請之、當巳年〇明治二年。ヨリ船税上納之筈可相心得ゐ事。

但、是迄本文船々ヨリ各役所へ冥加上納致し來ゐ分ハ、免除之積り可被取計ゐ。

右六ケ國海岸附村々へ不洩様觸達可有之ゐ事

巳〇明治二年。七月十二日　大藏省

神奈川縣　韮山縣　品川縣　宮谷縣　小菅縣　葛飾縣　御中

伊豆・相模・武藏・安房・上總・下總國海岸村々竝東京町々ニあ所持致しゐ船々之内、同所川筋へ乘入相稼ゐ言ノ字極印打渡ゐ分、向後川船定之通、船税上納申付ゐ間、東京府川船役所へ申出、改極印受之、當巳年ヨリ船税上納之筈可相心得ゐ事。

但、是迄本文船々ヨリ各役所へ冥加上納致シ來ゐ分ハ、免除之積可被取計ゐ。

右六ケ國海岸附村々へ不洩様觸達可有之ゐ也。

巳〇明治二年。七月十二日　大藏省

一、同日前文町觸相成。

伊豆・相模云々。

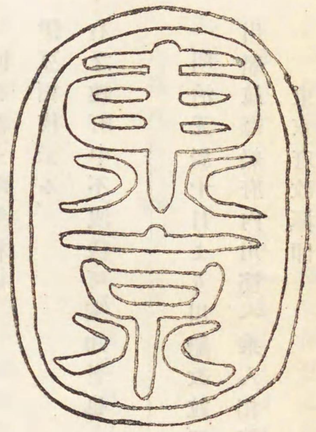
右之趣町中不洩様可觸知者也。

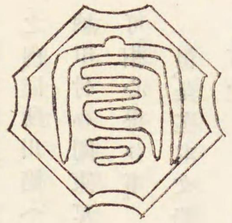
一、明治元辰十月より川船改竝船税御收納取立方、東京府取扱ニ付、關八州川船竝海船府内川筋へ乘入相稼ゐ分ハ、改極印打ゐ事。

東京府改極印

一、川船極印打渡　毎月二七五十定日

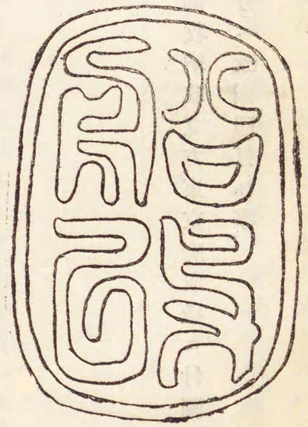
川船極印文字並間尺定法

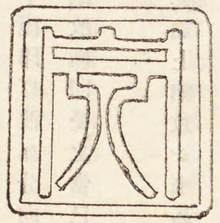




船

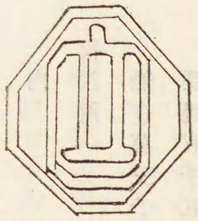
長貳間ヨリ
三間五尺五寸迄





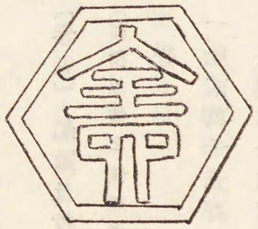
船

長三間五尺六寸ヨリ
七間貳尺五寸迄



船

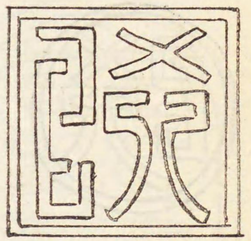
長七間三尺ヨリ
十間マテ



同

長拾間壹尺以上

海獵茶船、獵船、假日覆船、肥積船、傳間造土船、雜喉取田船、六品之船ヒ、定極印之外ニ目記シ極印ニ打。



耕作船定極印之外ニ目記シ極印打。

〔參考〕船數及役銀

（船役銀等之儀調書）

覺

一、船貳萬千五百八拾壹艘　卯年（慶應三年）惣高

長錢八千四百四拾五貫四百文。

内

役銀附

船壹萬三千七百七拾五艘。

長錢五千五百七拾五貫四百文。

役銀四百九拾九貫五拾四文五厘四毛。

内

船壹萬貳千八百六拾貳艘。　卯八月より取立ゐ分

長錢五千八拾七貫九百文。

船八百六十三艘。　不納之分

長錢四百八拾七貫五百文。

御年貢計

船七千八百五拾六艘。

長錢貳千八百七拾貫文。

内

船七千三百八拾三艘。

長錢貳千六百八拾七貫九百七拾五文。　卯八月より取立ゐ分

船四百七拾三艘。　不納之分

長錢百八拾貳貫貳拾五文。

覺

一、船千四百八拾四艘。
　長錢千四百七拾四貫九百文。

川船年貢取立來由

（川船年貢御取立方來由調并極印文字雛形其外）

覺

一、川船御年貢取立之儀起立相分不申ハ得ども、天正年中大木才兵衛川船奉行相勤ハ旨書留有之、已後川船奉行連綿相續申ハ處、享保年中鶴飛驛川船一件御用被申付、代々川船改役相勤、寛政年中代々役相止、時々川船改役相代り、當二月（慶應四年）迄吉田半左衛門相勤申ハ處、廢役ニ相成ハ跡、廻漕掛り勘定方日々交代ニ成役代り相勤申ハ處、四月中別紙之通大原前侍從殿陣營ニおゐて被申渡ハ後、勘定方相詰不申ハ。

一、御役所附手附手代差配役共、別紙御請書並明細書共差出申ハ。

一、右人數丈鎮臺府御印鑑御渡可被下ハ。

一、川船御役所之義、日々朝四ツ時出勤、夕八時退出、尤御用有之ハへば、常刻より早め出勤、居殘等いたし相勤申ハ。

一、日々二人ヅヽ當番を定泊番ハたし、御用相勤申ハ。

一、御極印相渡定日之義ハ、毎月二日七日十一日十六日廿一日廿六日相渡申ハ間、御立合之衆、朝四ツ時迄ニ御出勤有之ハ樣仕度ハ。

一、船々間尺改方並極印等之儀、置證文寫シ別紙差出申ハ。極印之義御改相成ハハヽ、雛形を以御差圖可被下ハ。

一、武家手船商人船ハ相渡ハ手形、是迄之書振別紙差出申ハ。

一、橋場船改番所ニ為入津米酒改來りハ間、是迄之通相改、石數樽數書上ハ樣可仕ハ。

一、文久二戌年分御勘定帳貳冊、爲御見合差上申ハ。

右之通申上ハ。相洩ハ義ハ追々可申上ハ。已上。

辰（慶應四年）六月

伊藤一作
鈴木道四郎
中村田作

川船御年貢盛附置證文

六尺間ヲ以長計打御年貢定ハ船之分

茶船
一、百五十文　長貳間貳尺五寸迄。
一、同　貳百文　同貳間三尺五寸迄。
一、同　貳百五拾文　同貳間五尺五寸迄。
一、同　三百文　同三間壹尺五寸迄。
一、同　三百五拾文　同三間三尺五寸迄。
一、同　四百文　同三間五尺五寸迄。
一、同　四百五十文　同四間壹尺五寸迄、
一、同　五百文　同四間三尺五寸迄。
一、同　五百五十文　同五間五寸迄。

但、五間五寸已上之茶船ありと云共立間可ㇾ入事。

小船ニあもせ以下あらは立横可ㇾ入事。

一、湯船

是ハ艫之火焚所外船梁ヨリ舳之風呂箱外舟梁迄六尺間ヲ以立間計打。

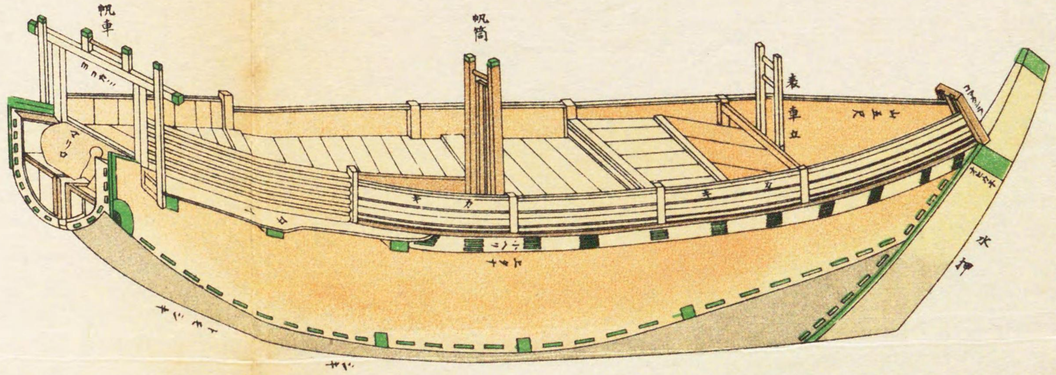
一、水船

是ハ艫舟梁ヨリ舳ハ舟之敷有ㇾ之處迄六尺間ヲ以立間計打。

五下船

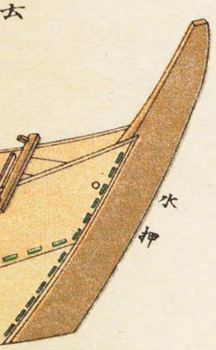
上口九　長三丈六七尺
　　横八九尺

武蔵　伊豆　相摸
安房　上總辺海付ニ有之



押送船

所ニヨリ
縄舟生魚小舟ト云

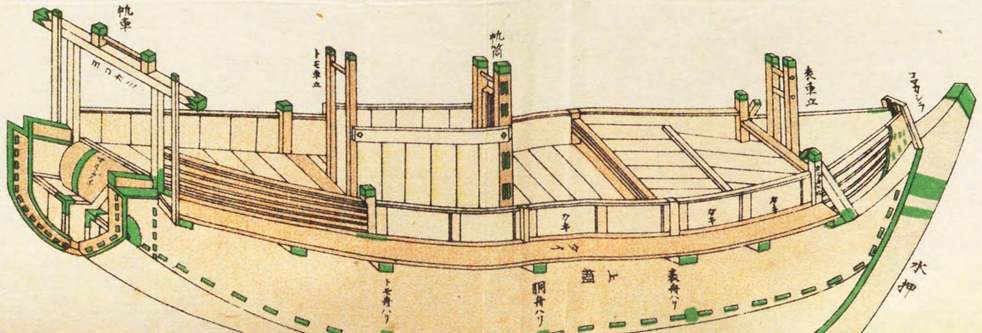


五太力船

所ニヨリ鰯商舟
小鰯舟トモ云

武蔵　伊豆　相模
安房　上總辺海付ニ
有之

上口九　長　三丈一二尺ヨリ
　　六丈四五尺迄
　　横　八九尺ヨリ
　　一丈六七尺位



箱造

但

舳機蓋
艙床

上口九

上